



# System Management Services (SMS) 1.3 リファレンスマニュアル

---

Sun Microsystems, Inc.  
4150 Network Circle  
Santa Clara, CA 95054 U.S.A.

Part No. 817-1341-10  
2003 年 1 月, Revision A

コメントの宛先: [docfeedback@sun.com](mailto:docfeedback@sun.com)

Copyright 2003 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, CA 95054 U.S.A. All rights reserved.

米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) は、本書に記述されている製品に採用されている技術に関する知的所有権を有しています。これら知的所有権には、<http://www.sun.com/patents>に掲載されているひとつまたは複数の米国特許、および米国ならびにその他の国におけるひとつまたは複数の特許または出願中の特許が含まれています。

本書およびそれに付属する製品は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社による事前の許可なく、本製品および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品のフォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権法により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

本製品は、株式会社モリサワからライセンス供与されたリュウミン L-KL (Ryumin-Light) および中ゴシック BBB (GothicBBB-Medium) のフォント・データを含んでいます。

本製品に含まれる HG 明朝 L と HG ゴシック B は、株式会社リコーがリョービマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。平成明朝体 W3 は、株式会社リコーが財団法人日本規格協会 文字フォント開発・普及センターからライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。また、HG 明朝 L と HG ゴシック B の補助漢字部分は、平成明朝体 W3 の補助漢字を使用しています。なお、フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun, Sun Microsystems, docs.sun.com, Sun Fire, OpenBoot PROM は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems 社の商標もしくは登録商標です。サン・ロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

ATOK は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。ATOK8 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK8 にかかる著作権その他の権利は、すべて株式会社ジャストシステムに帰属します。ATOK Server/ATOK12 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK Server/ATOK12 にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザーインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

Use, duplication, or disclosure by the U.S. Government is subject to restrictions set forth in the Sun Microsystems, Inc. license agreements and as provided in DFARS 227.7202-1(a) and 227.7202-3(a) (1995), DFARS 252.227-7013(c)(1)(ii) (Oct. 1998), FAR 12.212(a) (1995), FAR 52.227-19, or FAR 52.227-14 (ALT III), as applicable.

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

本書には、技術的な誤りまたは誤植のある可能性があります。また、本書に記載された情報には、定期的に変更が行われ、かかる変更は本書の最新版に反映されます。さらに、米国サンまたは日本サンは、本書に記載された製品またはプログラムを、予告なく改良または変更することがあります。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法 (外為法) に定められる戦略物資等 (貨物または役務) に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社による事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典:	System Management Services (SMS) 1.3 Reference Manual Part No: 816-5319-10 Revision A
-----	---



Adobe PostScript

# 目次

---

Intro(1M)	1
addboard(1M)	5
addcodlicense(1M)	13
addtag(1M)	15
cancelcmdsync(1M)	18
codd(1M)	23
console(1M)	26
dca(1M)	31
deleteboard(1M)	33
deletecodlicense(1M)	40
deletetag(1M)	42
disablecomponent(1M)	44
dsmd(1M)	50
dxs(1M)	52
enablecomponent(1M)	54
esmd(1M)	60
flashupdate(1M)	63
fomd(1M)	69
frad(1M)	70

help(1M) 71  
hpost(1M) 73  
hwad(1M) 75  
initcmds(1M) 76  
kmd(1M) 81  
mand(1M) 84  
mld(1M) 86  
moveboard(1M) 89  
osd(1M) 99  
pcd(1M) 100  
poweroff(1M) 103  
poweron(1M) 106  
rcfgadm(1M) 110  
reset(1M) 129  
resetsc(1M) 132  
runcmds(1M) 135  
savecmds(1M) 137  
setbus(1M) 142  
setdatasync(1M) 146  
setdate(1M) 150  
setdefaults(1M) 153  
setfailover(1M) 157  
setkeyswitch(1M) 159  
setobpparams(1M) 164  
setupplatform(1M) 168  
showboards(1M) 174  
showbus(1M) 184  
showcmds(1M) 187

showcodlicense(1M) 189  
showcodusage(1M) 192  
showcomponent(1M) 198  
showdatasync(1M) 204  
showdate(1M) 207  
showdevices(1M) 209  
showenvironment(1M) 215  
showfailover(1M) 227  
showkeyswitch(1M) 231  
showlogs(1M) 233  
showobpparams(1M) 237  
showplatform(1M) 239  
showxirstate(1M) 250  
smsbackup(1M) 255  
smsconfig(1M) 258  
smsconnectsc(1M) 273  
smsinstall(1M) 276  
smsrestore(1M) 280  
smsupgrade(1M) 283  
smsversion(1M) 288  
ssd(1M) 293  
tmd(1M) 294  
wcapp(1M) 295



# はじめに

---

リファレンスマニュアルは、初めて SunOS を使用するユーザーやすでにある程度の知識を持っているユーザーのどちらでも対応できるように解説されています。このマニュアルを構成するマニュアルページは一般に参照マニュアルとして作られており、チュートリアルな要素は含んでいません。それぞれのコマンドを実行すると、どのような結果が得られるかについて、詳しく説明されています。

---

## 概要

SMS マニュアルページの内容について以下に簡単に説明します。

- セクション 1M は、システム保守や管理用として主に使われる各コマンドをアルファベット順に説明します。

以下に、このマニュアルの項目を表記されている順に説明します。ほとんどのマニュアルページが下記の項目からなる共通の書式で書かれていますが、必要でない項目については省略されています。たとえば、記述すべき注意点がコマンドにない場合などは、「注意事項」という項目はありません。各マニュアルページの詳細は各セクションの intro を、マニュアルページの一般的な情報については man(1) を参照してください。

名前	コマンドや関数の名称と概略が示されています。
形式	<p>コマンドや関数の構文が示されています。標準パスにコマンドやファイルが存在しない場合は、フルパス名が示されます。字体は、コマンド、オプションなどの定数にはボールド体 (<b>bold</b>) を、引数、パラメタ、置換文字などの変数にはイタリック体 (<i>Italic</i>) または &lt;日本語訳&gt; を使用しています。オプションと引数の順番は、アルファベット順です。特別な指定が必要な場合を除いて、1文字の引数、引数のついたオプションの順に書かれています。</p> <p>以下の文字がそれぞれの項目で使われています。</p> <p>[ ] このかっこに囲まれたオプションや引数は省略できます。このかっこが付いていない場合には、引数を必ず指定する必要があります。</p> <p>... 省略符号。前の引数に変数を付けたり、引数を複数指定したりできることを意味します (例: 'filename...')。</p> <p>  区切り文字 (セパレータ)。この文字で分割されている引数のうち1つだけを指定できます。</p> <p>{ } この大かっこに囲まれた複数のオプションや引数は省略できます。かっこ内を1組として扱います。</p>
機能説明	<p>コマンドの機能とその動作について説明します。実行時の詳細を説明していますが、オプションの説明や使用例はここでは示されていません。対話形式のコマンド、サブコマンド、リクエスト、マクロ、関数などに関しては「使用法」で説明します。</p>
オプション	<p>各オプションがどのように実行されるかを説明しています。「形式」で示されている順に記述されています。オプションの引数はこの項目で説明され、必要な場合はデフォルト値を示します。</p>



オペランド	コマンドのオペランドを一覧表示し、各オペランドがコマンドの動作にどのように影響を及ぼすかを説明しています。
戻り値	値を返す関数の場合、その値を示し、値が返される時の条件を説明しています。関数が 0 や -1 のような一定の値だけを返す場合は、値と説明の形で示され、その他の場合は各関数の戻り値について簡単に説明しています。void として宣言された関数はこの項では扱いません。
エラー	失敗の場合、ほとんどの関数はその理由を示すエラーコードを <i>errno</i> 変数の中に設定します。この項ではエラーコードをアルファベット順に記述し、各エラーの原因となる条件について説明します。同じエラーの原因となる条件が複数ある場合は、エラーコードの下にそれぞれの条件を別々のパラグラフで説明しています。
使用法	この項では、使用する際の手がかりとなる説明が示されています。特定の決まりや機能、詳しい説明の必要なコマンドなどが示されています。組み込み機能については、以下の小項目で説明しています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• コマンド</li> <li>• 修飾子</li> <li>• 変数</li> <li>• 式</li> <li>• 入力文法</li> </ul>
使用例	コマンドや関数の使用方法も含めた使用例を説明しています。できるだけ、実際に入力するコマンド行とスクリーンに表示される内容を例にしています。例では、その説明、変数置換の方法、戻り値が示され、それらのほとんどが「形式」、「機能説明」、「オプション」、「使用法」の項からの実例となっています。
環境	コマンドや関数が影響を与える環境変数を記述し、その影響について簡単に説明しています。
終了ステータス	コマンドが呼び出しプログラムまたはシェルに返す値と、その状態を説明しています。通常、正常終了には 0 が返され、0 以外の値はそれぞれのエラー状態を示します。

ファイル	マニュアルページが参照するファイル、関連ファイル、およびコマンドが作成または必要とするファイルを示し、各ファイル名について簡単に説明しています。
属性	属性タイプとその対応する値を定義することにより、コマンド、ユーティリティー、およびデバイスドライバの特性を一覧しています。詳細は <code>attributes(5)</code> を参照してください。
関連項目	関連するマニュアルページ、当社のマニュアル、および一般の出版物が示されています。
注意事項	それぞれの項に該当しない追加情報が示されています。マニュアルページの内容とは直接関係のない事柄も参照用に扱っています。ここでは重要な情報については説明していません。

名前	Intro – SMS 管理																												
機能説明	この節では、システム管理ソフトウェアの環境で実行可能なコマンドについて説明します。																												
コマンド一覧	次にサポートされているコマンドを示します。																												
	<table border="0"> <tr> <td>addboard</td> <td>ドメインに対するボードの割り当て、接続、設定</td> </tr> <tr> <td>addcodlicense</td> <td>Capacity on Demand (COD) ライセンスキーをシステムコントローラ (SC) にインストール</td> </tr> <tr> <td>addtag</td> <td>ドメインに対するドメイン名 (タグ) の割り当て</td> </tr> <tr> <td>cancelcmdsync</td> <td>コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除</td> </tr> <tr> <td>codd</td> <td>Capacity on Demand デーモン</td> </tr> <tr> <td>console</td> <td>ドメインコンソールへのアクセス</td> </tr> <tr> <td>dca</td> <td>ドメイン構成エージェント</td> </tr> <tr> <td>deleteboard</td> <td>ドメインからシステムボードの設定を解除し、ドメインから切り離して割り当てを解除</td> </tr> <tr> <td>deletecodlicense</td> <td>Capacity on Demand (COD) ライセンスキーをシステムコントローラ (SC) から削除</td> </tr> <tr> <td>deletetag</td> <td>ドメインに関連付けられているドメイン名 (タグ) の削除</td> </tr> <tr> <td>disablecomponent</td> <td>特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから追加</td> </tr> <tr> <td>dsmd</td> <td>ドメインの状態監視デーモン</td> </tr> <tr> <td>dxs</td> <td>ドメイン X サーバー</td> </tr> <tr> <td>enablecomponent</td> <td>特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから削除</td> </tr> </table>	addboard	ドメインに対するボードの割り当て、接続、設定	addcodlicense	Capacity on Demand (COD) ライセンスキーをシステムコントローラ (SC) にインストール	addtag	ドメインに対するドメイン名 (タグ) の割り当て	cancelcmdsync	コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除	codd	Capacity on Demand デーモン	console	ドメインコンソールへのアクセス	dca	ドメイン構成エージェント	deleteboard	ドメインからシステムボードの設定を解除し、ドメインから切り離して割り当てを解除	deletecodlicense	Capacity on Demand (COD) ライセンスキーをシステムコントローラ (SC) から削除	deletetag	ドメインに関連付けられているドメイン名 (タグ) の削除	disablecomponent	特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから追加	dsmd	ドメインの状態監視デーモン	dxs	ドメイン X サーバー	enablecomponent	特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから削除
addboard	ドメインに対するボードの割り当て、接続、設定																												
addcodlicense	Capacity on Demand (COD) ライセンスキーをシステムコントローラ (SC) にインストール																												
addtag	ドメインに対するドメイン名 (タグ) の割り当て																												
cancelcmdsync	コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除																												
codd	Capacity on Demand デーモン																												
console	ドメインコンソールへのアクセス																												
dca	ドメイン構成エージェント																												
deleteboard	ドメインからシステムボードの設定を解除し、ドメインから切り離して割り当てを解除																												
deletecodlicense	Capacity on Demand (COD) ライセンスキーをシステムコントローラ (SC) から削除																												
deletetag	ドメインに関連付けられているドメイン名 (タグ) の削除																												
disablecomponent	特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから追加																												
dsmd	ドメインの状態監視デーモン																												
dxs	ドメイン X サーバー																												
enablecomponent	特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから削除																												

esmd	環境状態監視デーモン
flashupdate	PROM システムボードの更新
fomd	フェイルオーバー管理デーモン
frad	FRU アクセスデーモン
help	SMS コマンドのヘルプ情報を表示
hpost	Sun Fire 15K/12K の電源投入時自己診断 (POST) 制御系アプリケーション
hwad	ハードウェアアクセスデーモン
initcmdsync	回復するスクリプトを特定するための、コマンド同期記述子の作成
kmd	キー管理デーモン
mand	管理ネットワークデーモン
mld	メッセージロギングデーモン
moveboard	ドメイン間でのシステムボードの移動
osd	OpenBoot PROM サーバーデーモン
pcd	プラットフォーム構成データベースデーモン
poweroff	電源切断の制御
poweron	電源投入の制御
rcfgadm	遠隔構成管理
reset	指定されたドメインのすべてのポート (CPU または I/O) にリセットを送信
resetsc	スペア SC にリセットを送信
runcmdsync	フェイルオーバー後の回復のために、指定されたスクリプトを準備
savecmdsync	フェイルオーバーの後に、スクリプトを再開する場所の指定、およびマーカーの追加

setbus	ドメイン内のアクティブな拡張ボードで動的バスの再構成を実行
setdatasync	データ同期で使用されるデータ適用リストの変更
setdate	システムコントローラ (SC) またはドメインの日付と時刻の設定
setdefaults	直前にアクティブであったドメインのすべてのインスタンスの削除
setfailover	SC フェイルオーバーメカニズムの状態の変更
setkeyswitch	仮想キースイッチ位置の変更
setobpparams	OpenBoot PROM 変数の設定
setupplatform	ドメインの使用可能構成要素リストの設定
showboards	システムボードの割り当て情報と状態の表示
showbus	アクティブドメイン内の拡張ボードのバス構成を表示
showcmdsyc	現在のコマンド同期リストの表示
showcodlicense	Capacity on Demand (COD) ライセンスデータベースに登録されている COD RTU (right-to-use) ライセンスを表示
showcodusage	Capacity on Demand (COD) 資源の現在の使用状況統計を表示
showcomponent	コンポーネントの ASR ブラックリスト状態の表示
showdatasync	フェイルオーバーに対する SMS データ同期状態の表示
showdate	システムコントローラまたはドメインの日付と時刻の表示

showdevices	システムボードデバイスおよび資源使用状況情報の表示
showenvironment	環境データの表示
showfailover	システムコントローラ (SC) のフェイルオーバー状態または役割の表示
showkeyswitch	仮想キースイッチ位置の表示
showlogs	メッセージログファイルの表示
showobpparams	OpenBoot PROM 起動パラメタの表示
showplatform	各ドメインのボード使用可能構成要素リストおよびドメイン状態の表示
showxirstate	プロセッサにリセットパルスを送信後、CPU ダンプ情報を表示
smsbackup	SMS 環境のバックアップ
smsconfig	SMS 環境の設定
smsconnectsc	遠隔 SC コンソールへのアクセス
smsinstall	SMS 環境のインストール
smsrestore	SMS 環境の復元
smsupgrade	SMS 環境のアップグレード
smsversion	SMS ソフトウェアのアクティブバージョンの表示
ssd	SMS 起動デーモン
tmd	タスク管理デーモン
wcapp	wPCI アプリケーションデーモン

名前	addboard - ドメインに対するボードの割り当て、接続、設定
形式	<pre>addboard -d domain_indicator [-c function] [-r retry_count     [-t timeout ]] [-q] [-f] [-y -n] location ...  addboard -h</pre>
機能説明	<p>addboard(1M) は、ドメイン <i>domain_id</i> または <i>domain_tag</i> に対して <i>location</i> の割り当て、接続、設定を行います。</p> <p>ボードは、追加されるドメインで <i>available</i> になっているか、またはそのドメインで <i>assigned</i> になっている必要があります。-c オプションは、現在の設定状態から新しい設定状態へ、ボードの切り替えを指定する場合に使用します。設定状態は、<i>assign</i>、<i>connect</i>、または <i>configure</i> のいずれかとなります。-c オプションが指定されない場合は、デフォルトの設定状態は <i>configure</i> になります。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> addboard はタスクを同期的に実行し、コマンドが完了するまでユーザーに制御を返しません。ボードの電源が入っていないか、またはテストされていない状態で、-c <i>connect configure</i> オプションを指定すると、このコマンドによってボードの電源が投入され、テストされます。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> 1つのボードのみが指定されており、それが自動システム回復 (ASR) ブラックリストファイルに定義されている場合は、addboard はエラーメッセージを表示して終了します。複数のボードが指定されている場合は、addboard は、ボードがスキップ中であることを示すメッセージを表示して次のボードへ進み、最後のボードの場合は、そこで終了します。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> addboard コマンドの実行が失敗しても、ボードは元の状態には戻りません。dxs または dca のエラーメッセージが、ドメインのログに出力されます。エラーが回復可能であれば、失敗したコマンドを再試行できます。回復不可能な場合、そのボードを使用するには、ドメインを再起動する必要があります。</p>

## オプション

次のオプションがサポートされています。

**-c function**

*function* の有効な値は、`assign`、`connect`、および `configure` です。このオプションは、設定状態の切り替えを制御する場合に使用します。それぞれの機能は、その前の状態に基づいて実行されます。たとえば、`configure` は最初に割り当てを行い、次に接続してから設定を行います。

有効な切り替え状態とその意味は以下のとおりです。

**assign**

ボードを論理ドメインに割り当てます。この状態のボードには当該ドメインが独占的にアクセスしますが、ボード自体はアクティブではありません。割り当てが完了すると、`setkeyswitch on` を使用するか、あるいは `connect` オプションまたは `configure` オプションを使用することによって、ボードをドメインに接続または設定できます。

**connect**

ボードが論理ドメインに割り当てられていない場合は、割り当てます。ボードを `connected|unconfigured` 状態に切り替えます。これで、システムボードは論理ドメインに割り当てられ、接続されている (`active`) 状態になります。この状態では、標準システムでボード上のハードウェア資源を使用することはできますが、ボードのハードウェア資源は標準の Solaris のデータ構造では表現されないため、Solaris の環境では使用できません。ボード上で使用できる操作は、設定管理に限定されます。これは一時的な状態であり、ソフトウェアによるこの状態の実装は、現時点では存在しません。

**configure**

ボードが論理ドメインに割り当てられていない場合は、割り当てます。ボードを `connected|configured` 状態に切り替えます。この状態では、ボードはドメインに割り当て、接続



され、アクティブになっており、Solaris の環境用に設定されています。ボード上のハードウェア資源は、Solaris で使用することができます。

**-d** *domain\_indicator*

次のいずれかを使ってドメインを指定します。

*domain\_id* - ドメインの ID です。有効な *domain\_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

*domain\_tag* - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。

**-f**

指定された処理を強制的に実行します。通常、このオプションを指定すると、安全機能がハードウェア側で制御されます。状態の強制的な変更では、条件が ok や unknown でない占有装置のハードウェア資源を、ハードウェアに基づく安全チェック機能に従って使用できます。

**-h**

ヘルプ。使用方法を表示します。

---

**注 -** 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

**-n**

すべてのプロンプトに自動的に no と応答します。プロンプトは、-q オプションを使用するまで表示されます。

**-q**

非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。

-q を単独で使用すると、すべてのプロンプトに対して -n オプションがデフォルトで定義されます。

-q オプションを -y または -n オプションとともに使用すると、ユーザープロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「y」または「n」のいずれかで自動的に応答します。

-r *retry\_count*

-t *timeout*

これらのコマンド引数を使用すれば、状態の切り替え中に障害が発生した場合の再試行を設定できます。-r *retry\_count* オプションは単独で使用できます。この引数には、設定状態の変更が失敗したときにドメインが再試行する回数を指定します。-t *timeout* オプションは常に -r *retry\_count* オプションと共に使用し、失敗した時点から次の再試行まで、ドメインが待機する時間の長さ (秒数) を指定します。-t *timeout* を省略すると、*timeout* のデフォルト値 (0) が使用され、ただちに再試行が実行されます。

-y

すべてのプロンプトに対して自動的に yes と応答します。プロンプトは、-q オプションを使用するまで表示されます。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*location*      ボード位置のリストで、スペースで区切ります。複数の *location* 引数を使用できます。

次の *location* 形式が使用できます。

Sun Fire 15K , Sun Fire 12K

SB(0...17) , SB(0...8)

IO(0...17) , IO(0...8)

---

**注 -**      ボードタイプを使用する場合は、showboards(1M) を使用します。

---

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

-c *assign* オプションは、プラットフォーム管理者特権を持つユーザーのみ、実行することができます。

ドメイン管理者または設定者特権を持っているユーザーは、自身のドメインについてのみ、このコマンドを実行できます。対象のドメインにボードが割り当てられていない場合は、ドメインの使用可能構成要素リストにボードを定義しておく必要があります。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

### 使用例 1 – ドメイン C にボードを割り当てる

ドメイン C に 4 つのボードを割り当てる場合は、プラットフォーム特権またはドメイン特権が必要であり、さらにボードをドメインの使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

```
sc0:sms-user:> addboard -d C -c assign SB0 IO1 SB1 SB2
SB0 assigned to domain: C
IO1 assigned to domain: C
SB1 assigned to domain: C
SB2 assigned to domain: C
sc0:sms-user:>
```

### 使用例 2 – ブラックリストに定義されているボードをドメイン C に割り当てる

ドメイン C に 4 つのボードを割り当てる場合は、プラットフォーム特権またはドメイン特権が必要であり、さらにボードをドメインの使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

```
sc0:sms-user:> addboard -d C -c assign SB0 IO2 SB1 SB2
SB0 assigned to domain: C
IO2 assigned to domain: C
Warning: IO2 is blacklisted.
You will not be able to connect or configure it.
SB1 assigned to domain: C
SB2 assigned to domain: C
sc0:sms-user:>
```

### 使用例 3 – ドメイン A にボードを接続する

この例では、再試行の回数を 5 回、タイムアウトを 5 秒に設定し、ドメイン A に対して 3 つのボードを接続します。ドメイン A のドメイン特権が必要です。

```
sc0:sms-user:> addboard -d A -c connect -r 5 -t 5 IO3 IO4 IO5
```

### 使用例 4 – ボード (ASR ブラックリストに定義されているボードを含む) をドメイン C に接続する

ドメイン C のドメイン特権が必要です。ブラックリストに含まれるボードはスキップされます。

```
sc0:sms-user:> addboard -d C -c connect SB0
SB0 is blacklisted.Exiting.
sc0:sms-user:>
```

#### 使用例 5 – 複数のボードをドメイン A に設定する

ドメイン A のドメイン特権が必要です。

```
sc0:sms-user:> addboard -d A -c configure IO3 IO4 IO5
```

#### 使用例 6 – ボード (ASR ブラックリストに定義されているボードを含む) をドメイン A に設定する

ドメイン A のドメイン特権が必要です。ブラックリストに含まれるボードはスキップされます。

```
sc0:sms-user:> addboard -d A -c configure IO7 IO8 IO9
Skipping IO8.It is blacklisted.
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- |    |               |
|----|---------------|
| 0  | 正常に終了         |
| 1  | 応答なし          |
| 2  | サポートされていない    |
| 3  | 操作がサポートされていない |
| 4  | 不正な特権         |
| 5  | ビジー           |
| 6  | システムビジー       |
| 7  | データエラー        |
| 8  | ライブラリエラー      |
| 9  | ライブラリが存在しない   |
| 10 | 条件が不十分        |
| 11 | 不正            |
| 12 | エラー           |

- 13 APID が存在しない
- 14 不正な属性
- 30 不正なボード ID タイプ
- 31 不正な特権
- 32 他のドメインに割り当てられている
- 33 特権を取得できない
- 34 ドメインボード情報を取得できない
- 35 アクティブなボード一覧を取得できない
- 36 割り当てられているボード一覧を取得できない
- 38 Solaris が稼働していない
- 39 割り当てまたは割り当て解除ができない
- 40 ドメイン特権を取得できない
- 41 プラットフォーム特権を取得できない
- 51 不正なドメイン
- 52 不正な特権
- 53 内部エラー
- 54 ライブラリエラー
- 56 DR のコマンド構文エラー
- 57 割り当て済みの場所
- 58 内部エラー
- 59 ブラックリストに登録済みのコンポーネント
- 60 ASR ブラックリストを取得できない
- 61 ドメインのブラックリストを取得できない
- 62 プラットフォームのブラックリストを取得できない

## 70 DR 操作の失敗

## ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist

esmd によって除外されるコンポーネントの一覧。

/etc/opt/SUNWSMS/config/platform/blacklist

除外されるプラットフォームコンポーネントのリスト

/etc/opt/SUNWSMS/config/domain\_id/blacklist

除外されるドメインコンポーネントのリスト

---

**注 -** このファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。ASR ブラックリストファイルから特定のコンポーネントを削除するには、enablecomponent(1M) を使用します。

---

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

addtag(1M)、enablecomponent(1M)、esmd(1M)、showcomponent(1M)

名前	addcodlicense - Capacity on Demand (COD) RTU (right-to-use) ライセンスキーを COD ライセンスデータベースに追加します。
形式	addcodlicense <i>license-signature</i>  addcodlicense -h
機能説明	addcodlicense(1M) は、指定された COD RTU ライセンスキーを、システムコントローラ (SC) 上の COD ライセンスデータベースに追加します。  <hr/> <b>注 -</b> このコマンドを実行するには、事前にシステムの購入先から COD ライセンスキーを取得しておく必要があります。COD RTU ライセンスキーの詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』を参照してください。 <hr/>
オプション	次のオプションがサポートされています。  -h ヘルプ。使用方法を表示します。  <hr/> <b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。 <hr/>
オペランド	次のオペランドがサポートされています。  <i>license-signature</i>  COD ライセンスデータベースに追加する COD RTU ライセンスキーを指定します。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者グループ特権が必要です。  詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。
使用例	使用例 1 - COD RTU ライセンスキーの追加  sc0:SMS-user:> <b>addcodlicense \</b> <b>01:5014936C37048:01001:0201010302:4:20020430:jWGJdg/</b> <b>kx78b0wyK2xrqIg</b>

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了
- 1 不正な使用方法
- 2 不正なグループ特権
- 3 重複するライセンスが COD ライセンスデータベース内に存在
- 4 不正なライセンスキー
- >3 内部エラーが発生しました。詳細は、`/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages` を参照してください。

属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

`codd(1M)`、`deletecodlicense(1M)`、`showcodlicense(1M)`、`showcodusage(1M)`



名前	addtag - ドメインに対するドメイン名 (タグ) の割り当て
形式	addtag -d <i>domain_indicator</i> [-q] [-y  -n] <i>new_tag</i> addtag -h
機能説明	addtag(1M) は、指定されたドメインタグ名 ( <i>new_tag</i> ) をドメイン ( <i>domain_id</i>   <i>domain_tag</i> ) へ追加します。1 つのドメインには 1 つの名前タグしか割り当てできません。また、この名前はすべてのドメインで必ず一意になるようにします。addtag を使用して <i>domain_tag</i> を変更することもできます。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -d <i>domain_indicator</i>  次のいずれかを使ってドメインを指定します。  <i>domain_id</i> - ドメインの ID。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。  <i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。  -h                   ヘルプ。使用方法を表示します。
注 -	単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
-n	すべてのプロンプトに自動的に <b>no</b> と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。
-q	非出力。プロンプトを含むすべての <code>stdout</code> へのメッセージを抑制します。  単独で使用すると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。  -y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、-q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。

オペランド	<p><code>-y</code>                   すべてのプロンプトに自動的に <code>yes</code> と応答します。プロンプトは、<code>-q</code> オプションとともに使用しない限り表示されます。</p> <p>次のオペランドがサポートされています。</p> <p><code>new_tag</code>               ドメインに割り当てられる新しいタグ名。不正なドメイン名の説明については、「拡張機能説明」を参照してください。</p>
拡張機能説明	
ドメイン名タグの制約	<p>ドメイン名タグには、次の制約があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 1 文字の名前は許可されません。</li> <li>■ すべてのドメイン名タグは、同じシャーシ内のドメインで一意とする</li> <li>■ タグは、Solaris のノード名と同じ制約に準拠します。現在、ドメイン名の長さは 2 文字から 64 文字に制限されています。</li> </ul>
必要なグループ特権	<p>このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。</p> <p>詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。</p>
使用例	<p><b>使用例 1</b> — プロンプトを表示してタグ <code>eng2</code> をドメイン <code>A</code> に割り当てる</p> <pre>sc0:sms-user:&gt; addtag -d A eng2</pre> <p>このドメインのタグが終了する場合は、プロンプトが表示されます。</p> <p><b>使用例 2</b> — <code>-y</code> オプションを使用して、タグ <code>eng2</code> をドメイン <code>A</code> に割り当てる</p> <pre>sc0:sms-user:&gt; addtag -d A -y eng2</pre> <p>プロンプトが表示され、自動的に <code>yes</code> と応答します。この応答によって、ドメインに対して (タグがすでに存在している場合でも) ドメインタグが設定されます。</p> <p><b>使用例 3</b> — <code>-n</code> オプションを使用してタグ <code>eng2</code> をドメイン <code>A</code> に割り当てる</p> <pre>sc0:sms-user:&gt; addtag -d A -n eng2</pre> <p>プロンプトが表示され、自動的に <code>no</code> と応答されます。この応答によって、このドメインに対するタグがまだ設定されていない場合は、タグが設定されま</p>

使用例 4 — `-qy` オプションを使用してタグ `eng2` をドメイン `A` に割り当てる

```
sc0:sms-user:> addtag -d A -qy eng2
```

プロンプトは表示されません。

使用例 5 — `-qn` オプションを使用してタグ `eng2` をドメイン `A` に割り当てる

```
sc0:sms-user:> addtag -d A -qn eng2
```

この例では、まだ設定されていない場合にのみ、タグ `eng2` をドメイン `A` に割り当てます。プロンプトは表示されません。

使用例 6 — `-q` オプションを使用してタグ `eng2` をドメイン `A` に割り当てる

```
sc0:sms-user:> addtag -d A -q eng2
```

この例では、タグがまだ設定されていない場合に、タグ `eng2` をドメイン `A` に割り当てます。タグが設定されている場合は、このコマンドを実行しても変更されません。プロンプトは表示されません。

#### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

#### 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

#### 関連項目

`deletetag(1M)`

名前	cancelcmdsyc - コマンド同期コマンド
形式	cancelcmdsyc <i>cmdsyc_descriptor</i> initcmdsyc <i>script_name</i> [ <i>parameters</i> ] savecmdsyc -M <i>identifier</i> <i>cmdsyc_descriptor</i> [ <i>cancel init save</i> ]cmdsyc -h
機能説明	<p>これらのコマンド同期コマンドはともに機能し、システムコントローラ (SC) のフェイルオーバーによって中断されたユーザー定義のスキプトの回復を制御します。コマンドを同期化するには、ユーザー定義のスキプトに次のコマンドを挿入します。</p> <p><b>initcmdsyc</b>           回復するスキプトを特定するための、コマンド同期記述子を作成します。  この記述子は、コマンド同期リストの中に定義されます。このリストは、フェイルオーバーが発生した後で、新しいメインの SC で再起動するスキプトとコマンドを特定します。</p> <p><b>savecmdsyc</b>           フェイルオーバーが発生した後で、スキプト内のどの場所から処理を再開するかを特定するためのマーカーを追加します。</p> <p><b>cancelcmdsyc</b>        コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除します。これによって、スキプトは 1 度だけ実行され、それ以降のフェイルオーバーの後には実行されません。</p> <p>                          コマンド同期リストから記述子を削除するために、スキプトのすべての出力先には、必ず 1 つの <b>cancelcmdsyc</b> シーケンスを定義します。記述子が削除されていない場合にフェイルオーバーが発生すると、スキプトは、新しいメイン SC 上で実行されます。</p>

---

注 - `initcmdsync` と `cancelcmdsync` のシーケンスは、コマンドが同期化されるように必ず 1 つのスクリプトに定義します。 `savecmdsync` はオプションのコマンドで、スクリプト内の場所をマークして処理を再開する場所を特定する場合のみ使用します。特別な再開ポイントが必要ない場合は、代わりに `runcmdsync(1M)` を使用することもできます。

---

## オプション

次のオプションがサポートされています。

*cmdsync\_descriptor*      コマンド同期記述子 (ユーザー定義スクリプトを指定する記述子) を表します。この記述子は、`initcmdsync` コマンドの標準の出力値として返されます。

`-h`                              ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。 `-h` に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

`-M identifier`                  フェイルオーバーの後に、スクリプトを再開する場所を指定します。この記述子は、正の整数とします。

*parameters*                      ユーザー定義スクリプトに関連するオプションまたはパラメータを表します。これらのパラメータは、スเปア SC に格納されており、フェイルオーバーの後で指定されたスクリプトを再起動する際に使用します。

*script\_name*                      同期的に処理されるユーザー定義スクリプトの名前を表します。 *script\_name* には、実行可能ファイルの名前を絶対パスで指定します。このコマンドは、両方の SC で同じ場所に位置している必要があります。

## 拡張機能説明

コマンド同期コマンドは、ユーザー定義スクリプト内の特定の論理ポイントに挿入します。

たとえば、**Korn** シェルスクリプトは、以下のようになります。

```
# MAIN CODE STARTS HERE
# Be sure to use a cleanup procedure to handle any
# interrupts.
# Use the cancelcmdsyc to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command
# will get restarted on the new main SC.
#
clean_up () {
    cancelcmdsyc $desc
    exit
}

# Declare the clean_up function to capture system signals
# and cleanup.
trap "clean_up" INT HUP TERM QUIT PWR URG
goto_label=1
# Process the arguments, capturing the -M marker point
# if provided
#
for arg in $*; do
    case $arg in
        -M )
            goto_label=$arg;;
        .
        .
    esac
done
# Place this script and all its parameters in the command
# synchronization list, which indicates the commands to
# be restarted after an SC failover.
#
# NOTE: The script must be executable by the user defined
# in fomd.cf and reside in the same directory on both the
# main and the spare SC.
```

```

# If the command is not part of the defined PATH for
# the user, the absolute filename must be passed with the
# initcmdsync command
#
initcmdsync script_name parameters
# The marker point is stored in the goto_label variable.
# Keep executing this script until all cases have been
# processed or an error is detected.
#
while (( $goto_label != 0 )) ; do
#
# Each case should represent a synchronization point
# in the script.
#
case $goto_label in
#
# Step 1: Do something
#
1 )          do_something
            .
            .
            .

# Execute the savecmdsync command with the script's
# descriptor and a unique marker to save the position.
# If a failover occurs here, the commands represented in
# the next goto_label (2) will be resumed.
#
            savecmdsync -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
            goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
            ;;

#
# Step 2: Do more things
#
2 )          do_more_things
            .
            .
            .
            savecmdsync -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
            goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
            ;;

#
# Step 3: Finish the last step and set the goto_label to 0
# so that the script ends.
3 )
            finish_last_step
            .
            .
            .
            goto_label=0
            ;;

        esac
done
# END OF MAIN CODE
# Remember to execute cancelcmdsync to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command will be restarted
# after the failover.
#
cancelcmdsync $desc

```

## cancelcmdsync(1M)

### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

---

**注 -** `initcmdsync` の標準出力には、コマンド同期記述子が含まれていません。(フェイルオーバーが終了した場合や、単一の SC 環境などでフェイルオーバーが使用できない場合は、同期コマンドが含まれているスクリプトでは、プラットフォームのログファイルに対してエラーメッセージを生成し、ゼロ以外の終了コードを返します。これらのメッセージは無視することもできます。)

---

### 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

### 関連項目

`runcmdsync(1M)`, `showcmdsync(1M)`



名前	codd - Capacity on Demand (COD) デーモン		
形式	codd		
機能説明	<p>codd(1M) はメインのシステムコントローラ (SC) 上で動作するプロセスの 1 つです。このプロセスは、次の役割を担当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ COD 資源の使用状況を監視し、使用されている資源が COD ライセンス データベースファイル内の該当する COD RTU (right-to-use) ライセンスと合致しているかどうかをチェックする。警告メッセージが発生するたびに、ログに記録する処理も行います。</li> <li>■ インストール済みのライセンス、資源の使用状況、およびボードの状態に関する情報を提供する。</li> <li>■ COD RTU ライセンスキーの追加や削除の要求に対処する。</li> <li>■ インスタントアクセス CPU と、ドメイン用に予約する COD RTU ライセンスを構成する。</li> </ul>		
拡張機能説明	<p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に起動されます。また、codd デーモンはいったん停止しても、自動的に再起動されます。このデーモンをコマンド行から明示的に<b>起動しないでください</b>。</p> <p>codd デーモンは、次のイベントが発生したときに、COD RTU ライセンスの割り当てを解除します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ COD CPU ボードへの電源供給が遮断されたか、稼働中のドメインから COD CPU ボードが除去されたとき</li> <li>■ ドメインの仮想キースイッチの状態が on/secure から standby/off に切り替わったとき</li> </ul>		
	<p>次の各コマンドは、codd デーモンのクライアントとして動作します。</p>		
	<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;">addcodlicense(1M)</td> <td>システムコントローラ (SC) 上の COD ライセンスデータベースに COD RTU ライセンスキーを追加する。</td> </tr> </table>	addcodlicense(1M)	システムコントローラ (SC) 上の COD ライセンスデータベースに COD RTU ライセンスキーを追加する。
addcodlicense(1M)	システムコントローラ (SC) 上の COD ライセンスデータベースに COD RTU ライセンスキーを追加する。		
	<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;">dxs(1M)</td> <td>ドメイン X サーバーデーモン</td> </tr> </table>	dxs(1M)	ドメイン X サーバーデーモン
dxs(1M)	ドメイン X サーバーデーモン		
	<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;">deletecodlicense(1M)</td> <td>COD RTU ライセンスを SC から削除する。</td> </tr> </table>	deletecodlicense(1M)	COD RTU ライセンスを SC から削除する。
deletecodlicense(1M)	COD RTU ライセンスを SC から削除する。		
	<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;">hpost(1M)</td> <td>Sun Fire 15K/12K の電源投入時自己診断 (POST) を制御する。</td> </tr> </table>	hpost(1M)	Sun Fire 15K/12K の電源投入時自己診断 (POST) を制御する。
hpost(1M)	Sun Fire 15K/12K の電源投入時自己診断 (POST) を制御する。		

setdefaults(1M)	アクティブではなくなったドメインを対象に、すべてのインスタンスを削除し、予約されていた COD RTU をリセットする。
setupplatform(1M)	ドメインの使用可能構成要素リストと COD RTU 予約を設定し、プラットフォームの COD インスタントアクセス CPU を構成する。
showcodlicense(1M)	インストール済みの COD RTU ライセンスを表示する。
showcodusage(1M)	COD 資源の現在の使用統計を表示する。
showplatform(1M)	ボードの使用可能構成要素リスト、ドメインの状態、各ドメインに予約されている COD RTU、およびプラットフォームの COD インスタントアクセス CPU を表示する。

codd デーモンは、次の各デーモンのクライアントとして機能します。

dsmd(1M)	ドメイン状態監視デーモン
frad(1M)	FRU アクセスデーモン
pcd(1M)	プラットフォーム構成データベースデーモン
setkeyswitch(1M)	仮想キースイッチ制御コマンド

## ファイル

次のファイルがサポートされています。

`/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages`

メッセージファイルを格納する。

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addcodlicense(1M)、deletecodlicense(1M)、dsmd(1M)、dxs(1M)、  
frad(1M)、hpost(1M)、pcd(1M)、setdefaults(1M)、  
setkeyswitch(1M)、setupplatform(1M)、showcodlicense(1M)、  
showcodusage(1M)、showplatform(1M)、ssd(1M)

名前	console - ドメインコンソールへのアクセス
形式	<pre>console -d domain_indicator [ [-f]   [-l]   [-g]   [-r]] [-e escapeChar] console -h</pre>
機能説明	<p>console(1M) は、指定されたドメイン (<i>domain_id</i> または <i>domain_tag</i>) に対するコマンドを実行するウィンドウ、コンソールウィンドウを作成して、ドメインの仮想コンソールドライバへ遠隔接続します。1つのドメインに対して複数の console コマンドを同時に接続することもできますが、書き込み権は1つの console のみが所有し、その他のコマンドは読み取り専用になります。書き込み権は、ロックまたはロック解除のいずれかのモードになります。</p> <p>オプションを指定しないで console を呼び出すと、排他的なロックされた書き込みモード (オプション -f) の状態になります。排他的なセッションでは、ドメイン仮想コンソールから他のセッションが強制的に切り離されます。</p> <p>ロックされた書き込みモードでは、安全性が高くなります。このモードは、console -f を使用して他のコンソールが開かれた場合、または実行中の他の console ウィンドウから ~* が入力された場合に解除されます。これらの2つの場合には、新しい console セッションが排他セッションになります。</p> <p>ロック解除された書き込み権は、ロックされた書き込みに比べて安全性が低くなります。このモードは、console -g、console -l または console -f、を使用して別の console コマンドが開始された場合、あるいは別のコンソールウィンドウから ~@、~&amp; または ~* が入力された場合に解除されます。</p> <p>console は、IOSRAM、またはドメインに対するネットワークパスを使用して、ドメインコンソールと通信します。~= (チルドおよび等号記号) のコマンドを使用して、通信パスを手動で切り替えることができます。ネットワークが使用できなくなり、console セッションがハングしたと思われる場合は、通信パスを手動で切り替えると有効です。</p> <p>チルドコマンドは「拡張機能説明」で説明します。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><i>-d domain_indicator</i></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p>

*domain\_id* ドメインの ID です。有効な *domain\_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

*domain\_tag* - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。

-e *escape*

*Char* デフォルトのエスケープ文字を設定します。エスケープ文字を *escapeCharacter* に変更します。デフォルトは ~ (チルド) です。

有効なエスケープ文字は次のものを除く任意の文字です。

```
# @ ^ & ? * = . |
```

以下の「使用方法」に記載している *rlogin* 関連の注意書きを参照してください。

- f 強制オプション (デフォルト)。ドメインコンソールウィンドウをロックされた書き込み特権でオープンし、オープンしている他のセッションをすべて終了し、新しいセッションがオープンされないようにします。これにより、セッションが排他になります。このコマンドは、(専用にデバッグを行う場合など) コンソールを排他的に使用する場合のみ使用します。

多重セッションモードを復元するには、ロックを開放 (~^) するか、または、コンソールセッションを終了 (~.) します。

- g グラブオプション。コンソールウィンドウをロック解除された書き込み特権でオープンします。他のセッションがロック解除された書き込み特権を持っている場合は、そのセッションは読み取り専用になります。他のセッションがロック特権を持っている場合は、この要求は拒否され、コンソールウィンドウは読み取り専用でオープンします。
- h ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

- l      ロックオプション。コンソールウィンドウをロックされた書き込み特権でオープンします。他のセッションがロック解除された書き込み特権を持っている場合は、そのセッションは読み取り専用になります。他のセッションがロック特権を持っている場合は、この要求は拒否され、コンソールウィンドウは読み取り専用でオープンします。
- r      コンソールウィンドウを読み取り専用モードでオープンします。

## 拡張機能説明

### 使用法

ドメインコンソールウィンドウでは、行の先頭文字として現れるチルド (~) は、console が特別な処理を行うためのエスケープ記号とみなされます。具体的には、次のものがあります。

- ~?                      ステータスメッセージ
- ~.                      console セッションの切断
- ~#                      OpenBoot PROM または kadb へブレイク
- ~@                      ロック解除された書き込み特権の取得 (-g を参照)
- ~^                      書き込み権を開放する
- ~=                      ネットワークと IOSRAM インタフェース間の通信パスを切り替えます。~= はプライベートモードでのみ使用できます (~\* を参照)。
- ~&                      ロックされた書き込み特権を取得します (-l を参照)。この信号は、読み取り専用、またはロック解除された書き込みのセッションでのみ実行することができます。
- ~\*                      ロックされた書き込み特権を取得し、オープンしている他のセッションをすべて終了して、新しいセッションがオープンしないようにします (-f を参照)。多重セッションモードを復元するには、ロックを開放するか、またはこのセッションを終了します。

---

注 - rlogin は、**チルド**が新しい行の先頭で使用されている場合でも、**チルド・エスケープ**のシーケンスを処理します。行の先頭で**チルド**シーケンスを送信する必要があり、rlogin を使用する場合は、2 つの **チルド** (最初のチルドはエスケープで、2 番目は rlogin に対するチルド) を使用します。もうひとつの方法としては、rlogin の実行中に、行の先頭に**チルド**を入力しないようにします。

---



---

注 - kill -9 コマンドを使用してコンソールセッションを終了すると、コンソールコマンドが実行されたウィンドウまたは端末は、raw モードになり、ハングしたように見えます。このような状況を回避するには、CTRL-j と入力し、次に stty sane、さらに CTRL-j と入力します。

---

#### 必要なグループ特権

指定されたドメインについて、ドメイン管理者の特権を持っている必要があります。プラットフォームグループ特権のみを持つユーザーは、ドメインコンソールにアクセスすることはできません。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティオプションと管理特権」を参照してください。

#### 使用例

使用例 - ドメインで、コンソールウィンドウをロックモードでオープンする

```
sc0:sms-user:> console -d a -l
```

---

注 - ドメインコンソールウィンドウでは、環境変数 TERM がコンソールウィンドウと同じ設定になっている場合のみ、vi(1) が正しく実行され、エスケープシーケンス (**チルド**コマンド) が正しく機能します。たとえば、以下のようになります。

```
sc0:sms-user:> setenv TERM xterm
```

---

#### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。

## console(1M)

### 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

### 関連項目

addtag(1M)、dxs(1M)、kill(1)、rlogin(1)、set(1)、stty(1)、vi(1)、xterm(1M)



名前	dca - ドメイン構成エージェント
形式	dca -d <i>domain_indicator</i> [-H <i>hostname</i> ]  dca -h
機能説明	dca(1M) は、システムコントローラ上の dca と、指定されたドメインのドメイン構成サーバー (dcs) との通信メカニズムを提供します。dca には、遠隔の動的な再構成コマンドに関する通信サービスが用意されています。  このエージェントは、ssd(1M) によって自動的に開始されます。コマンド行から手動で開始しないでください。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -d <i>domain_indicator</i>  次のいずれかを使ってドメインを指定します。  <i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。  <i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。  -h      ヘルプ。指定した <i>hostname</i> について使用法の説明を表示します。
	<hr/> <b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。 <hr/>
ファイル	このコマンドでは、以下のファイルを使用します。  /var/opt/SUNWSMS/doors/<domain_id>/dca /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr0 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr1 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr2 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr3 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr4 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr5
	-H <i>hostname</i> dca に関連付けられているドメインの Solaris ソフトウェアのホスト名。

```

/var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr6
/var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr7
/var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr8
/var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr9

```

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

addboard(1M)、deleteboard(1M)、moveboard(1M)、rcfgadm(1M)

名前	deleteboard - ドメインからシステムボードの設定を解除し、ドメインから切り離して割り当てを解除
形式	deleteboard [-c <i>function</i> ] [-r <i>retry_count</i> [-t <i>timeout</i> ]] [-q] [-f] [-y  -n] <i>location</i> ...  deleteboard -h
機能説明	<p>deleteboard(1M) は、ドメインから、割り当てられてアクティブになっている <i>location</i> を削除します。<i>location</i> のボードは、assigned か connected configured のいずれかの状態になっています。-c オプションは、現在の設定状態から新しい設定状態へ、ボードの切り替えを指定する場合に使用します。</p> <p>設定状態は、unconfigure、disconnect、unassign のいずれかとなります。-c オプションを指定しない場合は、デフォルトの設定状態 unassign が使用されます。</p> <p>ドメイン管理者は、ボードの unconfigure や disconnect を行うことができますが、ボードがドメインの使用可能構成要素リストに定義されていない場合は、ドメインからボードの割り当てを解除することはできません。setupplatform(1M) を参照してください。これは、deleteboard の <i>location</i> フィールドが、ドメインの使用可能構成要素リストに定義されていないことを表しています。</p>
オプション	次のオプションがサポートされています。
<hr/> <p><b>注 -</b> deleteboard コマンドの実行が失敗しても、対象のボードは実行前の状態には戻りません。dxs エラーメッセージ (または dca エラーメッセージ) がドメインのログに出力されます。発生したエラーが回復可能であれば、コマンドを再試行できます。回復不能な場合、対象のボードを使用するためには、当該ドメインを再起動する必要があります。</p> <hr/>	

*-c function*

*function* の有効な値は、**unconfigure**、**disconnect**、または **unassign** です。-c オプションは、設定状態の切り替えを制御する場合に使用します。それぞれの機能は、その前の状態に基づいて実行されます。たとえば、**unassign** は最初に構成解除を行い、次に割り当て解除してから切断を行います。

有効な切り替え状態とその意味は以下のとおりです。

**unconfigure**

ドメイン上で稼働している Solaris 環境からボードの構成を解除します。Solaris ソフトウェアは、ボード上のすべてのハードウェア資源の使用を停止します。

ボードを `connected|unconfigured` 状態に切り替えます。これで、システムボードは論理ドメインに割り当てられており、接続されている (active 状態に維持される) 状態のままになります。この状態では、標準のシステムでボード上のハードウェア資源を使用することはできますが、ボードのハードウェア資源は標準の Solaris ソフトウェアのデータ構造では表現されないため、Solaris オペレーティング環境では使用できません。ボード上で使用できる操作は、設定管理に限定されます。

**disconnect**

ドメイン上で稼働している Solaris オペレーティング環境からボードの構成を解除します。上記の `unconfigure` を参照してください。ボードを `disconnected|unconfigured` 状態に切り替えます。物理ドメインからボードを削除します。このステップで、ドメインによって UNCLAIM 要求が SC に送信されます。これで、システムボードは論理ドメインに割り当てられ、切り離されている状態になります。

**unassign**

ドメイン上で稼働している Solaris オペレーティング環境からボードの構成を解除します。unconfigure を参照してください。ボードを切り離します。disconnect を参照してください。ボードの状態を**使用可能** (available) に切り替えて、論理ドメインからボードを移動させます。

- f 指定された処理を強制的に実行します。通常、このオプションを指定すると、安全機能がハードウェア側で制御されます。状態の強制的な変更では、条件が ok や unknown でない占有装置のハードウェア資源を、ハードウェアに基づく安全チェック機能に従って使用することができます。
- h ヘルプ。使用方法を表示します。

---

**注 -** 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

- n すべてのプロンプトに自動的に no と応答します。プロンプトは、-q オプションを使用するまで表示されます。
- q 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。  
  
-q を単独で使用すると、すべてのプロンプトに対して -n オプションがデフォルトで定義されます。  
  
-q オプションを -y または -n オプションとともに使用すると、ユーザープロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「y」または「n」のいずれかで自動的に応答します。

-r *retry\_count*

-t *timeout*

これらのコマンド引数を使用すれば、状態の切り替え中に障害が発生した場合の再試行を設定できます。-r *retry\_count* オプションは単独で使用できます。この引数には、設定状態の変更が失敗したときにドメインが再試行する回数を指定します。-t *timeout* オプションは常に

`-r retry_count` オプションと共に使用し、失敗した時点から次の再試行まで、ドメインが待機する時間の長さ (秒数) を指定します。`-t timeout` を省略すると、`timeout` のデフォルト値 (0) が使用され、ただちに再試行が実行されます。

`-y` すべてのプロンプトに対して自動的に `yes` と応答します。プロンプトは、`-q` オプションを使用するまで表示されます。

## オペラント

次のオペラントがサポートされています。

*location* ボード位置のリストで、スペースで区切ります。複数の *location* 引数を使用できます。

次の *location* 形式が使用できます。

```
Sun Fire 15K, Sun Fire 12K
SB(0...17), SB(0...8)
IO(0...17), IO(0...8)
```

---

**注 -** ボードタイプを使用する場合は、`showboards(1M)` を使用します。

---

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

ボードが **割り当て** (assigned) の状態 (つまり実行中のドメインで **アクティブ** (active) になっていない) の場合は、プラットフォーム管理者特権を持っているユーザーのみ `-c unassign` オプションを実行することができます。

ドメイン管理者または設定者特権を持っているユーザーは、自身のドメインについてのみ、このコマンドを実行することができます。ボードの割り当てを解除するには、そのボードがドメインの使用可能構成要素リストに含まれていることが前提になります。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

### 使用例

**使用例 1 -** ドメインからボードを構成解除する

ドメインから 4 つのボードを **構成解除** (unconfigure) するには、ドメイン管理者特権またはドメイン設定者特権を付与して、ボードを、ドメイン使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

この例のドメインには、構成されている (configured) 状態のボードがすべて定義されています。

```
sc0:sms-user:> deleteboard -c unconfigure SB0 IO1 SB1 SB2
```

#### 使用例 2 - 実行中のドメインからボードの割り当てを解除する

ドメインから 3 つのアクティブなボードの割り当てを解除 (unassign) するために、再試行の長さを 5 秒、タイムアウトを 3 秒に設定します。ボードが構成解除されて切り離された状態になってから、割り当てが解除されます。ドメイン管理者特権またはドメイン設定者特権が必要であり、ボードを、ドメイン使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

```
sc0:sms-user:> deleteboard -r5 -t3 IO3 IO4 IO5
```

#### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常終了
- 1 応答なし
- 2 サポートされていない
- 3 操作がサポートされていない
- 4 不正な特権
- 5 ビジー
- 6 システムビジー
- 7 データエラー
- 8 ライブラリエラー
- 9 ライブラリが存在しない
- 10 条件が不十分
- 11 不正
- 12 エラー
- 13 APID が存在しない

- 14 不正な属性
- 30 不正なボード ID タイプ
- 31 不正な特権
- 32 他のドメインに割り当てられている
- 33 特権を取得できない
- 34 ドメインボード情報を取得できない
- 35 アクティブなボード一覧を取得できない
- 36 割り当てられているボード一覧を取得できない
- 38 Solaris が稼働していない
- 39 ドメイン状態を割り当て/割り当て解除できない
- 40 ドメイン特権を取得できない
- 41 プラットフォーム特権を取得できない
- 52 不正な特権
- 53 内部エラー
- 54 ライブラリエラー
- 56 DR のコマンド構文エラー
- 58 内部エラー
- 68 場所が割り当てられていない
- 69 場所が設定されていない
- 70 DR 操作の失敗



## 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

addboard(1M)、moveboard(1M)

名前	deletecodlicense - Capacity on Demand (COD) RTU (right-to-use) ライセンスキーを COD ライセンスデータベースから削除します。
形式	deletecodlicense [-f] <i>license-signature</i> deletecodlicense -h
機能説明	<p>deletecodlicense(1M) コマンドは、指定された COD RTU ライセンスキーを SC 上の COD ライセンスデータベースから削除します。COD RTU ライセンスキーの詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』を参照してください。</p> <p>このコマンドを実行すると、既存の COD RTU ライセンスの数と、使用中の COD CPU の数がシステムによって比較されます。その結果、COD RTU ライセンスを削除すると、ライセンス数が使用中の CPU 数を下回るようであれば、ライセンスは COD RTU ライセンスデータベースから削除されません。その場合、COD RTU ライセンスキーを削除するには、使用中の COD CPU の数を減らす必要があります。減らすべき CPU の数に応じて、適切な数のドメインをオフにするか、動的再構成 (DR) を使って適切な数のボードの接続を解除します。</p> <p>-f オプションを指定すれば、COD RTU ライセンスを強制的に削除することも可能ですが、ライセンス違反につながるおそれがあります。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-f 指定した COD RTU ライセンスキーを COD ライセンスデータベースから強制的に削除します。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p>
<hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>	

*license-signature*

COD ライセンスデータベースから削除する COD RTU ライセンスキーを指定します。

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者グループ特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

## 使用例 1 – COD RTU ライセンスキーの削除

```
sc0:sms-user:>deletecodlicense\  
01:5014936C37048:01001:0201010302:4:20020430:jwGJdg/  
kx78b0wyK2xrqIg
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常終了
- 1 不正な使用方法
- 2 不正なグループ特権
- >2 内部エラーが発生しました。詳細は、`/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages` を参照してください。

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

`addcodlicense(1M)`、`codd(1M)`、`showcodlicense(1M)`、`showcodusage(1M)`

名前	deletetag - ドメインに関連付けられているドメインタグ名の削除
形式	deletetag -d <i>domain_indicator</i> [-q] [-y -n]  deletetag -h
機能説明	deletetag(1M) は、ドメインに関連付けられているドメインタグを削除します。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -d <i>domain_indicator</i>  次のいずれかを使ってドメインを指定します。  <i>domain_id</i> - ドメインの ID。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。  <i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。  -h      ヘルプ。使用方法を表示します。
<hr/>	
注 -	単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。  <hr/>
-n	すべてのプロンプトに自動的に <b>no</b> と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。
-q	非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。  単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。  -y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、-q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。
-y	すべてのプロンプトに自動的に <b>yes</b> と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

**使用例 1** — 割り当てられているドメインから、タグ `eng2` を削除する

```
sc0:sms-user:>deletetag -d eng2 -qy
```

プロンプトは表示されません。

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

`domain_id` にタグが定義されていない場合は、エラーは返されず、`deletetag(1M)` は正常に処理されたとみなされます。

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

`addtag(1M)`

名前	disablecomponent - 特定のコンポーネントを指定したブラックリストファイルに追加
形式	disablecomponent [-d <i>domain_indicator</i> ] [-i " <i>reason</i> " <i>location</i> ... disablecomponent -h
機能説明	<p>disablecomponent(1M) は、ドメインまたはプラットフォームのブラックリストにコンポーネントを追加し、起動できないようにします。</p> <p><i>blacklist</i> は、POST が起動時に使用できないコンポーネントを一覧表示した内部ファイルです。POST はシステムを起動用に準備する前にブラックリストファイルを読み取り、OpenBoot PROM とともに正常にテストが完了したコンポーネントのみのリストを渡します。ブラックリストにあるファイルは除外されます。SMS は、ドメインボード、プラットフォームボード、内部の自動システム回復 (ASR) についての 3 つのブラックリストをサポートしています。</p> <p>オプションを指定せずに disablecomponent を使用したときは、プラットフォームのブラックリストファイルを編集します。</p> <p>disablecomponent は、ASR ブラックリストファイルで使用することはできません。enablecomponent(1M) のみ、ASR ブラックリストファイルに書き込みすることができます。</p> <p>使用方法と、プラットフォームおよびドメインのブラックリストの編集方法については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 6 章「ドメイン制御」を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><i>-d domain_indicator</i></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p><i>-h</i> ヘルプ。使用方法を表示します。</p>

---

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま  
す。

---

-i "reason" コンポーネントがドメインブラックリストに追加された理由  
を簡潔に示します。単一引用符または二重引用符の記号で囲  
むか、または単一語で記述する必要があります。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*location* コンポーネントの場所。次のいずれかの形式で、スラッシュ  
で区切って指定します。

```
board_loc/proc/bank/logical_bank
board_loc/proc/bank/all_dimms_on_that_bank
board_loc/proc/all_banks_on_that_proc
board_loc/all_banks_on_that_board
board_loc/proc
board_loc/procs
board_loc/cassette
board_loc/bus
board_loc/paroli_link
```

*location* 引数が複数の場合は、スペースで区切ります。

*location* 形式は、オプションであり、特定の位置にあるボード  
上の特定のコンポーネントを指定するために使用されます。

たとえば、*location* が SB5/P0/B1/L1 の場合、SB5 にあるプロ  
セッサ 0 上のバンク 1 の論理バンク1 を示します。

*location* が SB0/PP1 の場合、SB0 にあるプロセッサペア 1 を示  
します。

*location* が CS0/ABUS の場合、センタープレーンのアドレス  
バス 0 を示します。

*location* が EX11/DBUS1 の場合、拡張ボード 11 のデータバス  
1 を示します。

次の *board\_loc* 形式が使用できます。

Sun Fire 15K, Sun Fire 12K

SB(0...17), SB(0...8)

IO(0...17), IO(0...8)

CS(0|1), CS(0|1)

EX(0...17), EX(0...8)

プロセッサ位置は、単一のプロセッサまたはプロセッサペアを示します。

1 枚の CPU/メモリーボードでは、4 つのプロセッサが使用できます。ボード上のプロセッサペアは、procs 0 と 1、および procs 2 と 3 です。

---

注 - プロセッサペアの一方の CPU/Mem プロセッサをブラックリストに登録すると、両方のプロセッサが使用されなくなります。

---

MaxCPU には、procs 0 と 1、および 1 つのみの proc ペア (PP0) の 2 つのプロセッサがあります。このボードに PP1 を使用すると、disablecomponent が終了し、エラーメッセージが表示されます。

次の *proc* 形式が使用できます。

P(0...3) PP(0|1)

次の *bank* 形式が使用できます。

B(0|1)

次の *logical\_bank* 形式が使用できます。

L(0|1)

次の *all\_dimms\_on\_that\_bank* 形式が使用できます。

D

次の *all\_banks\_on\_that\_proc* 形式が使用できます。

B



次の *all\_banks\_on\_that\_board* 形式が使用できます。

B

次の *paroli\_link* 形式が使用できます。

PAR(0|1)

hsPCI アセンブリには、ホットスワップ可能なカセットが含まれます。

次の *hsPCI* 形式が使用できます。

C(3|5) V(0|1)

hsPCI+ アセンブリには、ホットスワップ可能なカセットが含まれます。

次の *hsPCI+* 形式が使用できます。

C3V(0|1|2) および C5V0

バス位置には、アドレス、データおよび応答の 3 つがあります。

次の *bus* 形式が使用できます。

ABUS|DBUS|RBUS (0|1)

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権、ドメイン管理者特権またはドメイン構成者特権が必要です。プラットフォーム特権を持っている場合は、プラットフォームのコンポーネントに対してのみ、このコマンドを実行することができます。ドメイン特権を持っている場合は、特権を持っているドメインに対してのみこのコマンドを実行することができます。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

### 使用例

**使用例 1** – システムボード 1 の CSB 0 とプロセッサ 2 をドメイン A ブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent -dA CS0 SB1/P2
```

使用例 2 – システムボード 0 上のプロセッサ 0 にあるバンク 0 の論理バンク 0 をドメイン A のブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent -dA SB0/P0/B0/L0
```

使用例 3 – システムボード 3 上のプロセッサ 1 にあるバンク 0 のすべての DIMM をドメイン A のブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent -dA SB3/P1/B0/D
```

使用例 4 – システムボード 1 上のプロセッサ 0 のすべてのバンクをドメイン B のブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent -dB SB1/P0/B
```

使用例 5 – システムボード 0 上のすべてのバンクをドメイン D のブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent -dD SB0/B
```

使用例 6 – プラットフォームブラックリストにシステムボード 3 のプロセッサペア 1 を追加する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent SB3/PP1
```

使用例 7 – IO ボード 6 の 5V スロット 0 内の hsPCI カセットをドメイン A ブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent -dA IO6/C5V0
```

使用例 8 – wPCi ボード 7 上の Paroli Link 0 をプラットフォームブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent IO7/PAR0
```

使用例 9 – EX9 の データバス CS0 をドメイン A ブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent -dA EX9/DBUS0
```

使用例 10 – システムボード 1 の CSB 0 とプロセッサ 2 をドメイン A ブラックリストに追加する (アップグレードが予定されているため)

```
sc0:sms-user:> disablecomponent -dA -i upgrade CS0 SB1/P2
```

**使用例 11** — システムボード 3 のプロセッサペア 1 をプラットフォームブラックリストに追加する (サービスが必要なため)

```
sc0:sms-user:> disablecomponent -i "Needs service" SB3/PP1
```

#### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

#### ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/platform/blacklist
```

除外されるプラットフォームコンポーネントの一覧。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/domain_id/blacklist
```

除外されるドメインコンポーネントの一覧。

#### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

#### 関連項目

addboard(1M)、enablecomponent(1M)、esmd(1M)、showcomponent(1M)

名前	dsmd – ドメインの状態監視デーモン
形式	dsmd
機能説明	<p>dsmd(1M) は、最大 18 個のドメインの状態およびオペレーティングシステム (OS) のハートビートを監視します。</p> <p>dsmd はドメインを自動的に回復し、ドメインに関するハードウェアエラーを処理します。ドメインが停止すると、dsmd はそのドメインをリセットし、CPU レジスタとハードウェア設定ダンプを収集し、2 つのファイルに保存します。</p> <p>ドメインの状態変化はすべて監視されており、メッセージレベルが <b>INFO</b> のものはドメイン特有のログファイルに記録されています。その他のメッセージレベルのものは、状態変化について記録されません。</p> <p>このデーモンは、<b>ssd(1M)</b> デーモンによって自動的に開始されます。コマンド行から手動で開始しないでください。</p>
拡張機能説明	<p>dsmd は以下のイベントを記録し、そのイベントが発生した場所からの回復を試行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ドメインの起動に失敗</li> <li>■ エラーのリセット</li> <li>■ Solaris OS のハング</li> <li>■ ドメインパニック</li> <li>■ ドメインのリセットまたは再起動</li> <li>■ DStop</li> <li>■ 起動/パニック/error_reset_sync タイムアウト</li> </ul> <p>dsmd クライアントには、以下の内容が含まれています。</p> <p>dxs(1M)                   ドメイン X サーバーデーモン</p> <p>efe                        Sun Management Center デーモン</p> <p>osd(1M)                  OpenBoot PROM デーモン</p> <p>pcd(1M)                  プラットフォームの設定データベースデーモン</p> <p>esmd(1M)                 環境状態の監視デーモン</p> <p>dsmd は、以下のクライアントです。</p>

hwad(1M)                   ハードウェアアクセスデーモン

setkeyswitch(1M)       仮想キースイッチ制御コマンド

DR についての詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』を参照してください。

## ファイル

次のファイルがサポートされています。

/etc/opt/SUNWSMS/startup/ssd\_start

    ssd 用のデフォルトの起動

/var/opt/SUNWSMS/adm/domain\_id/

    メッセージファイルと hpost ダンプファイルを格納する

/var/opt/SUNWSMS/SMS/adm/domain\_id/post/

    dstop およびハードウェア設定ダンプファイルを格納する

/export/home/sms-user/xir\_dump/

    すべてのドメインに関する xir ダンプファイルを格納する

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

dxs(1M)、esmd(1M)、hwad(1M)、osd(1M)、pcd(1M)、reset(1M)、setkeyswitch(1M)、ssd(1M)

名前	dxs - ドメイン X サーバー
形式	dxs [-S] -d <i>domain_indicator</i>
機能説明	<p>dxs -h</p> <p>dxs(1M) は、ドメインに対するソフトウェアサポートを提供します。具体的には、仮想コンソール機能、動的再構成メールボックスサポート、および PCI メールボックスサポートが含まれています。メールボックスサポートでは、ドメインドライバの要求とイベントを処理します。仮想コンソール機能によって、コンソールプログラムを実行している 1 人、または複数のユーザーが、ドメインの仮想コンソールにアクセスできるようになります。</p> <p>ドメインで Solaris ソフトウェアを実行しているとき、dxs は、ドメインのコンソールドライバ (cvcd) と、稼働中のコンソールウィンドウの中継として機能します。Solaris ソフトウェアを実行していないドメインでは、dxs は、OpenBoot PROM と、実行中のコンソールウィンドウの中継として機能します。</p> <p>ドメイン X サーバーは、ssd(1M) デーモンによって、それぞれのアクティブなドメインに対して自動的に開始されます。コマンド行から手動で開始しないでください。ドメインが停止すると、ドメインの dxs は終了します。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_indicator</i></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p>-h ヘルプ。指定された <i>hostname</i> の使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>

## 終了ステータス

-S コンソールの出力ログを使用不可にします。デフォルトでは、ログは使用可能で、`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/console` ファイルに書き込まれます。

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

`addtag(1M)`、`console(1M)`、`ssd(1M)`

名前	enablecomponent – 指定したブラックリストから特定のコンポーネントを削除
形式	enablecomponent [-a -d <i>domain_indicator</i> ] <i>location</i> ...
機能説明	enablecomponent -h
機能説明	<p>enablecomponent(1M) は、プラットフォーム、ドメイン、または ASR のブラックリストからコンポーネントを削除し、起動できるようにします。</p> <p><i>blacklist</i> は、POST が起動時に使用できないコンポーネントを一覧した内部ファイルです。POST はシステムを起動用に準備する前にブラックリストファイルを読み取り、正常にテストが完了したコンポーネントだけを含むリストを OpenBoot PROM に渡します (ブラックリストに含まれるコンポーネントは除外されます)。SMS はドメインボード用、プラットフォームボード用、内部 ASR 用にそれぞれ 1 つずつ、合計 3 つのブラックリストをサポートしています。</p> <p>ASR <i>blacklist</i> は、環境の条件によって <i>esmd</i> がコンポーネントの電源を切断したときに、<i>esmd</i> で作成される内部ファイルです。電源ライブラリおよび SMS コマンドが不正なコンポーネントをオンに設定しないようにする場合にも、ASR ブラックリストを使用します。</p> <p>オプションを指定しないで <i>enablecomponent</i> を使用すると、プラットフォームブラックリストを編集することができます。</p> <p>特定のコンポーネントがブラックリストに定義されているかどうかを表示するには、<i>showcomponent(1M)</i> を使用します。</p> <p>プラットフォームおよびドメインのブラックリストの使用方法和編集方法については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 6 章「ドメイン制御」を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-a                   ASR ブラックリストから削除するコンポーネントを指定します。</p> <p>-d <i>domain_indicator</i></p> <p>                          次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p>



*domain\_id* - ドメインの ID。有効な *domain\_id* は A ~ R で、大文字と小文字は区別されません。

*domain\_tag* - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。

-h ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*location* コンポーネントの場所。次のいずれかの形式で、スラッシュで区切って指定します。

*board\_loc/proc/bank/logical\_bank*  
*board\_loc/proc/bank/all\_dimms\_on\_that\_bank*  
*board\_loc/proc/all\_banks\_on\_that\_proc*  
*board\_loc/all\_banks\_on\_that\_board*  
*board\_loc/proc*  
*board\_loc/procs*  
*board\_loc/cassette*  
*board\_loc/bus*  
*board\_loc/paroli\_link*

*location* 引数が複数の場合は、スペースで区切ります。

*location* 形式は、オプションであり、特定の位置にあるボード上の特定のコンポーネントを指定するために使用されます。

たとえば、*location* が SB5/P0/B1/L1 の場合、SB5 にあるプロセッサ 0 上のバンク 1 の論理バンク 1 を示します。

*location* が SB0/PP1 の場合、SB0 にあるプロセッサペア 1 を示します。

*location* が CS0/ABUS の場合、センタープレーンのアドレスバス 0 を示します。

*location* が EX11/DBUS1 の場合、拡張ボード 11 のデータバス 1 を示します。

次の *board\_loc* 形式が使用できます。

Sun Fire 15K, Sun Fire 12K

SB(0...17), SB(0...8)

IO(0...17), IO(0...8)

CS(0|1), CS(0|1)

EX(0...17), EX(0...8)

プロセッサ位置は、単一のプロセッサまたはプロセッサペアを示します。

1 枚の CPU/メモリーボードでは、4 つのプロセッサが使用できます。ボード上のプロセッサペアは、procs 0 と 1、および procs 2 と 3 です。

MaxCPU には、procs 0 と 1、および 1 つのみの proc ペア (PP0) の 2 つのプロセッサがあります。このボードに PP1 を使用すると、disablecomponent が終了し、エラーメッセージが表示されます。

次の *proc* 形式が使用できます。

P(0...3) PP(0|1)

次の *bank* 形式が使用できます。

B(0|1)

次の *logical\_bank* 形式が使用できます。

L(0|1)

次の *all\_dimms\_on\_that\_bank* 形式が使用できます。

D

次の *all\_banks\_on\_that\_proc* 形式が使用できます。

B

次の *all\_banks\_on\_that\_board* 形式が使用できます。

B

次の *paroli\_link* の形式が使用できます。

PAR(0|1)

hsPCI アセンブリには、ホットスワップ可能なカセットが含まれます。

次の *hsPCI* 形式が使用できます。

C(3|5)V(0|1)

hsPCI+ アセンブリには、ホットスワップ可能なカセットが含まれます。

次の *hsPCI+* 形式が使用できます。

C3V(0|1|2) および C5V0

バス位置には、アドレス、データおよび応答の 3 つがあります。

次の *bus* 形式が使用できます。

ABUS|DBUS|RBUS (0|1)

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権、ドメイン管理者特権またはドメイン構成者特権が必要です。プラットフォーム特権を持っている場合は、プラットフォームのコンポーネントに対してのみ、このコマンドを実行することができます。ドメイン特権を持っている場合は、特権を持っているドメインに対してのみ、このコマンドを実行することができます。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

### 使用例

使用例 1 – ASR ブラックリストから CSB0 を削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -a CS0
```

**使用例 2** —システムボード 0 上のプロセッサ 0 にあるバンク 0 の論理バンク 0 をドメイン A のブラックリストから削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dA SB0/P0/B0/L0
```

**使用例 3** —システムボード 3 上のプロセッサ 1 にあるバンク 0 のすべての DIMM をドメイン A のブラックリストから削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dA SB3/P1/B0/D
```

**使用例 4** —システムボード 1 上のプロセッサ 0 のすべてのバンクをドメイン B のブラックリストから削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dB SB1/P0/B
```

**使用例 5** —システムボード 0 上のすべてのバンクをドメイン D のブラックリストから削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dD SB0/B
```

**使用例 6** —プラットフォームブラックリストから入出力ボード 7 のプロセッサペア 0 を削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent IO7/PP0
```

**使用例 7** —ドメイン A ブラックリストからシステムボード 3 のプロセッサ 1 を削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dA SB3/P1
```

**使用例 8** —ドメイン A ブラックリストから入出力ボード 6 の 3V スロット内の hsPCI カセットを削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dA IO6/C3V0
```

**使用例 9** —wPCi ボード 5 上の Paroli Link 0 をプラットフォームブラックリストから削除する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent IO7/PAR0
```

**使用例 10** —ドメイン A ブラックリストから EX7 のアドレスバス CS0 を削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dA EX7/ABUS0
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

`/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist`

`esmd` によって除外されるコンポーネントの一覧。

`/etc/opt/SUNWSMS/config/platform/blacklist`

除外されるプラットフォームコンポーネントの一覧。

`/etc/opt/SUNWSMS/config/domain_id/blacklist`

除外されるドメインコンポーネントの一覧。

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

`addboard(1M)`、`disablecomponent(1M)`、`esmd(1M)`、`showcomponent(1M)`

名前	esmd – 環境状態監視デーモン
形式	esmd
機能説明	<p>esmd(1M) は、システムキャビネットの環境条件 (電圧、温度、ファントレイ、電源装置など) を監視します。esmd は異常な条件を記録し、必要に応じて処置を行い、ハードウェアを保護します。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に開始されます。コマンド行から手動で開始しないでください。</p>
拡張機能説明	<p>esmd は、次のボードが条件の範囲外かどうかを監視します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ CPU ボード</li> <li>■ MaxCPU ボード</li> <li>■ HPCI ボード</li> <li>■ HPCI+ ボード</li> <li>■ 拡張ボード</li> <li>■ センタープレーンサポートボード</li> <li>■ SC 制御ボード</li> <li>■ SC I/O</li> <li>■ ファン制御ボード</li> <li>■ 電源装置 (バルク)</li> </ul> <p>esmd は次のイベントを認識し、適切なクライアントまたはデーモンを警告します。</p> <p>コンポーネントの挿入 あるポーリングサイクルから次のポーリングサイクルへ、コンポーネントの存在を通知します。クライアント (hwad(1M)、pcd(1M)、dsmd(1M) など) が特定のコンポーネントタイプに対する通知を要求すると、esmd は通知を送信します。</p> <p>コンポーネントの削除 あるポーリングサイクルから次のポーリングサイクルへ、コンポーネントの欠如を通知します。クライアント (hwad、pcd、dsmd など) が特定のコンポーネントタイプに対する通知を要求すると、esmd は通知を送信します。</p>

PCI カード挿入	PCI カードが PCI ボードに挿入された場合に通知します。
PCI カードの削除	PCI ボードから PCI カードが削除された場合に通知します。
ボードの電源切断	ボードの電源が切断された場合、または (以前はオンになっていた電源が) オフになった場合に通知します。
ボードの電源投入	ボードの電源が投入された、または (以前はオフになっていた電源が) オンになった場合に通知します。
ボードの温度変化	ボードの温度センサーが 2 度の差を記録した場合、または温度のしきい値に達した場合に通知します。
ボードの電圧変化	電圧センサーの値が変化して、範囲外のしきい値に近づいた場合、または新しい値が範囲外の場合に通知します。この場合には、esmd は、ドメインからボードを削除し、電源を切ります。
ボードの電流変化	監視されているボードの電流値が変化した場合に通知します。
CSB の状態変化	監視されている CBS ボードのプロパティが変化した場合に通知します。
EXB 状態変化	監視されている EXB ボードのプロパティが変化した場合に通知します。
CPU 状態変化	監視されている CPU ボードのプロパティが変化した場合に通知します。
大量電源状態変化	大量電源装置のプロパティが変化した場合に通知します。
ファントレイ状態変化	監視されているファントレイのプロパティが変化した場合に通知します。
PCI カード状態変化	監視されている PCI カードのプロパティが変化した場合に通知します。

esmd クライアントには以下のものが含まれています。

hwad	ハードウェアアクセスのデーモン
pcd	プラットフォーム設定データベースのデーモン
dsmd	ドメイン状態の監視デーモン

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』を参照してください。

#### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。

#### ファイル

次のファイルがサポートされています。

/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages

メッセージファイルの格納

#### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

#### 関連項目

dsmd(1M)、hwad(1M)、pcd(1M)、ssd(1M)



名前	flashupdate - CPU ボード、MaxCPU ボード、およびシステムコントローラ (SC) 上のフラッシュ PROM を更新
形式	<pre>flashupdate -d domain_indicator -f path [-q -v] [-y -n] flashupdate -f path [-q -v] [-y -n] location ... flashupdate -h</pre>
機能説明	<p>flashupdate(1M) は、システムコントローラ (SC) 内のフラッシュ PROM (FPROM) と、ボード位置で指定されたドメインの CPU および MaxCPU ボード上の FPROM を更新します。</p> <p>システムコントローラ内の FPROM を更新するには、更新対象の SC にログインし、更新する FPROM を指定する必要があります。(SC から他の SC 内の FPROM を更新することはできません。) それぞれの FPROM には、関連付けられている固有のイメージファイルがあります。FPROM を更新した SC は、ただちにシャットダウンしてリセットする必要があります。後述する「使用例」の使用例 6 を参照してください。CPU の FPROM を更新した場合には、SC をリセットする必要はありません。</p> <p>CPU の FPROM を更新するには、SMS が動作しており、指定するボードの電源がオンになっていることが前提になります。SC の FPROM を更新する場合は、これらの条件を満たす必要はありません。ドメインのいずれかの CPU または MaxCPU ボードで、仮想キースイッチが <code>secure</code> の位置に設定されている場合は、FPROM は更新されません。</p> <p>flashupdate は、更新の前に、現在の FPROM およびフラッシュイメージファイルの情報を表示します。FPROM を更新するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> flashupdate の実行中には、対象のシステムボードに対して、CLI コマンドはいっさい実行すべきではありません。対象のシステムボードに影響を与えるような SMS コマンドを実行する前に、flashupdate の実行が完了するまで待ってください。</p> <hr/>

## オプション

次のオプションがサポートされています。

**-d *domain\_indicator***

次のいずれかを使ってドメインを指定します。

*domain\_id* - ドメインの ID です。有効な *domain\_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

*domain\_tag* - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。

**-f *path***

フラッシュイメージファイルの名前。

引数 *path* には、引数 *location* で指定した FPROM の更新に使用するイメージファイルの名前を指定します。

**-h** ヘルプ。使用方法を表示します。

---

**注 -** 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されます。

---

**-n** すべてのプロンプトに自動的に **no** と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

**-q** 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。

単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。

-y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、-q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。

**-v** 冗長モード。ファームウェアのバージョン情報を表示します。これはサンのサービス担当者によって、内部用途に使用される情報です。表示形式は公開されておらず、変更される可能性もあります。

**-y** すべてのプロンプトに自動的に **yes** と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*location* FEPROM の位置。

FEPROM の位置は、スラッシュで区切られた形式の *board\_loc/FEPROM\_id* で構成されます。

*FEPROM\_id* は、CPU ボードおよびシステムコントローラ (SC) 上の特定の FEPROM (FP0 または FP1) を更新する場合のみ指定します。

たとえば、SB4/FP0 という位置は、スロット 4 の CPU ボード上の FEPROM 0 を表します。

Sun Fire 15K, Sun Fire 12K

SB(0...17), SB(0...8)

IO(0...17), IO(0...8)

SC(0|1), SC(0|1)

次の *FEPROM\_id* 形式が使用できます。

FP(0|1), FP(0|1)

## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権またはドメイン管理者特権が必要です。プラットフォーム管理者特権を持っている場合は、すべてのボードを更新することができます。ドメイン管理者の特権を持っている場合は、管理者のドメインでアクティブまたは使用可能になっているボードのみ更新できます。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

**使用例 1** — システムコントローラ 0 の FEPROM 0 を更新する

このコマンドの実行後、SC をリセットする必要があります。

```
sc0:sms-user:>flashupdate -f /opt/SUNWSMS/firmware/SCOBPing.di SC0/FP0
```

**使用例 2** — システムコントローラ 0 の FEPROM 1 を更新する

このコマンドの実行後、SC をリセットする必要があります。

```
sc0:sms-user:>flashupdate -f /opt/SUNWSMS/firmware/SSCPOST.di SC0/FP1
```

**使用例 3** — システムコントローラ 1 の FPROM 0 を更新する  
このコマンドの実行後、SC をリセットする必要があります。

```
sc1:sms-user:>flashupdate -f /opt/SUNWSMS/firmware/SCOBpimg.di SC1/FP0
```

**使用例 4** — CPU ボード 0 の両方の FPROM を更新する  
SMS が起動しており、かつ SB0 ボードの電源が投入されている必要があります。

```
sc0:sms-user:> flashupdate -f /opt/SUNWSMS/hostobjs/sgcpu.flash SB0
Do you wish to update the FPROM (yes/no)? y
sc0:sms-user:>
```

**使用例 5** — ドメイン A の FPROM を更新する  
SMS が起動しており、かつドメイン A の CPU ボードの電源が投入されている必要があります。

```
sc0:sms-user:>flashupdate -d A -f /opt/SUNWSMS/hostobjs/sgcpu.flash
```

**使用例 6** — SC FPROM 更新後に SC をリセットする

スーパーユーザーになり、SC をシャットダウンします。

```
sc0:sms-user:>su -
sc0:# shutdown -y -g0 -i0
...[システムメッセージ]
ok
```

新しいファームウェアを SC で有効にするには、ここで SC をリセットする必要があります。

次のコマンドを入力します。

```
ok reset-all
```

このコマンドを実行しても SC がリセットされない場合、SC をハードリセットする必要があります。

Sun Fire 15K/12K の筐体を開いてシステムコントローラを見つけ、SC ボード上にある Abort ボタンを押し、続いて Reset ボタンを押してください。SC をリセットすると、新しいバージョンのファームウェアがロードされたことを示す OpenBoot PROM メッセージが表示されます。システムが ok プロンプトを表示した状態に戻った後、次のコマンドを入力して flashupdate が実行されたかどうかを確認します。

```
ok show-dropins
```

```
Dropins for Flash device: /pci@1f,0/pci@1,1/ebus@1/flashprom@10,400000
-----
Dropin name      Size Checksum Date          Date          Version Vendor
                   created      flashed
-----
SSCOBP-dropins   90    c84e   11/13/2001   11/13/2001   1.2   SUNW,sscobp
....
....
```

ドロップインのバージョン番号 (1.2) を確認します。

新たにインストールした Solaris ソフトウェアを起動できる状態になりました。次のコマンドを入力します。

```
ok boot 新しいディスク
```

プラットフォーム管理者としてログインし、次のコマンドを入力します。

```
sc0:sms-user:> flashupdate -f /opt/SUNWSMS/firmware/SCOBPimg.di SC0/
FP0
```

```
Current SC FPROM Information
=====
SC at SC0, FPROM 0:
Name: SSCOBP-dropins,
Version: 1.2
Size: 144,
Check Sum: 51278
Date Flashed: 11/13/01
Date Created: 11/13/01
```

```
Do you wish to update the SC User FPROM (yes/no)? n
```

```
sc0:sms-user:>
```

バージョン番号を比較します。バージョン番号が同じであれば、flashupdate は正常に実行されたこととなります。

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## ファイル

このコマンドでは、以下のファイルを使用します。

```
/opt/SUNWSMS/firmware/SCOBPimg.di
```

SC 上のフラッシュ FEPROM 0 を更新する場合に使用します。

```
/opt/SUNWSMS/firmware/SSCPOST.di
```

SC 上の FEPROM 1 を更新する場合に使用します。

```
/opt/SUNWSMS/hostobjs/sgcpu.flash
```

CPU および MaxCPU ボード上の FEPROM を更新する場合に使用します。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Interface stability	Evolving
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

setkeyswitch(1M)

名前	fomd - フェイルオーバー管理デーモン				
形式	fomd				
機能説明	<p>fomd(1M) は、システムコントローラ (SC) のフェイルオーバーメカニズムの中核です。fomd デーモンはローカルと遠隔の SC 上の障害を検出し、(フェイルオーバーまたはテイクオーバーに対する) 適切な処置を行います。</p> <p>fomd デーモンは 2 台の SC の間で、必要な同期データを最新状態に維持します。fomd はメインとスペアの両方の SC で動作します。</p> <p>このデーモンは <code>ssd(1M)</code> によって自動的に開始されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>				
終了ステータス	<p>次の終了値が返されます。</p> <p>0       正常に終了しました。</p> <p>0 以外 エラーが発生しました。</p>				
ファイル	<p>以下の構成ファイルが必要です。</p> <p><code>/etc/opt/SUNWSMS/config/fomd.cf</code></p> <p>        フェイルオーバーデーモンの構成ファイル</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、<code>attributes(5)</code> を参照してください。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	<code>setfailover(1M)</code> 、 <code>showfailover(1M)</code>				

名前 | frad – FRU アクセスデーモン

形式 | frad

機能説明 | frad(1M) はシステムコントローラ (SC) 上で稼働し、排他のメカニズムを提供します。デーモンなどの SMS プロセスは、このメカニズムによって、特定の Sun Fire 15K/12K システムの FRU SEEPROM にアクセスします。また、frad は、FRU ID ソフトウェアツールに必要な、プラットフォーム固有のインタフェースを Sun Fire 15K/12K SEEPROM に提供します。

このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に開始されます。コマンド行から手動で起動しないでください。

終了ステータス | 次の終了値が返されます。

0        正常に終了しました。

0 以外   エラーが発生しました。

属性 | 次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目 | ssd(1M)



名前	help – SMS コマンドのヘルプ情報を表示
形式	help [ <i>command_name</i> ]  help -h
機能説明	引数を指定しないで help(1M) を使用すると、有効な SMS コマンドとその構文が表示されます。引数を指定すると、 <i>command_name</i> オペランドは、そのコマンドのマニュアルページを表示します。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -h      ヘルプ。使用方法を表示します。
オペランド	次のオペランドがサポートされています。  <i>command_name</i> help でマニュアルページを表示する対象となるコマンド。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、ドメイン設定者、またはスーパーユーザーの特権が必要です。  詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。
使用例	<b>使用例 1 – ヘルプを使用する</b>  すべてのコマンドを表示します。  sc0:sms-user:> <b>help</b> usage: addboard -d <i>domain_indicator</i> [ -c <i>function</i> ] [-r <i>retry_count</i> [-t <i>timeout</i> ]] [-q ] [-y   -n] <i>location</i> ... addboard -h .... .... .... smsversion -h

**使用例 2** - コマンドのヘルプを使用する

man(1M) ページを表示します。

```
sc0:sms-user:> help addtag
```

```
Maintenance Commands addtag(1M)
```

```
NAME
    addtag - assign a domain name (tag) to a domain
```

SYNOPSIS

```
addtag -d domain_indicator -a new_tag [-q ] [-y | -n]
.....
```

**終了ステータス**

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

**属性**

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

**関連項目**

man(1M)

名前	hpost – Sun Fire 15K/12K の電源投入時自己診断 (POST) 制御系アプリケーション
形式	hpost
機能説明	<p>hpost(1M) は、Sun Fire 15K/12K ドメインのハードウェアをプローブ、テスト、設定し、OpenBoot PROM および Solaris オペレーティング環境で使用するための準備を行います。代替モードでは、動的再構成 (DR) を使用して、シングルボードを実行中のドメインに<b>接続</b>する準備を行います。また、システムコントローラ (SC) 上にハードウェアの状態ダンプファイルを作成し、重大度の低いエラー状態を消去して、関連する Sun Fire 15K/12K ハードウェアの操作を実行します。</p> <hr/> <p><b>注 –</b> このアプリケーションは、SMS の他のアプリケーションまたはデーモンでのみ実行することを前提としています。このアプリケーションをコマンド行から直接起動すると、実行中のドメインに障害が発生する可能性があります。このような障害はサポートの<b>対象外</b>となります。</p> <hr/> <p>hpost のクライアントには、以下のものが含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ dsmd(1M)</li> <li>■ dxs(1M)</li> <li>■ setkeyswitch(1M)</li> </ul> <p>hpost は、以下のクライアントです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ hwad(1M)</li> <li>■ pcd(1M)</li> </ul> <p>hpost では、SUNWSMS1p パッケージで提供されているフラッシュ PROM イメージ、およびダウンロード可能なローカル POST 実行可能ファイルが必要です。</p>
属性	次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSpo

関連項目

dsmd(1M)、hwad(1M)、pcd(1M)、setkeyswitch(1M)、dxs(1M)

名前	hwad - ハードウェアアクセスデーモン				
形式	hwad				
機能説明	<p>hwad(1M) は、排他のメカニズムを提供します。このメカニズムによって、デーモンなどの SMS のプロセスは、ハードウェアのアクセス、制御、監視、および設定を行います。</p> <p>hwad は、メインモードまたはスペアモードで稼働し、フェイルオーバーデーモン (fomd(1M)) に対して、デーモンが発生した際にシステムコントローラ (SC) が果たす役割を要求します。</p> <p>hwad は、起動時にすべてのドライバ (sbbsc、echip、gchip、console bus) をオープンし、ioctl1 呼び出しを使用して、これらのドライバとインタフェースをとります。hwad は、デバイスプレゼンスレジスタの内容を読み込んでシステム内にボードが存在することを確認し、クライアントがボードにアクセスできるようにします。</p> <p>hwad には IOSRAM と Mbox のインタフェースも用意されています。これらのインタフェースは、SC とドメイン間の通信をサポートします。動的再構成 (DR) では、hwad は、新しい IOSRAM (トンネルスイッチ) と通信するよう指示します。darb 割り込みでは、hwad は dsmd(1M) に、dstop または rstop があるかどうかを通知します。また、発生した Mbox 割り込みのタイプによって、関連する SMS デーモンを通知します。</p> <p>hwad は、console バスおよび JTAG エラーを検出し、回復します。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	dsmd(1M)、ssd(1M)				

名前	initcmdsyc - コマンド同期コマンド
形式	cancelcmdsyc <i>cmdsyc_descriptor</i>  initcmdsyc <i>script_name</i> [ <i>parameters</i> ]  savecmdsyc -M <i>identifier</i> <i>cmdsyc_descriptor</i>  [cancel init save]cmdsyc -h
機能説明	<p>これらのコマンド同期コマンドはともに機能し、システムコントローラ (SC) のフェイルオーバーによって中断されたユーザー定義のスキプトの回復を制御します。コマンドを同期化するには、ユーザー定義のスキプトに次のコマンドを挿入します。</p> <p><b>initcmdsyc</b>           回復するスキプトを特定するための、コマンド同期記述子を作成します。 この記述子は、コマンド同期リストの中に定義されます。このリストは、フェイルオーバーが発生した後で、新しいメインの SC で再起動するスキプトとコマンドを特定します。</p> <p><b>savecmdsyc</b>           フェイルオーバーが発生した後で、スキプト内のどの場所から処理を再開するかを特定するためのマーカーを追加します。</p> <p><b>cancelcmdsyc</b>       コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除します。これによって、スキプトは 1 度だけ実行され、それ以降のフェイルオーバーの後には実行されません。</p> <p>コマンド同期リストから記述子を削除するために、スキプトのすべての出力先には、必ず 1 つの <b>cancelcmdsyc</b> シーケンスを定義します。記述子が削除されていない場合にフェイルオーバーが発生すると、スキプトは、新しいメイン SC 上で実行されます。</p>

---

注 - `initcmdsyc` と `cancelcmdsyc` のシーケンスは、コマンドが同期化されるように必ず 1 つのスクリプトに定義します。 `savecmdsyc` はオプションのコマンドで、スクリプト内の場所をマークして処理を再開する場所を特定する場合のみ使用します。特別な再開ポイントが必要ない場合は、代わりに `runccmdsyc(1M)` を使用することもできます。

---

## オプション

次のオプションがサポートされています。

*cmdsyc\_descriptor*      コマンド同期記述子 (ユーザー定義スクリプトを指定する記述子) を表します。この記述子は、`initcmdsyc` コマンドの標準の出力値として返されます。

`-h`                      ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。 `-h` に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

`-M identifier`          フェイルオーバーの後に、スクリプトを再開する場所を指定します。この記述子は、正の整数とします。

*parameters*              ユーザー定義スクリプトに関連するオプションまたはパラメータを表します。これらのパラメータは、スเปア SC に格納されており、フェイルオーバーの後で指定されたスクリプトを再起動する際に使用します。

*script\_name*              同期的に処理されるユーザー定義スクリプトの名前を表します。 *script\_name* には、実行可能ファイルの名前を絶対パスで指定します。このコマンドは、両方の SC で同じ場所に位置している必要があります。

## 拡張機能説明

コマンド同期コマンドは、ユーザー定義スクリプト内の特定の論理ポイントに挿入します。

たとえば、**Korn** シェルスクリプトは、以下のようになります。

```
# MAIN CODE STARTS HERE
# Be sure to use a cleanup procedure to handle any
# interrupts.
# Use the cancelcmdsyc to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command
# will get restarted on the new main SC.
#
clean_up () {
    cancelcmdsyc $desc
    exit
}

# Declare the clean_up function to capture system signals
# and cleanup.
trap "clean_up" INT HUP TERM QUIT PWR URG
goto_label=1
# Process the arguments, capturing the -M marker point
# if provided
#
for arg in $*; do
    case $arg in
        -M )
            goto_label=$arg;;
        .
        .
    esac
done
# Place this script and all its parameters in the command
# synchronization list, which indicates the commands to
# be restarted after an SC failover.
#
# NOTE: The script must be executable by the user defined
# in fomd.cf and reside in the same directory on both the
# main and the spare SC.
```



```

# If the command is not part of the defined PATH for
# the user, the absolute filename must be passed with the
# initcmdsyc command
#
initcmdsyc script_name parameters
# The marker point is stored in the goto_label variable.
# Keep executing this script until all cases have been
# processed or an error is detected.
#
while (( $goto_label != 0 )) ; do
#
# Each case should represent a synchronization point
# in the script.
#
case $goto_label in
#
# Step 1: Do something
#
1 )          do_something
              .
              .
              .

# Execute the savecmdsyc command with the script's
# descriptor and a unique marker to save the position.
# If a failover occurs here, the commands represented in
# the next goto_label (2) will be resumed.
#
              savecmdsyc -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
              goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
              ;;

#
# Step 2: Do more things
#
2 )          do_more_things
              .
              .
              .
              savecmdsyc -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
              goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
              ;;

#
# Step 3: Finish the last step and set the goto_label to 0
# so that the script ends.
3 )
              finish_last_step
              .
              .
              .
              goto_label=0
              ;;

        esac
done
# END OF MAIN CODE
# Remember to execute cancelcmdsyc to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command will be restarted
# after the failover.
#
cancelcmdsyc $desc

```

initcmdsync(1M)

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

---

**注 -** initcmdsync の標準出力には、コマンド同期記述子が含まれていません。(フェイルオーバーが終了した場合や、単一の SC 環境などで) フェイルオーバーが使用できない場合は、同期コマンドが含まれているスクリプトでは、プラットフォームのログファイルに対してエラーメッセージを生成し、ゼロ以外の終了コードを返します。これらのメッセージは無視することもできます。

---

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

runcmdsync(1M), showcmdsync(1M)

名前	kmd – SMS キー管理デーモン
形式	kmd
機能説明	<p>kmd(1M) は、システムコントローラ (SC) とドメイン上で稼働しているサーバーとの通信を保証するために必要な IPSec セキュリティー関連付け (SA) を管理します。kmd は、SC 上のクライアントが開始したドメイン上のサーバーへの接続について、ソケットごとのポリシーを管理します。kmd は、ドメイン上のクライアントが開始した SC 上のサーバーへの接続について、共有ポリシーを管理します。</p> <p>現在のデフォルト設定には、ドメイン上の dcs (1M) および cvcd(1M) サーバーに接続する、SC 上の dca(1M) および dxs(1M) クライアントについての認証ポリシーが含まれています。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p> <hr/> <p><b>注 –</b> kmd は必ず root プロセスとして実行し、IPSec に対する pf_key インタフェースを使用できるようにします。</p> <hr/>
終了ステータス	<p>次の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了しました。</p> <p>0 以外 エラーが発生しました。</p>
ファイル	<p>kmd の設定では以下のファイルを使用します。</p> <p><code>/etc/opt/SUNWSMS/config/kmd_policy.cf</code></p> <p><code>kmd_policy.cf</code> は、kmd で管理される共有ポリシーとソケットごとのポリシーを設定します。</p> <p>ポリシーの変更は、SC の <code>kmd_policy.cf</code> ファイルを編集して行います。影響を受けるドメインで、対応する変更を反映させる必要があります。</p> <p><code>kmd_policy.cf</code> の形式は、パイプ (' ') 文字で区切られた 8 つのフィールドから構成されるテーブルです。</p> <p><code>dir d_port protocol sa_type auth_alg encr_alg domain login</code></p>

フィールドの定義は以下のとおりです。

<i>dir</i>	接続の方向。 有効値は <code>sctodom</code> と <code>domtosc</code> です。
<i>d_port</i>	宛先ポート。
<i>protocol</i>	ソケットのプロトコル。 有効値は <code>tcp</code> 、 <code>udp</code> です。
<i>sa_type</i>	セキュリティー関連付けのタイプ。 有効値は <code>ah</code> 、 <code>esp</code> です。
<i>auth_alg</i>	認証のアルゴリズム。 有効値は <code>none</code> 、 <code>md5</code> 、 <code>sha1</code> です。
<i>encr_alg</i>	暗号化のアルゴリズム。 有効値は <code>none</code> 、 <code>des</code> 、 <code>3des</code> です。
<i>domain</i>	ドメイン ID。 有効値は、整数と空白文字です。ドメイン ID を空白にすると、すべてのドメインに適用されるポリシーを定義します。すべてのドメインに適用されるポリシーよりも、特定ドメインのポリシーが優先されます。
<i>login</i>	ログイン名。 有効な任意のログイン名を使用できます。

`kmd_policy.cf` ファイルのデフォルトのポリシーは、以下のようになります。

```
sctodom|665|tcp|ah|md5|none| |sms-dca|
sctodom|442|tcp|ah|md5|none| |sms-dxs|
```

ドメインに関するポリシーの設定は、標準 IPsec の構成ファイル (`/etc/inet/ipsecconf.init`) に保存されています。

デフォルトのポリシーは、以下のようになります。

```

{ dport sun-dr } permit {auth_alg md5 }
{ sport sun-dr } apply {auth_alg md5 sa unique }
{ dport cvc_hostd } permit {auth_alg md5 }
{ sport cvc_hostd } apply {auth_alg md5 sa unique }

```

**属性**

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSr, SUNWSMSop

**関連項目**

ssd(1M)、sckmd(1M)、ipseconf(1M)、pf\_key(1M)、ipsec(1M)、  
dca(1M)、dxs(1M)、dcs(1M)、cvcd(1M)

名前	mand – 管理ネットワークデーモン
形式	mand
機能説明	<p>mand(1M) は、必要なネットワーク構成を提供することによって、管理ネットワーク (MAN) ドライバおよびフェイルオーバー管理デーモン (fomd(1M)) をサポートします。この構成情報には、ホスト名、IP アドレス、およびネットマスクが含まれています。mand は、プラットフォーム構成データベース (pcd(1M)) デーモンの各フィールド、およびシステムコントローラ (SC) の MAN ドライバを初期化・更新することもできます。</p> <p>mand は、メイン SC とスペア SC の両方で実行される SMS デーモンです。mand の役割は fomd によって設定されます。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>
拡張機能説明	<p>SC-to-Domain および Domain-to-SC Internal Network (I1) データには、以下のものが含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ネットワークマスク</li> <li>■ SC ホスト名</li> <li>■ SC IP アドレス</li> <li>■ ドメイン [A-R] IP ホスト名</li> <li>■ ドメイン [A-R] IP アドレス</li> </ul> <p>SC-to-SC internal Network (I2) データには、以下のものが含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ネットワークマスク</li> <li>■ SC 0 ホスト名</li> <li>■ SC 0 IP アドレス</li> <li>■ SC 1 ホスト名</li> <li>■ SC 1 IP アドレス</li> </ul> <p>SC External Community (C) データには、以下のものが含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ コミュニティフェイルオーバー IP アドレス</li> <li>■ コミュニティ物理インタフェース名</li> </ul>

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## ファイル

以下の構成ファイルが必要です。

`/etc/opt/SUNWSMS/config/MAN.cf`

このファイルには、`domain-to-SC`、`SC-to-domain`、`SC-to-SC` の管理ネットワークデータ、および `SC` へ外部アクセスするためのコミュニティーデータが含まれています。

`MAN.cf` ファイルは手動で変更しないでください。

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

`fomd(1M)`、`pcd(1M)`、`smsconfig(1M)`、`ssd(1M)`

名前	mld - メッセージロギングデーモン
形式	mld [-f <i>config_file</i> ] [-t]
機能説明	<p>mld(1M) は、SMS のすべてのデーモンに対するロギングサービスを提供します。mld は、ssd(1M) によって開始される SMS の最初のデーモンで、SMS の他のすべてのデーモンの出力を取得し、それらの起動フェーズで処理を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ プラットフォームログメッセージは、以下の場所に格納されています。             <pre style="margin-left: 2em;">/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages</pre> <p>形式は以下のとおりです。</p> <pre style="margin-left: 2em;"><i>time host program [pid]:[msg_id hrtime_t level file_line] message</i></pre> <p><i>file_line</i> はオプションで、冗長モードの場合のみ示されます。</p> <p>たとえば、以下のようになります。</p> <pre style="margin-left: 2em;">Feb 2 26 09:16:10 2002 sun15 mld[904]:[209 2345678901 INFO MLDLOGGER.cc 141] Platform messages file created.</pre> </li> <li>■ ドメインログメッセージは、以下の場所に格納されています。             <pre style="margin-left: 2em;">/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/messages</pre> <p>形式は、プラットフォームメッセージと同様ですが、pid の後に <i>domain_id</i> \ <i>domain_tag</i> が付加されています。</p> <pre style="margin-left: 2em;"><i>time host program [pid]domain_id \ domain_tag:[msg_id hrtime_t level file_line] message</i></pre> <p>たとえば、以下のようになります。</p> <pre style="margin-left: 2em;">Feb 2 09:18:55 2002 sun15 mld[904]-B (eng2): [314 2345678902 ERR LogManager.cc 424] message queue limit exceeded, messages will be dropped.</pre> </li> </ul>



- ドメイン syslog メッセージは、以下の場所に格納されています。

/var/opt/SUNWSMS/adm/*domain\_id*/syslog

形式は、受信した形式と同様です。

## オプション

次のオプションがサポートされています。

- f *config\_file* 代替の遠隔メッセージ受信構成ファイルに対する絶対パスを表します。
- t (ドメイン syslog メッセージなどの) 遠隔メッセージ受信を無効にします。

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。

## ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

/var/opt/SUNWSMS/adm/.logger

メッセージロギングデーモンの構成ファイル。

このファイルは、次の 3 つの指示をサポートしています。

- FILE                   メッセージの出力先を表します。デフォルトは msgdaemon で、この値は変更できません。
- LEVEL                  メッセージを記録するために mld で必要な最低限のレベルを表します。サポートしているレベルは、debug、info、notice、warning、err、crit、alert、および emerg です。デフォルトは notice です。
- MODE                   メッセージの冗長性を表します。verbose モードと terse モードを使用することができます。デフォルトは verbose モードです。

---

注 - すべての引数では、大文字・小文字は区別されません。

---

mld(1M)

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

ssd(1M)

名前	moveboard - ドメイン間でのボードの移動
形式	<pre>moveboard -d domain_indicator [-c function] [-r retry_count -t timeout]] [-q] [-f] [-y -n] location</pre>
機能説明	<p>moveboard -h</p> <p>moveboard(1M) は、ドメインから、現在割り当てられてアクティブになっている <i>location</i> を最初に unconfigure、disconnect、unassign にします。次に、ドメイン <i>domain_id</i> または <i>domain_tag</i> に対して <i>location</i> を assign、connect、configure します。</p> <p>-c <i>function</i> コマンドは、現在の設定状態から新しい設定状態へ、ボードの切り替えを指定する場合に使用します。設定状態は、assign、connect、および configure のいずれかとなります。-c オプションを指定しない場合は、デフォルトの設定状態は configure になります。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> moveboard は、タスクを同期的に実行し、コマンドが完了するまで制御をユーザーに返しません。ボードの電源が入っていないか、またはテストされていない状態で、-c connect configure オプションを指定すると、このコマンドによってボードの電源が投入され、テストされます。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> 指定されたボードが自動システム回復 (ASR) ブラックリストファイルに定義されている場合は、moveboard は、ボードの割り当て時にエラーメッセージを表示して、処理を続行します。connect または configure 機能を使用している場合は、moveboard はエラーメッセージを表示して終了します。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> moveboard コマンドの実行が失敗しても、対象のボードは実行前の状態には戻りません。dxs エラーメッセージ (または dca エラーメッセージ) がドメインのログに出力されます。発生したエラーが回復可能であれば、コマンドを再試行できます。回復不能な場合、対象のボードを使用するためには、当該ドメインを再起動する必要があります。</p>

## オプション

次のオプションがサポートされています。

**-c function**

*function* の有効な値は、*assign*、*connect*、または *configure* です。これらの値のうち 1 つを、設定状態の切り替えを制御する場合に使用します。

有効な切り替え状態とその意味は以下のとおりです。

**assign**

ドメイン上で稼働している Solaris オペレーティング環境からボードの構成を解除します。Solaris ソフトウェアは、ボード上のすべてのハードウェア資源の使用を停止します。(deleteboard -c unconfigure を参照してください)。ボードを切り離します。ボードを disconnected|unconfigured 状態に切り替えます。(deleteboard -c disconnect を参照してください)。現在のドメインからボードの割り当てを解除します。(deleteboard -c unassign を参照してください)。状態を **使用可能** (available) に変更して、論理ドメインからボードを移動します。ボードを新しい論理ドメインに割り当てます。この状態のボードには当該ドメインが独占的にアクセスしますが、ボード自体はアクティブではありません。割り当てが完了すると、setkeyswitch on を使用するか、あるいは connect オプションまたは configure オプションを使用することによって、ボードをドメインに接続または設定できます。

**connect**

ドメイン上で稼働している Solaris オペレーティング環境からボードの構成を解除します。Solaris ソフトウェアは、ボード上のすべてのハードウェア資源の使用を停止します。(deleteboard -c unconfigure を参照してください)。ボードを切り離します。ボードを disconnected|unconfigured 状態に切り替えます。(deleteboard -c disconnect を参照してください)。現在のドメインからボードの割り当てを解除します。

(`deleteboard -c unassign` を参照してください)。状態を **使用可能** (`available`) に変更して、論理ドメインからボードを移動します。ボードを新しい論理ドメインに割り当てます。(上記の `assign`、および `addboard(1M) -c assign` を参照してください)。ボードを `connected|unconfigured` 状態に切り替えます。これで、ボードは論理ドメインに **割り当て** (`assigned`) られており、**接続** (`connected`) されている (アクティブになっている) 状態になります。この状態では、標準システムでボード上のハードウェア資源を使用することができます。ただし、ボードのハードウェア資源は標準の Solaris ソフトウェアのデータ構造では表現されないため、Solaris オペレーティング環境では使用できません。ボード上で使用できる操作は、設定管理に限定されます(`addboard -c connect` も参照してください)。これは一時的な状態であり、ソフトウェアによるこの状態の実装は、現時点では存在しません。

### **configure**

ドメイン上で稼働している Solaris オペレーティング環境からボードの構成を解除します。Solaris ソフトウェアは、ボード上のすべてのハードウェア資源の使用を停止します。( `deleteboard -c unconfigure` を参照してください)。ボードを切り離します。ボードを `disconnected|unconfigured` 状態に切り替えます。( `deleteboard -c disconnect` を参照してください)。現在のドメインからボードの割り当てを解除します。( `deleteboard -c unassign` を参照してください)。状態を **使用可能** (`available`) に変更して、論理ドメインからボードを移動します。ボードを新しい論理ドメインに割り当てます。(上記の `assign`、および `addboard -c assign` も参照してください)。ボードを `connected|unconfigured` 状態に切り替えます。これで、ボードは論理ドメインに割り当てられており、**接続** されている (アクティブになっている) 状態になります。この状態では、標準システムでボード上のハードウェア資源を使用することができます。ただし、ボードのハードウェア資源は標準の Solaris ソフトウェアのデータ構造

では表現されないため、Solaris オペレーティング環境では使用できません。ボード上で使用できる操作は、設定管理に限定されます(上記の connect、および addboard -c connect も参照してください)。ボードを connected|configured 状態に切り替えます。この状態では、ボードはドメインに割り当ておよび接続されているだけでなく、Solaris オペレーティング環境用に設定されています。ボード上のハードウェア資源は、Solaris ソフトウェアで使用することができます (addboard -c configure も参照してください)。

**-d domain\_indicator**

次のいずれかを使ってドメインを指定します。

*domain\_id* - ドメインの ID です。有効な *domain\_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

*domain\_tag* - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前です。

- f** 指定された処理を強制的に実行します。通常、このオプションを指定すると、安全機能がハードウェア側で制御されます。状態の強制的な変更では、条件が ok や unknown でない占有装置のハードウェア資源を、ハードウェアに基づく安全チェック機能に従って使用できます。
- h** ヘルプ。使用方法を表示します。

---

**注 -** 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

- n** すべてのプロンプトに自動的に no と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。
- q** 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。
- q を単独で使用すると、すべてのプロンプトに対して -n オプションがデフォルトで定義されます。

-q オプションを -y または -n オプションとともに使用すると、ユーザープロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「y」または「n」のいずれかで自動的に応答します。

-r *retry\_count*

-t *timeout*

これらのコマンド引数を使用すれば、状態の切り替え中に障害が発生した場合の再試行を設定できます。-r *retry\_count* オプションは単独で使用できます。この引数には、設定状態の変更が失敗したときにドメインが再試行する回数を指定します。-t *timeout* オプションは常に -r *retry\_count* オプションと共に使用し、失敗した時点から次の再試行まで、ドメインが待機する時間の長さ (秒数) を指定します。-t *timeout* を省略すると、*timeout* のデフォルト値 (0) が使用され、ただちに再試行が実行されます。

-y すべてのプロンプトに対して自動的に **yes** と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*location* ボード位置で、スペースで区切ります。複数の *location* 引数は、許可されません。

次の *location* 形式が使用できます。

Sun Fire 15K, Sun Fire 12K

SB(0...17), SB(0...8)

IO(0...17), IO(0...8)

---

**注 -** ボードタイプを使用する場合は、showboards(1M) を使用します。

---

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

ボードが **assigned** の状態 (つまり実行中のドメインで **active** になっていない) 場合は、プラットフォーム管理者特権を持っているユーザーのみ -c **assign** オプションを実行することができます。

ドメイン管理者または設定者特権を持っているユーザーは、自身のドメインについてのみ、このコマンドを実行することができます。ユーザーは、影響を受ける 2 つのドメイングループに属している必要があります。また、ボードをこれらの 2 つのドメインの使用可能構成要素リストにボードを定義しておく必要があります。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

#### 使用例

すべての例で、ボードが他のドメインでアクティブになっている場合は、そのドメインに対するドメイン管理者特権を持っていない限りなりません。また、現在のドメインからボードを割り当て解除するには、プラットフォーム管理者特権を持っているか、またはボードをドメインの使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

システムボードを新しいドメインに割り当てるには、プラットフォーム特権を持っているか、またはそのボードをドメインの使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。ドメイン内でボードを接続または設定するには、新しいドメインのドメイン特権を持っている必要があります。

#### 使用例 1 – SB4 の CPU ボードをドメイン A に割り当てる

```
sc0:sms-user:>moveboard -d A -c assign SB4
SB4 assigned to domain: A
```

#### 使用例 2 – SB4 のブラックリストに定義されている CPU ボードをドメイン A に割り当てる

```
sc0:sms-user:>moveboard -d A -c assign SB4
SB4 assigned to domain: A
Warning:SB4 is blacklisted.

You will not be able to connect or configure it.
sc0:sms-user:>
```



**使用例 3** – IO ボードをドメイン A に設定する

注意事項: デフォルトの機能は `configure` です。

```
sc0:sms-user:> moveboard -d A IO2
IO2 unassigned from domain:B
IO2 assigned to domain:A
assign IO2
assign IO2 done
poweron IO2
poweron IO2 done
test IO2
test IO2 done
connect IO2
connect IO2 done
configure IO2
configure IO2 done
notify online /devices/pci@5d,700000
notify online /devices/pci@5d,600000
notify online /devices/pci@5c,700000
notify online /devices/pci@5c,600000
notify add capacity IO2 done
```

**使用例 4** – IO7 の IO ボードをドメイン R に接続する

プラットフォーム特権を持っているか、またはボードをドメインの使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

```
sc0:sms-user:> moveboard -d R -c connect IO7
```

**使用例 5** – ブラックリストに定義されているボードをドメイン C に接続する

```
sc0:sms-user:> moveboard -d C -c connect SB0
SB0 is blacklisted. Exiting.
sc0:sms-user:>
```

**終了ステータス**

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了
- 1 応答なし
- 2 サポートされていない
- 3 操作がサポートされていない

- 4 不正な特権
- 5 ビジー
- 6 システムビジー
- 7 データエラー
- 8 ライブラリエラー
- 9 ライブラリが存在しない
- 10 条件が不十分
- 11 不正
- 12 エラー
- 13 APID が存在しない
- 14 不正な属性
- 30 不正なボード ID タイプ
- 31 不正な特権
- 32 他のドメインに割り当てられている
- 33 特権を取得できない
- 34 ドメインボード情報を取得できない
- 35 アクティブなボード一覧を取得できない
- 36 割り当てられているボード一覧を取得できない
- 38 Solaris が稼働していない
- 39 ドメイン状態の割り当てや割り当て解除ができない
- 40 ドメイン特権を取得できない
- 41 プラットフォーム特権を取得できない
- 51 不正なドメイン
- 52 不正な特権

- 55 ライブラリエラー
- 56 DR のコマンド構文エラー
- 58 内部エラー
- 59 ブラックリストに登録済みのコンポーネント
- 60 ASR ブラックリストを取得できない
- 61 ドメインのブラックリストを取得できない
- 62 プラットフォームのブラックリストを取得できない
- 64 アクティビティチェックエラー
- 65 割り当て解除チェックエラー
- 66 割り当て解除、無制限チェックエラー
- 67 ドメイン特権チェックエラー
- 70 DR 操作の失敗

## ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist
```

esmd によって除外されるコンポーネントの一覧。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/platform/blacklist
```

除外されるプラットフォームコンポーネントのリスト

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/domain_id/blacklist
```

除外されるドメインコンポーネントのリスト

---

**注 -** このファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。ASR ブラックリストファイルから特定のコンポーネントを削除するには、`enablecomponent(1M)` を使用します。

---

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、addboard(1M)、deleteboard(1M)、  
enablecomponent(1M)、esmd(1M)、showcomponent(1M)

名前	osd – OpenBoot PROM サーバーデーモン				
形式	osd				
機能説明	<p>osd(1M) は、OpenBoot PROM に対するソフトウェアサポートを提供します。osd は、setkeyswitch(1M) に SMS イベントベースのインタフェースを提供します。これは、ドメインが示される前に IDPROM および REBOOTARGS 情報を定義するためのものです。</p> <p>osd は、OpenBoot PROM からメールボックスコマンドも受け取ります。これらのメールボックスコマンドは処置され、結果は OpenBoot PROM に返されます。コマンドには、get-time-of-day、set-time-of-day、get-idprom、get-nvram-data、set-nvram-data、get-reboot-args、set-reboot-args、do-tunnel-switch があります。システムコントローラ (SC) 上にある osd の 1 つのインスタンスが、すべてのドメインで共有されます。</p> <p>このデーモンは sss(1M) によって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>				
拡張機能説明					
必要なグループ特権	osd は、sms-osd ユーザーとして実行されます。				
終了ステータス	<p>次の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了しました。</p> <p>0 以外 エラーが発生しました。</p>				
属性	次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。				
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	setkeyswitch(1M)				

名前	pcd - プラットフォーム構成データベースデーモン
形式	pcd
機能説明	<p>pcd(1M) は、プラットフォーム、ドメイン、およびシステムボードの構成データを使用できるようにして、その仕組みを管理します。pcd は、システムコントローラ (SC) 上で実行される SMS デーモンで、SMS 構成の主要なコンポーネントです。システム管理アプリケーションは、すべて pcd デーモンを使用してデータベース情報を使用します。</p> <p>pcd はプラットフォーム構成データを管理するだけでなく、対象のデータベースで変更が発生したことを、登録されているシステム管理アプリケーションに通知します。これらの通知はイベントとして登録され、ユーザーに認識されません。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>
拡張機能説明	<p>プラットフォームデータには、以下のものが含まれています。</p> <hr/> <pre>Platform type Platform name, Rack ID Cacheable Memory Address Slice Map System clock frequency System clock type SC IP address SC0 to SC1 IP address SC1 to SC0 IP address SC to SC IP netmask</pre> <hr/> <p>ドメインデータには、以下のものが含まれています。</p> <hr/> <pre>Domain ID/Tag OS version (not used) OS type (not used) Available component list Assigned board list Active board list Golden IOSRAM I/O board Virtual keyswitch setting</pre>

---

```
Active Ethernet I/O board
Domain creation time
Domain dump state
Domain bring up priority
IP host address
Host name
Host netmask
Host broadcast address
```

---

システムボードデータには、以下のものも含まれています。

---

```
Expander Position
Slot position
Board type
Board state
Domain assignment of the board
Available component list state
Board test status
Board test level
Memory cleared state
```

---

シグナル

SIGHUP データベースファイルを読み取り、情報を再キャッシュします。

ファイル

---

**注 -** これらのファイルは手動で変更しないでください。

---

次のファイルがサポートされています。

```
/var/opt/SUNWSMS/.pcd/platform_info
```

プラットフォームデータベース情報が含まれています。

```
/var/opt/SUNWSMS/.pcd/domain_info
```

ドメインデータベース情報が含まれています。

```
/var/opt/SUNWSMS/.pcd/sysboard_info
```

システムボードデータベース情報が含まれています。

pcd(1M)

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

ssd(1M)



名前	poweroff – 電源切断の制御
形式	poweroff [-q] [-y -n] [location]
機能説明	<p>poweroff -h</p> <p>poweroff(1M) は、指定されたデュアル 48V 電源装置、ファントレー、またはボードの電源を切断します。プラットフォーム管理者特権を持っている場合に、引数を指定しないでこのコマンドを使用すると、システム全体 (ただし大容量電源装置、ファントレー、予備のシステムコントローラ (SC) は除く) の電源が切断されます。電源が切断されるコンポーネントが、アクティブなドメインで使用されている場合、それらのドメインが表示されデフォルトで「Are you sure?」というプロンプトが示されます。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> poweroff で大容量電源装置の電源を切断すると、回路ブレーカが遮断されます。その場合、poweron コマンドだけで電源供給を再開することはできません。poweron を実行する前に、ブレーカを手動で再び投入する必要があります。</p> <hr/> <p>プラットフォーム管理者特権を持っていない場合は、[location] コマンドのオペランドを<b>必ず</b>指定し、自身がドメイン管理者または設定者の特権を持っているドメインに、ボードを割り当てておく必要があります。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> このコマンドは、仮想キースイッチの位置には作用しません。</p> <hr/>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されます。</p> <hr/> <p>-n すべてのプロンプトに自動的に <b>no</b> と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。</p> <p>-q 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。</p>

単独で使用されると、`-q` はデフォルトですべてのプロンプトに対して `-n` オプションを指定します。

`-q` オプションを `-y` または `-n` オプションとともに使用すると、ユーザプロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「`y`」または「`n`」のいずれかで自動的に応答します。

`-y` すべてのプロンプトに対して自動的に `yes` と応答します。プロンプトは、`-q` オプションとともに使用しない限り表示されます。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*location* コンポーネントの位置で、空白文字で区切ります。複数の *location* を指定することはできません。

次の *location* 形式が使用できます。

Sun Fire 15K, Sun Fire 12K

SB(0...17), SB(0...8)

IO(0...17), IO(0...8)

CS(0|1), CS(0|1)

FT(0...7), FT(0...7)

PS(0...5), PS(0...5)

EX(0...17), EX(0...8)

SC(0|1), SC(0|1) [スベア SC のみ電源切断することができます。]

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、ドメイン管理者または設計者の特権が必要です。

ドメイン特権を持っている場合は、`[location]` オペランドも指定する必要があります。また、`[location]` は、自分が特権を持っているドメインに割り当て (assigned) られているドメイン構成単位 (DCU) に定義しておく必要があります。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

## 使用例 1 - 電源装置の電源を切断する

この例では、poweroff が問い合わせを表示しています。

```
sc0:sms-user:> poweroff ps5
This will trip the breakers on PS at PS5, which must be turned on
manually!
Are you sure you want to continue to power off this
component?(yes/no)? y
```

## 使用例 2 - 拡張ボードの位置 0 の CPU ボードの電源を切断する

この例では、poweroff コマンドによって、ボードの電源が強制的に切断されます。stdout にメッセージは表示されず、すべてのプロンプトに対して自動的に yes で応答します。

```
sc0:sms-user:> poweroff -qy SB0
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

poweron(1M)

名前	poweron – 電源投入の制御
形式	poweron [-q] [-y -n] [ location]  poweron -h
機能説明	<p>poweron(1M) は、指定されたデュアル 48V 電源装置、ファントレイ、またはボードの電源を投入します。プラットフォーム管理者特権を持っている場合に、引数を指定しないでこのコマンドを使用すると、(新しい電源装置をサポートするために追加の 48V 電源装置モジュールの電源を投入するの必要がなければ)、システム全体の電源が投入されます。</p> <hr/> <p><b>注</b> – poweroff で大容量電源装置の電源を切断すると、回路ブレーカが遮断されます。その場合、poweron コマンドだけで電源供給を再開することはできません。poweron を実行する前に、ブレーカを手動で再び投入する必要があります。</p> <hr/> <p>プラットフォーム管理者特権を持っていない場合は、[location] コマンドのオペランドを<b>必ず</b>指定し、自身がドメイン管理者または設定者の特権を持っているドメインに、ボードを割り当てておく必要があります。対象のボードについて必要な電源・冷却が利用できない場合は、poweron の処理は失敗します。完全に設定されているシステムの電源を投入するには、48V の電源装置モジュール (4 KW モジュール) が 5 つ以上必要です。従って、N+1 の冗長性を考慮すると、6 つの電源装置モジュールが使用されます。あるコンポーネントの電源を投入する際に、他のコンポーネントの電源投入が必要な場合 (ボードで 48V の電源装置モジュールが必要な場合など) は、poweron は失敗します。</p> <p>指定されたコンポーネントが自動システム回復 (ASR) ブラックリストファイルに定義されている場合は、エラーメッセージが表示されます。プラットフォーム管理者特権を持っている場合は、処理を続行するメッセージが表示されます。この特権を持っていない場合は、処理は終了し、エラーメッセージが表示されます。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h      ヘルプ。使用方法を表示します。</p>

---

注 - 単一で使⽤します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま  
す。

---

-n すべてのプロンプトに自動的に **no** と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使⽤しない限り表示されます。

-q 非出力。プロンプトを含むすべての `stdout` へのメッセージを抑制します。

単独で使⽤されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。

-q オプションを -y または -n オプションとともに使⽤すると、ユーザープロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「y」または「n」のいずれかで自動的に応答します。

-y すべてのプロンプトに対して自動的に **yes** と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使⽤しない限り表示されます。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*location* コンポーネントの位置で、空白文字で区切ります。複数の *location* を指定することはできません。

次の *location* 形式が使⽤できます。

Sun Fire 15K, Sun Fire 12K

SB(0...17), SB(0...8)

IO(0...17), IO(0...8)

CS(0|1), CS(0|1)

FT(0...7), FT(0...7)

PS(0...5), PS(0...5)

EX(0...17), EX (0...8)

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、ドメイン管理者または設計者の特権が必要です。

ドメイン特権を持っている場合は、`[location]` オペランドも指定する必要があります。また、`[location]` は、自身が特権を持っているドメインに割り当てられているドメイン構成単位 (DCU) に定義しておく必要があります。

ASR ブラックリストファイルに定義されているボードの電源を投入するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

### 使用例 1 – デュアル 48V 電源装置の電源を投入する

電源装置は、バンク位置 0 の正面にあります。

```
sc0:sms-user:> poweron PS0
```

### 使用例 2 – 48V デュアル電源装置の電源を投入する (AC 入力不正な場合)

AC 入力不正な場合、警告が表示されます。

```
sc0:sms-user:> poweron PS0
Both AC inputs to PS0 are bad, did you remember to turn on the
breakers?
```

### 使用例 3 – ASR ブラックリストファイル内の CPU の電源を投入する

プラットフォーム管理者特権を持っている必要があります。正しい特権がないと `poweron` は正しく実行されず、エラーメッセージが表示されます。

```
sc0:sms-user:> poweron SB0
Component SB0 is in the ASR blacklist.
Are you sure you want to continue the power ON (yes/no)? Y
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist
```

esmd によって除外されるコンポーネントの一覧。

---

注 - このファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。

---

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

esmd(1M)、poweroff(1M)

名前	rcfgadm – 遠隔構成管理
形式	<pre>rcfgadm -d domain_indicator [-f] [-y   -n] [-v ] [-o hardware_options]       -c function [-r retry_count [-T timeout]] ap_id...  rcfgadm -d domain_indicator [-f] [-y   -n] [-v ] [-o hardware_options]       -x hardware_function ap_id...  rcfgadm -d domain_indicator [-v ] [-a ] [-s listing_options]       [-o hardware_options] [-l [ ap_id   ap_type ]...]  rcfgadm -d domain_indicator [-v ] [-o hardware_options] -t ap_id...  rcfgadm -d domain_indicator [-v ] [-o hardware_options] -h [ ap_id   ap_type]</pre>
機能説明	<p>rcfgadm(1M) は、動的に再構成可能なハードウェア資源に関する遠隔構成管理を操作します。rcfgadm コマンドを使用して、指定したドメインの構成管理をシステムコントローラから操作することができます。これらの操作には、状態の表示 (-l)、テストの開始 (-t)、設定状態の変更の呼び出し (-c)、ハードウェア特有の機能の呼び出し (-x)、および構成管理のヘルプメッセージの取得 (-h) が含まれています。</p> <p>rcfgadm は、接続点の構成を管理します。この接続点は、Solaris を継続して使用する際に、システムのソフトウェアがハードウェア資源の動的再構成をサポートする場所です。</p> <p>構成管理によって、システムの物理的ハードウェア資源と Solaris 環境で構成された表示可能なハードウェア資源を区別します。構成管理の機能はハードウェア特有のもので、rcfgadm はハードウェア固有のライブラリを呼び出すことによって構成を実行します。</p> <p>構成管理は、接続点で行います。接続点にあるハードウェア資源は、システムを使用する際に物理的に交換できる場合も、できない場合もありますが、構成管理インタフェースによって、動的に再構成することができます。</p> <p>接続点では、2 つの固有の要素を定義しますが、これらの要素は、接続点の範囲外にあるハードウェア資源と区別されます。接続点の 2 つの要素は、受容体と占有装置です。ハードウェア資源の物理的な挿入と取り外しは接続点で行われ、具体的には受容体と占有装置を接続したり、切り離したりします。構成管理では、物理的な挿入と取り外しの操作、および接続点におけるその他の構成管理機能をサポートします。</p>



接続点には、関連する状態および条件の情報が定義されています。構成管理インタフェースには、接続点状態の切り替えに対する制御が用意されています。受容体の状態は、empty、disconnected、または connected のいずれかの状態となります。占有装置の状態は、configured または unconfigured のいずれかの状態となります。

接続点に占有装置がない場合は、受容体の通常の状態は empty になります。通常システムの使用で、占有装置から受容体を切り離すことができる disconnected 状態になります。通常は、占有装置の資源がシステムで完全に利用できるようになる前に、ハードウェア特有のさまざまなテストを行う場合、または占有装置の物理的な切り離したり、再構成の準備ステップとして、この状態が使用されます。disconnected 状態の受容体では、(ハードウェアで可能な場合に) システムから占有装置が切り離されていますが、テストと設定のために使用することは可能です。受容体は、connected 状態を提供する必要があります。この状態では、占有装置が含まれているハードウェア資源に対して、通常に使用することができます。受容体に占有装置が含まれており、構成管理の操作が行われている場合には、その受容体の通常の状態は connected になります。

unconfigured の状態の占有装置が含まれているハードウェア資源は、標準の Solaris ソフトウェアのデータ構造では表現されないため、Solaris オペレーティング環境では使用できません。unconfigured の状態の占有装置では、構成管理の操作のみ行うことができます。configured 状態のハードウェア資源は、標準の Solaris ソフトウェアデータ構造で表現されるため、これらのハードウェアの任意の部分を、Solaris オペレーティング環境で使用することができます。すべての占有装置には、configured および unconfigured の状態があります。

接続点の条件は、unknown、OK、failing、failed、または unusable のいずれかとなります。接続点は、(揮発性レコードが存在しない場合に) 電源投入テストの結果に従って、システムをいずれかの条件に設定します。

configured 状態の占有装置を持つ接続点は、unknown、OK、failing、または failed のいずれかの条件となります。failing または failed 以外の条件の場合には、接続点は、ハードウェア特有の回復可能なエラーしきい値を超えたときに、操作の途中で failing に変更することができます。failed 以外の条件の場合には、接続点は、回復不可能なエラーの結果として、操作中に failed に変更することができます。

unconfigured 状態の占有装置を持つ接続点は、定義されているいずれの条件に設定することもできます。unconfigured されている占有装置を持つ接続点の条件は、システム特有の時間のしきい値を超えると、OKから unknown に変わります。テスト機能を開始すると、接続点の条件は、テストの結果に従って、OK、failing、または failed のいずれかに変わります。テスト機能が用意されていない接続点は、unknown の条件のままにしておくことが可能です。テストで割り込みが発生すると、接続点の条件は、前の条件 (unknown または failed) に設定することができます。unknown、OK、failing、または failed の条件の接続点は、再テストすることができます。

接続点の条件が unusable になる場合には、受容体の電源・冷却が十分でない、占有装置が使用できないかサポートができない、または完全に設定されていない、などの理由があります。unusable の条件の接続点は、システムで使用できません。この条件は、物理的な原因が解消されるまで、そのままになります。

接続点では、(条件が変化している、または再評価中であることを表す) busy 情報も管理します。

接続点は、システムデバイス階層における接続点のタイプおよび位置に関連する、ハードウェア特有の識別子 (*ap\_id*) を使用して指定します。*ap\_id* は、必ず 1 つの接続点を特定できるようにします。*ap\_id* の仕様では、「物理」および「論理」の 2 つのタイプをサポートしています。

物理的な *ap\_id* には、完全指定されたパス名が含まれ、論理的な *ap\_id* には、接続点をわかりやすく表すための簡単な説明が含まれています。

たとえば、システムボード 6 を表す接続点の物理的な *ap\_id* は /devices/pseudo/dr@0:SB6 となり、論理的な *ap\_id* は SB6 となります。

接続点は、動的に作成することもできます。動的な接続点は、システム内のベースの接続点に対して相対的に名前が定義されます。動的な接続点の *ap\_ids* は、ベースのコンポーネントの後に 2 つのコロン (::) を記述し、その後に動的なコンポーネントを記述する、という形式で構成されます。ベースコンポーネントは、ベースの接続点 *ap\_id* です。動的なコンポーネントはハードウェア特有のもので、対応するハードウェア固有のライブラリから生成されます。

たとえば、システムボードを表すベースの接続点の物理的な *ap\_id* が `/devices/pseudo/dr@0:SB16` で、論理的な *ap\_id* が SB16 であるとし  
ます。

このシステムボードに割り当てられている CPU は、論理的な *ap\_id* が `SB16::cpu2` の動的な接続点として表すことができます。SB16 はベースのコンポーネントで、cpu2 はハードウェア特有の動的コンポーネントです。同様に、この動的な接続点の物理的な *ap\_id* は、以下ようになります。

```
/devices/pseudo/dr@0:SB16::cpu2
```

*ap\_type* は論理的な *ap\_id* の一部であり、特定の接続点を表すことはできません。*ap\_type* は論理的な *ap\_id* の部分文字列で、*ap\_id* と同じになる場合もありますが、コロンの区切り文字は含まれません。たとえば、pci の *ap\_type* は、論理的な *ap\_ids* で先頭文字が pci の接続点をすべて表します。

*ap\_type* の使用は、推奨しません。-s オプションの新しい選択サブオプションを使用すると、より汎用的で柔軟性のある方法で接続点を選択することができます。「オプション」を参照してください。

rcfgadm は、ハードウェア固有のライブラリに含まれているハードウェア特有の機能と、最初に対話します。このため、rcfgadm の動作はハードウェアによって異なります。

それぞれの構成管理の操作では、サービスの割り込みが必要になる場合があります。操作で、ユーザーと対話するための明確なサービスの割り込みが必要な場合は、操作が開始される前に確認が行われます。

標準入力の確認のために、標準エラー出力にプロンプトが表示されます。常に yes と応答する場合は -y オプションを、no と応答する場合は -n オプションをそれぞれ使用して、確認プロンプトが表示されないようにすることも可能です。-o オプションを使用すると、*test level* などのハードウェア特有のオプションがサブオプションとして提供されます。

システム設定の状態を変更する操作は、システムログデーモン `syslogd(1M)` で検査されます。

## オプション

このコマンドの引数は、`getopt(3C)` と `getsubopt(3C)` の構文規則に準拠しています。

詳細については、『Sun Fire 15K/12K Dynamic Reconfiguration ユーザーマニュアル』を参照してください。

次のオプションがサポートされています。

---

**注 -** `rcfgadm` コマンドの実行が失敗しても、対象のボードは実行前の状態には戻りません。dxs エラーメッセージ (または dca エラーメッセージ) がドメインのログに出力されます。発生したエラーが回復可能であれば、コマンドを再試行できます。回復不能な場合、対象のボードを使用するためには、当該ドメインを再起動する必要があります。

---

`-a`

`-l` オプションで動的接続点を表示する必要があることを指定します。

`-c function`

`ap_id` で指定された接続点で、状態の変更を行います。

`disconnect`、`connect`、`configure`、または `unconfigure` の関数のいずれかを指定します。これらの関数によって、特定ハードウェア用のライブラリルーチンが呼び出され、接続点の状態が変化します。

有効な関数とその意味は次のとおりです。

■ `disconnect`

受容体が `disconnected` 状態に変わります。

占有装置が `configured` 状態の場合は、`disconnect` の機能は、最初に占有装置を `unconfigure` しようとします。デフォルトでは、`disconnect` 機能はボードの電源を切断します。このようにすると、スロットの対象ポイントでボードを取り外せるようになります。`-o nopoweroff` オプションは、電源切断のステップを行わずに、ボードの電源をそのままの状態にしておくよう指定します。デフォルトでは、ボードはドメインに割り当てられたままになります。`-o unassign` オ

ブションは、ボードがいったん disconnected になると、ドメインからボードの所有権を削除するように指示します。ボードが unassigned になると、他のドメインが自身に assigned になっているボードを持っている可能性があるため、cfgadm はボードにアクセスできなくなります。

#### ■ connect

ハードウェア特有の操作を実行して、受容体を connected 状態にします。これで、受容体を介して占有装置を通常に操作することができます。

#### ■ configure

ハードウェア特有の操作を実行して、占有装置のハードウェア資源を Solaris ソフトウェアで使用できるようにします。設定済の占有装置はシステム構成の一部となり、Solaris ソフトウェアデバイスの操作保守コマンド (psradm(1M)、mount(1M)、および ifconfig(1M) など) で操作できるようになります。

#### ■ unconfigure

ハードウェア特有の操作 (占有装置のハードウェア資源をシステムから削除する操作) を実行します。占有装置は connected になっている状態で、占有装置のハードウェア資源は、Solaris オペレーティング環境で使用されていないことを確認します。

状態の切り替え機能は、接続点の条件、またはその他のハードウェアに依存した事項によって、失敗する場合があります。資源を追加する指示 (connect および configure) において状態を切り替える機能はすべて、接続点が OK または unknown の条件の場合に、ハードウェア特有のライブラリへ渡されます。その他の条件の場合は、すべて強制 (-f) オプションを使用して、これらの機能をハードウェア固有のライブラリに渡す必要があります。どのような接続点の条件であっても、システムからハードウェア資源を削除 (disconnect および unconfigure) する際に、ハードウェア固有のライブラリが呼び出されます。接続点の条件が unknown の場合は、ハードウェア固有のライブラリで状態の変更機能を拒否する場合があります。

接続点の条件は、状態の変更機能によって変更される場合だけではなく、状態の変更操作で発生したエラーによって、変更される場合もあります。強制オプション (-f) を指定すれば、通常なら条件を満たさずに失敗する状態変更も、条件を無視して実行できます。ハードウェア特有の安全性および完全性のチェックを行うと、強制オプションを実行しても何も処理されません。

**-d *domain\_indicator***

次のいずれかを使ってドメインを指定します。

*domain\_id* - ドメインの ID。有効な *domain\_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

*domain\_tag* - `addtag(1M)` を使用してドメインに割り当てられる名前。

- f** 指定された処理を強制的に実行します。通常は、この処理は安全性よりも優先されるハードウェア特有の機能です。強制的に状態を変更すると、条件が OK または unknown 以外の占有装置のハードウェア資源を、ハードウェア固有の安全性チェックに基づいて使用できるようになります。

**-h [*ap\_id* | *ap\_type*]**

ヘルプメッセージテキストを出力します。*ap\_id* または *ap\_type* が指定された場合は、引数によって示された接続点に対するハードウェア固有ライブラリのヘルプルーチンが呼び出されます。

**-l [*ap\_id* | *ap\_type*]**

指定された接続点の状態および条件を表示します。-s オプションとサブオプションを選択してフィルタを設定し、接続点を絞り込みます。処理オプションを指定しないで `rcfgadm` を呼び出すと、引数を指定しないで -l を呼び出した場合と同じになります。一覧表示の形式は、-v および -s オプションによって制御されます。-a オプションを指定すると、接続点が動的に拡張されます。

- n** すべてのプロンプトに対して、自動的に `no` と応答します。

**-o hardware\_options**

メインのコマンドオプションに対してハードウェア特有のオプションを提供します。

*hardware\_options* の有効値は以下のとおりです。

- **parsable**

-s オプションが使用される場合のみ適用されます。  
parsable サブオプションを指定すると、システムボードと I/O アセンブリに関する情報だけが戻されます。

- **unassign**

-c 切断オプションが使用される場合のみ適用されます。  
unassign サブオプションは、ボードの所有権を削除するよう指定します。

- **nopoweroff**

-c 切断オプションが使用される場合のみ適用されます。  
nopoweroff サブオプションは、ボードが切り離された後に電源切断されないように指定します。

**-r retry\_count**

ドメインで、動的再構成 (DR) 要求が再試行される回数を指定します。デフォルトはゼロです。

**-s listing\_options**

一覧 (-l) コマンドに対する一覧表示オプションを提供します。  
*listing\_options* は、getsubopt(3C) の構文規則に準拠しています。サブオプションを使用して、接続点の選択基準 (select=select\_string)、対象の照合タイプ (match=match\_type)、一覧表示の順序 (sort=field\_spec)、表示対象のデータ (cols=field\_spec および cols2=field\_spec)、列の区切り文字 (delim=string)、および列見出しの非表示 (noheadings) を指定します。

選択サブオプションを指定すると、指定された基準と一致する接続点のみが表示されます。選択サブオプションの構文は以下のとおりです。

```
rcfgadm -s select=attr1(value1):attr2(value2)...
```

*attr* は、*ap\_id*、*class*、または *type* のいずれかとなります。*ap\_id* は論理的な *ap\_id* フィールドを表します。*class* は接続点のクラスを、*type* はタイプフィールドを表します。*value1*、*value2* などは照合する値に対応します。照合のタイプは、以下の照合サブオプションで指定することができます。

```
rcfgadm -s match=match_type,select=attr1(value1)...
```

*match\_type* は *exact* または *partial* のいずれかとなります。デフォルトの値は *exact* です。

サブオプションには特殊文字を指定することもできますが、これは、*rcfgadm* サブオプションの一部としては解釈されません。たとえばコマンドには、サブオプションとして使用できる丸括弧を指定することができますが、これは、コマンド行に入力する際には特殊文字として解釈されます。選択サブオプションに対する引数は、UNIX C シェルで解釈されないように、引用符で囲むことができます。

*field\_spec* は、*data-field:data-field:data-field* のようにコロンの(:)を使用して連結され1つ、または複数のデータフィールドです。*data-field* は *ap\_id*、*physid*、*r\_state*、*o\_state*、*condition*、*type*、*busy*、*status\_time*、*status\_time\_p*、および *info* から構成されます。*ap\_id* フィールドの出力には接続点の論理名で、*physid* フィールドには物理名が含まれます。*r\_state* フィールドは、*empty*、*disconnected*、*connected* のいずれかとなります。*o\_state* フィールドは *configured* または *unconfigured* となります。*busy* フィールドは、接続点がビジーの場合は *y*、それ以外の場合は *n* となります。*type* および *info* フィールドはハードウェアによって異なります。*status\_time\_p* フィールドは、*status\_time* フィールドの解析可能なバージョンです。接続点がクラスに関連付けられている場合は、*class* フィールドにクラス名が表示されます。



*field\_spec* のフィールドの順序は重要です。ソートサブオプションでは、最初のフィールドが第一ソートキーとなります。cols および cols2 サブオプションでは、要求された順序でフィールドが出力されます。ソートサブオプションでは、*field\_spec* でデータフィールド名の前にマイナス (-) を指定すると、データフィールドのソート順が逆になります。ソートのデフォルト値は *ap\_id* です。cols および cols2 のデフォルト値は、*-v* オプションが指定されたかどうかによって異なります。このオプションが指定されない場合は、cols は *ap\_id:r\_state:o\_state:condition* で、cols2 は設定されません。*-v* を指定すると、cols は *ap\_id:r\_state:o\_state:condition:info* となり、cols2 は *status\_time:type:busy:physid* となります。

*delim* のデフォルト値は単一の空白文字です。*delim* の値には、任意の長さの文字列を使用することができます。区切り文字には、コンマ (,) は使用できません (*getsubopt(3C)* を参照してください)。これらの一覧表示オプションは、解析可能な出力を作成する際に使用します。

#### -T *timeout*

再試行を行う際の時間間隔 (秒) を指定します。このオプションは単独では使用できず、必ず *-r retry\_count* オプションとともに使用します。デフォルト値は 0 で、これは DR 要求がすぐに再試行されることを意味します。

#### -t 1 つまたは複数の接続点のテストを実行します。このテスト機能は、接続点の条件を再評価する際に使用します。

テストの結果を使用して、障害が検出されない場合は特定の占有装置の条件を OK に変更し、回復可能な障害が検出された場合は *failing* に変更し、回復不可能な障害が検出された場合は *failed* に変更します。

テストが割り込みされた場合は、接続点の条件を以前の値に戻すことができます。エラーが検出されなかった場合は *unknown* に設定され、回復可能なエラーのみが検出された場合は *failing* に設定さ

れ、回復不可能なエラーが検出された場合は `failed` に設定されます。エラーなしでテストが正常終了した場合は、接続点の条件は必ず `OK` に設定されます。

`-v` 冗長モードで実行します。`-c`、`-t`、および `-x` オプションでは、実行したそれぞれの操作の結果を表すメッセージが出力されます。`-h` オプションの場合は、詳細なヘルプ情報が表示されます。`-l` オプションの場合は、それぞれの接続点について詳細な情報が表示されます。

`-x hardware_function`

ハードウェア特有の機能を実行します。

`hardware_function` の有効値は以下のとおりです。

■ `assign ap_id`

ドメインにボードを割り当てます。

■ `unassign ap_id`

ドメインに対するボードの割り当てを解除します。

■ `poweron ap_id`

ボードの電源を投入します。

■ `poweroff ap_id`

ボードの電源を切断します。

`-y` すべてのプロンプトに自動的に `yes` と応答します。プロンプトは表示されます。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

### `ap_id`

接続点は、システムデバイス階層における接続点のタイプおよび位置に関連する、ハードウェア特有の識別子 (`ap_id`) によって参照します。`ap_id` は、必ず 1 つの接続点を特定できるようにします。`ap_id` の仕様では、「物理」および「論理」の 2 つのタイプをサポートしています。物理的な `ap_id` には、完全指定されたパス名が含まれ、論理的な `ap_id` には、接続点をわかりやすく表すための簡単な説明が含まれています。

*物理的 ap\_ids*

```

/devices/pseudo/dr@0:I04
/devices/pseudo/dr@0:I06
/devices/pseudo/dr@0:I014
/devices/pseudo/dr@0:SB4
/devices/pseudo/dr@0:SB6

```

*論理的 ap\_ids*

```

I04
I06
I014
SB4
SB6

```

*ap\_type*

*ap\_type* は論理的 *ap\_id* の一部であり、特定の接続点を表すことはできません。*ap\_type* は論理的 *ap\_id* の部分文字列で、*ap\_id* と同じになる場合もありますが、コロン (:) の区切り文字は含まれません。たとえば、*pci* の *ap\_type* は、論理的 *ap\_id* で先頭文字が *pci* の接続点をすべて表します。2 種類の *ap\_type*、すなわち静的 *ap\_type* と動的 *ap\_type* を次に示します。

*静的 ap\_types:*

```

HPCI
CPU
MCP
pci-pci/hp

```

*動的 ap\_types:*

```

cpu
mem
io

```

## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを使用するために必要な特権は、実行する操作によって異なります。rcfgadm は、ドメインに connected になっていないボードを assign または unassign にすることができます。ボードの assign または unassign を実行するには、指定したドメインのプラットフォーム管理者特権、またはドメイン管理者・設定者の特権を持っており、ボードがドメインの使用可能構成要素リストに定義されていることが条件になります。詳細は、setupplatform(1M) および showplatform(1M) を参照してください。

assign および unassign の操作は、専用ハードウェア特有の操作です。rcfgadm -x assign *ap\_id* を使用して、ボードを assign します。rcfgadm -x unassign *ap\_id* を使用して、ボードの unassign にします。assign および unassign で使用する *ap\_id* は、SB0 や IO2 のように論理的 *ap\_id* として指定する必要があります。

テスト、状態変更、リスト表示、またはハードウェア特有の操作を行うには、ドメイン管理者またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

## 使用例 1 - ドメイン A のデバイスツリー内の接続点を一覧表示する

以下の例では、(動的接続点を除く) すべての接続点が一覧表示されています。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a
```

Ap_Id	Type	Receptacle	Occupant	Condition
IO4	PCI	connected	configured	ok
IO6	MCPU	disconnected	unconfigured	unknown
IO14	PCI	connected	configured	ok
SB4	CPU	disconnected	unconfigured	unknown
SB6	CPU	connected	configured	ok
SB16	CPU	connected	configured	ok

**使用例 2** — ドメイン A の構成可能なハードウェア情報をすべて一覧表示する

以下の例では、構成可能なハードウェア情報がすべて (動的接続点の情報も含めて) 一覧表示されています。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -al
```

Ap_Id	Type	Receptacle	Occupant	Condition
IO4	PCI	connected	configured	ok
IO4::pci0	io	connected	configured	ok
IO4::pci1	io	connected	configured	ok
IO4::pci2	io	connected	configured	ok
IO4::pci3	io	connected	configured	ok
IO6	MCPU	disconnected	unconfigured	unknown
IO14	PCI	connected	configured	ok
IO14::pci0	io	connected	configured	ok
IO14::pci1	io	connected	configured	ok
IO14::pci2	io	connected	configured	ok
IO14::pci3	io	connected	configured	ok
SB4	CPU	disconnected	unconfigured	unknown
SB6	CPU	connected	configured	ok
SB6::cpu0	cpu	connected	configured	ok
SB6::cpu1	cpu	connected	configured	ok
SB6::cpu2	cpu	connected	configured	ok
SB6::cpu3	cpu	connected	configured	ok
SB6::memory	memory	connected	configured	ok
SB16	CPU	connected	configured	ok
SB16::cpu0	cpu	connected	configured	ok
SB16::cpu1	cpu	connected	configured	ok
SB16::cpu2	cpu	connected	configured	ok
SB16::cpu3	cpu	connected	configured	ok
SB16::memory	memory	connected	configured	ok

**使用例 3** — ドメイン A の接続点属性に基づいて選択したリストを作成する

以下の例では、*location* が SB6 で、*type* が cpu の接続点がすべて一覧表示されています。-s オプションの引数は引用符で囲み、シェルで解釈されないようにします。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -s match=partial,select="type(cpu)" -la SB6
```

Ap_Id	Type	Receptacle	Occupant	Condition
-------	------	------------	----------	-----------

```
SB6::cpu0    cpu    connected    configured    ok
SB6::cpu1    cpu    connected    configured    ok
SB6::cpu2    cpu    connected    configured    ok
SB6::cpu3    cpu    connected    configured    ok
```

**使用例 4** — ドメイン A に対する現行の構成可能なハードウェア情報を冗長モードで一覧表示する

以下の例では、現行の構成可能なハードウェア情報が冗長モードで一覧表示されています。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -v -l SB16

Ap_Id    Receptacle    Occupant    Condition    Information
SB16     connected     configured  ok           powered-on, assigned

When          Type    Busy    Phys_Id
Mar 6 13:30   CPU    n       /devices/pseudo/dr@0:SB16
```

**使用例 5** — ドメイン A で強制オプションを使用する

以下の例では、強制オプションを使用して、失敗状態の占有装置をシステムを設定します。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -f -c configure SB6
```

**使用例 6** — ドメイン A でシステムから占有装置を構成解除する

以下の例では、システムから占有装置が構成解除されています。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -c unconfigure IO14
```

**使用例 7** — 接続点で占有装置を構成する

以下に、占有装置を構成する例を示します。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -c configure SB6
```

**使用例 8** — `-o parsable` オプションを使用する

次の例は、システムボードと IO アセンブリの情報を、「名前=値」の形式で組み合わせて一覧しています。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d G -s cols=ap_id:type -o parsable
Ap_Id                                     Type
IO0                                       unknown
IO5                                       HPCI
IO11                                      HPCI
SB0                                       CPU
SB11                                      CPU
```

**使用例 9** — SB0 を接続解除する (電源は切断しない)

次の例は、ドメイン G にボードの所有権を放棄させています。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d G -c disconnect -o unassign,nopoweroff
SB0
```

**環境変数**

`command_name` の実行に影響を与える以下の環境変数 `LC_TIME`、`LC_MESSAGES`、`TZ` の説明は、`environ(5)` を参照してください。

`LC_MESSAGES`            `rcfgadm` で列見出しとエラーメッセージをどのように表示するかを定義します。この変数を設定しても、出力データの表示は影響を受けません。

`LC_TIME`                `rcfgadm` で、人間が読み取れる形式の「状態が変更された時刻」(`status_time`) をどのように表示するかを定義します。

`TZ`                    状態が変化した時刻を変換する際のタイムゾーンを指定します。このタイムゾーンは、人間が読み取れる形式 (`status_time`) および解析可能な形式 (`status_time_p`) の両方に適用されます。

**終了ステータス**

次の終了値が返されます。

- 0        正常に終了
- 1        応答なし
- 2        サポートされていない
- 3        操作がサポートされていない

- 4 不正な特権
- 5 ビジー
- 6 システムビジー
- 7 データエラー
- 8 ライブラリエラー
- 9 ライブラリが存在しない
- 10 条件が不十分
- 11 不正
- 12 エラー
- 13 APID が存在しない
- 14 不正な属性
- 30 不正なボード ID タイプ
- 31 不正な特権
- 32 他のドメインに割り当てられている
- 33 特権を取得できない
- 34 ドメインボード情報を取得できない
- 35 アクティブなボード一覧を取得できない
- 36 割り当てられているボード一覧を取得できない
- 37 ブラックリストの取得に失敗
- 38 Solaris が稼働していない
- 39 不正な特権
- 40 ドメイン特権を取得できない
- 41 プラットフォーム特権を取得できない
- 42 ドメインのブラックリストを取得できない



- 43      プラットフォームのブラックリストを取得できない
- 56      DR のコマンド構文エラー
- 70      DR 操作の失敗

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

addtag(1M)、cfgadm\_sbd(1M)、setupplatform(1M)、  
showplatform(1M)

## 診断

標準のエラー出力では、診断メッセージが表示されます。このユーティリティーでは、オプションおよび使用エラー以外に、以下の診断メッセージが作成されます。

rcfgadm: Configuration administration not supported on *ap\_id*

rcfgadm: No library found for *ap\_id*

rcfgadm: *ap\_id* is ambiguous

rcfgadm: Operation:Insufficient privileges

rcfgadm: Attachment point is busy, try again

rcfgadm: No attachment points with specified attributes found

rcfgadm: System is busy, try again

rcfgadm: Operation:Operation requires a service interruption

rcfgadm: Operation:Data error:error\_text

rcfgadm: Operation:Hardware specific failure:error\_text

rcfgadm: Attachment point not found

rcfgadm: Configuration operation succeeded

rcfgadm: Configuration operation canceled

rcfgadm: Configuration operation invalid

rcfgadm: Configuration operation not supported

rcfgadm: Library error

rcfgadm: Insufficient condition

rcfgadm: SCDR/DCA door failure

rcfgadm: DCA/DCS communication error

rcfgadm: DCA internal failure

rcfgadm: PCD event failure

rcfgadm: Callback function failure

rcfgadm: SCDR library internal error

rcfgadm: Board is already assigned to another domain

rcfgadm: Unable to get active or assigned domain info

rcfgadm: Unable to get privileges

rcfgadm: DRCMD library invalid parameter

エラーメッセージに関する詳細は、`config_admin(3CFGADM)` を参照してください。

名前	reset - 指定されたドメインのすべての CPU ポートにリセットを送信
形式	<pre>reset -d domain_indicator [, domain_indicator] ...[-d domain_indicator     [, domain_indicator] ...[-q] [-y -n]     [-x]</pre> <pre>reset -h</pre>
機能説明	<p>reset(1M) は、1 つまたは複数のドメインをリセットします。具体的には、ハードウェアをリセットしてクリーンな状態にする方法と、外部で開始されたリセット (XIR) シグナルを送信する方法があります。デフォルトでは、ハードウェアをクリーンな状態にする方法が使用されます。仮想キースイッチが安全な位置にある場合は、エラーが示されます。デフォルトでは、reset は、確認プロンプトを表示します。詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 6 章「ドメイン制御」を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><b>-d domain_indicator</b></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> <i>domain_indicator</i> を複数指定する場合には、それぞれをコンマ (,) で区切ります。</p> <hr/> <p><b>-h</b> ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されます。</p> <hr/> <p><b>-n</b> すべてのプロンプトに自動的に <b>no</b> と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。</p> <p><b>-q</b> 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。</p>

単独で使用されると、`-q` はデフォルトですべてのプロンプトに対して `-n` オプションを指定します。

`-q` オプションを `-y` または `-n` オプションとともに使用すると、ユーザープロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「`y`」または「`n`」のいずれかで自動的に応答します。

`-x` 指定されたドメインのプロセッサに、XIR シグナルを送信します。

`-y` すべてプロンプトに対して自動的に `yes` と応答します。プロンプトは、`-q` オプションとともに使用しない限り表示されます。

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、ドメイン管理者特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

### 使用例

#### 使用例 1 – ドメイン C をリセットする

```
sc0:sms-user:>reset -d C
Do you want to send RESET to domain C?[y|n]: y
RESET to port SB4/P0 initiated.
RESET to port SB4/P1 initiated.
RESET initiated to all ports for domain: C
```

#### 使用例 2 – ドメイン C を XIR リセットする

```
sc0:sms-user:>reset -d C -x
Do you want to send XIR to domain C?[y|n]:y
XIR to processor SB3/P0 initiated
XIR to processor SB3/P1 initiated
XIR to processor SB3/P2 initiated
XIR to processor SB3/P3 initiated
XIR initiated to all processors for domain: C
```

### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

addtag(1M)

名前	resetsc – 他 <sup>の</sup> システムコントローラ (SC) のリセット
形式	resetsc [-q] [-y -n] resetsc -h
機能説明	resetsc(1M) は、他 <sup>の</sup> SC をリセットします。この操作は通常、フェイルオーバーの後で行われます。このコマンドは、メイン SC から実行してスペア SC をリセットするか、またはスペア SC から実行してメイン SC をリセットします。SC は自身をリセットすることはできません。選択した SC の電源が投入されていない場合は、resetsc は、電源を投入するようユーザーにメッセージを表示します。選択した SC の電源が投入されていない場合は、resetsc はそのまま終了し、エラーが返されます。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。 <hr/> 注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま す。 <hr/> -n すべてのプロンプトに自動的に no と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。 -q 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。 単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。 -y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、-q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。 -y すべてのプロンプトに対して自動的に yes と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

**使用例 1** – プロンプトを使用して他の SC をリセットする

```
sc0:sms-user:>resetsc
About to reset other SC.
Are you sure you want to continue? (y or [n])
```

**使用例 2** – 他の SC が電源切断されている場合に、他の SC をリセットする

```
sc0:sms-user:>resetsc
The other SC is not powered on.
Do you want to try to power it on? (y or [n])
```

**使用例 3** – すべてのプロンプトに「yes」と応答して他の SC をリセットする

```
sc0:sms-user:>resetsc -y
About to reset other SC.
Are you sure you want to continue? [y]
```

**使用例 4** – すべてのプロンプトを非表示にして他の SC をリセットする

```
sc0:sms-user:>resetsc -q
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 1 ユーザーが有効なアクセス権を持っていません。
- 2 記憶域の割り当てに失敗
- 3 他の SC の存在を特定できない
- 4 他の SC が存在しない
- 5 他の SC の電源状態を特定できない
- 6 他の SC の電源を投入できない
- 7 他の SC をリセットできない
- 8 フラグの登録に失敗
- 9 不正なコマンド行引数

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop



名前	runcmdsync - フェイルオーバー後の回復のために、指定されたスクリプトを準備
形式	runcmdsync <i>script_name</i> [ <i>parameters</i> ]  runcmdsync -h
機能説明	runcmdsync(1M) コマンドは、フェイルオーバー後に自動的に同期をとる (回復を行う) ために、指定されたスクリプトを準備します。runcmdsync は、回復するスクリプトを特定するコマンド同期記述子を作成します。この記述子は、コマンド同期リストに追加されます。このリストは、フェイルオーバーの後で回復するスクリプトを特定するリストです。また、runcmdsync コマンドは、スクリプトが終了すると、コマンド同期リストからこの記述子を削除します。  スクリプト内で再起動ポイントを指定するには、initcmdsync(1M)、および同期コマンド群を参照してください。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -h      ヘルプ。使用方法を表示します。
<hr/>	
注 -	単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
<hr/>	
<i>script_name</i>	コマンドを同期化するために準備するスクリプトを表します。 <i>script_name</i> には、実行可能ファイルの名前を絶対パスで指定します。このコマンドは、両方の SC で同じ場所に位置している必要があります。
<i>parameters</i>	指定されたスクリプトに関するオプションまたはパラメータを指定します。これらのパラメータはスペアシステムコントローラ (SC) に格納されており、自動フェイルオーバーの後で指定されたコマンドまたはスクリプトを再起動する際に使用します。

## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

cancelcmdsync(1M)、initcmdsync(1M)、savecmdsync(1M)、showcmdsync(1M)

名前	savecmdsyc - コマンド同期コマンド
形式	cancelcmdsyc <i>cmdsyc_descriptor</i> initcmdsyc <i>script_name</i> [ <i>parameters</i> ] savecmdsyc -M <i>identifier cmdsyc_descriptor</i> [ <i>cancel init save</i> ]cmdsyc -h
機能説明	<p>これらのコマンド同期コマンドはともに機能し、システムコントローラ (SC) のフェイルオーバーによって中断されたユーザー定義のスキプットの回復を制御します。コマンドを同期化するには、ユーザー定義のスキプットに次のコマンドを挿入します。</p> <p><code>initcmdsyc</code>           回復するスキプットを特定するための、コマンド同期記述子を作成します。  この記述子は、コマンド同期リストの中に定義されます。このリストは、フェイルオーバーが発生した後で、新しいメインの SC で再起動するスキプットとコマンドを特定します。</p> <p><code>savecmdsyc</code>           フェイルオーバーが発生した後で、スキプット内のどの場所から処理を再開するかを特定するためのマーカーを追加します。</p> <p><code>cancelcmdsyc</code>       コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除します。これによって、スキプットは 1 度だけ実行され、それ以降のフェイルオーバーの後には実行されません。</p> <p>コマンド同期リストから記述子を削除するために、スキプットのすべての出力先には、必ず 1 つの <code>cancelcmdsyc</code> シーケンスを定義します。記述子が削除されていない場合にフェイルオーバーが発生すると、スキプットは、新しいメイン SC 上で実行されます。</p>

---

注 - `initcmdsyc` と `cancelcmdsyc` のシーケンスは、コマンドが同期化されるように必ず 1 つのスクリプトに定義します。 `savecmdsyc` はオプションのコマンドで、スクリプト内の場所をマークして処理を再開する場所を特定する場合のみ使用します。特別な再開ポイントが必要ない場合は、代わりに `runccmdsyc(1M)` を使用することもできます。

---

## オプション

次のオプションがサポートされています。

*cmdsyc\_descriptor*      コマンド同期記述子 (ユーザー定義スクリプトを指定する記述子) を表します。この記述子は、`initcmdsyc` コマンドの標準の出力値として返されます。

`-h`                      ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。 `-h` に追加して指定されたオプションは無視されます。

---

`-M identifier`          フェイルオーバーの後に、スクリプトを再開する場所を指定します。この記述子は、正の整数とします。

*parameters*            ユーザー定義スクリプトに関連するオプションまたはパラメータを表します。これらのパラメータは、スเปア SC に格納されており、フェイルオーバーの後で指定されたスクリプトを再起動する際に使用します。

*script\_name*            同期的に処理されるユーザー定義スクリプトの名前を表します。 *script\_name* には、実行可能ファイルの名前を絶対パスで指定します。このコマンドは、両方の SC で同じ場所に位置している必要があります。

## 拡張機能説明

コマンド同期コマンドは、ユーザー定義スクリプト内の特定の論理ポイントに挿入します。

たとえば、**Korn** シェルスクリプトは、以下のようになります。

```
# MAIN CODE STARTS HERE
# Be sure to use a cleanup procedure to handle any
# interrupts.
# Use the cancelcmdsyc to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command
# will get restarted on the new main SC.
#
clean_up () {
    cancelcmdsyc $desc
    exit
}

# Declare the clean_up function to capture system signals
# and cleanup.
trap "clean_up" INT HUP TERM QUIT PWR URG
goto_label=1
# Process the arguments, capturing the -M marker point
# if provided
#
for arg in $*; do
    case $arg in
        -M )
            goto_label=$arg;;
        .
        .
        esac
    done
# Place this script and all its parameters in the command
# synchronization list, which indicates the commands to
# be restarted after an SC failover.
#
# NOTE: The script must be executable by the user defined
# in fomd.cf and reside in the same directory on both the
# main and the spare SC.
```

```

# If the command is not part of the defined PATH for
# the user, the absolute filename must be passed with the
# initcmdsyc command
#
initcmdsyc script_name parameters
# The marker point is stored in the goto_label variable.
# Keep executing this script until all cases have been
# processed or an error is detected.
#
while (( $goto_label != 0 )) ; do
#
# Each case should represent a synchronization point
# in the script.
#
case $goto_label in
#
# Step 1: Do something
#
1 )          do_something
            .
            .
            .

# Execute the savecmdsyc command with the script's
# descriptor and a unique marker to save the position.
# If a failover occurs here, the commands represented in
# the next goto_label (2) will be resumed.
#
            savecmdsyc -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
            goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
            ;;

#
# Step 2: Do more things
#
2 )          do_more_things
            .
            .
            .
            savecmdsyc -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
            goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
            ;;

#
# Step 3: Finish the last step and set the goto_label to 0
# so that the script ends.
3 )
            finish_last_step
            .
            .
            .
            goto_label=0
            ;;

        esac
done
# END OF MAIN CODE
# Remember to execute cancelcmdsyc to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command will be restarted
# after the failover.
#
cancelcmdsyc $desc

```

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。

---

**注 -** `initcmdsync` の標準出力には、コマンド同期記述子が含まれていません。(フェイルオーバーが終了した場合や、単一の SC 環境などで) フェイルオーバーが使用できない場合は、同期コマンドが含まれているスクリプトでは、プラットフォームのログファイルに対してエラーメッセージを生成し、ゼロ以外の終了コードを返します。これらのメッセージは無視することもできます。

---

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

`runcmdsync(1M)`, `showcmdsync(1M)`

名前	setbus - ドメイン内のアクティブな拡張ボードで動的バスの再構成を実行
形式	setbus [-q] [-y -n] -c csb [-b buses] [ location...] setbus -h
機能説明	<p>setbus(1M) は、ドメイン内のアクティブな拡張ボード上のバストラフィックを動的に再構成してセンタープレーンサポートボード (CSB) を使用します。両方の CSB を使用するのとは noemal モードです。1 つの CSB を使用するのとは degraded モードです。</p> <p>この機能を使用すると、システムの電源を切ることなく CSB を交換できます。</p>
オプション	<p>-y および -n は、setbus(1M) コマンドに対するオプションの引数です。オプションの引数の 1 つが指定されていない場合は、setbus によって確認メッセージが表示されます。</p> <p>選択した拡張ボードの構成を変更する場合は、追加の拡張ボードの構成を変更する必要があります。setbus によって次のメッセージが表示されます。</p> <hr/> <p>The expander board in position <i>location</i> communicates with expanders not already listed, and will be added to the list of boards to reconfigure.</p> <hr/> <p>さらに、setbus は電源が投入された状態のボードのうち、アクティブでないすべてのボードをリセットします。その結果、接続可能状態のボードはなくなります。ボードを接続可能状態に戻すには、『System Management Services (SMS) 1.3 Dynamic Reconfiguration ユーザーマニュアル』を参照してください。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> すべての拡張ボードを 1 つの CSB に縮退させた後、いずれか 1 つの拡張ボードだけを通常モードに戻すことはできません。通常モードへの復帰は必ず、すべての拡張ボードを対象に実行すべきであり、そうしないと setbus の実行は失敗します。</p> <hr/>



次のオプションがサポートされています。

- b buses**                    構成するバスを指定します。構成するバスは3つあります。有効なバスは、次のとおりです。
- a    アドレスバスを構成する
  - d    データバスを構成する
  - r    応答バスを構成する
- デフォルトでは3つすべてのバスを構成します。
- c csb**                    使用するCSBを指定します。
- CS0                    CS0を使用するようハードウェアを構成する (degraded モード)
  - CS1                    CS1を使用するようハードウェアを構成する (degraded モード)
  - CS0,CS1              両方のCSBを使用するようハードウェアを構成する (normal モード)
- h**                    ヘルプ。使用方法を表示します。

---

**注 -**    単一で使用します。-hに追加して指定されたオプションは無視されません。

---

- n**                    すべてのプロンプトに自動的に **no** と応答します。プロンプトは **-q** オプションとともに使用しない限り表示されます。
- q**                    非出力。プロンプトを含むすべての **stdout** へのメッセージを抑制します。
- 単独で使用されると、**-q** はデフォルトですべてのプロンプトに対して **-n** オプションを指定します。
- y** オプションまたは **-n** オプションのどちらかとともに使用すると、**-q** ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。

-y すべてのプロンプトに自動的に yes と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*location* 構成する拡張ボードスロットを指定します。デフォルトではすべてのスロットを構成します。*location* が複数の場合は、スペースで区切ります。

有効な *location* は、次のとおりです。

Sun Fire 15K, Sun Fire 12K

EX(0...17), EX(0...8)

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

システム内の通信拡張ボード (SOCX) のセットを再構成するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

ドメイン管理者または構成者が再構成できるのは、自身が特権を持っているドメインに割り当てられている SOCX のみです。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

**使用例 1** — すべてのアクティブドメイン上のすべてのバスで CS0 を使用する  
1 つ以上のドメインで、アクティブでないボードに電源が投入されている場合の、setbus の出力例を次に示します。

```
sc0:sms-user:> setbus -c CS0
The following boards are powered on but are not active in a domain:
SB13
IO9 assigned to domain J
IO16 assigned to domain Q
SB17
These boards will be reset, and any attach-ready state will be lost.
Are you sure you want to continue the reconfiguration? [y|n]:y
```

**使用例 2** — すべてのアクティブドメイン上のすべてのバスで両方の CSB を使用する

```
sc0:sms-user:>setbus -c CS0,CS1
```

使用例 3 – すべてのドメイン上のアドレスバスで CS0 を使用する

```
sc0:sms-user:>setbus -c CS0 -b a
```

使用例 4 – アクティブな EX1 上のアドレスバスおよびデータベースで CS1 を使用する

```
sc0:sms-user:>setbus -c CS1 -b ad EX1
```

#### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

#### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

#### 関連項目

showbus(1M)

**名前** | setdatasync – データ同期で使用されるデータ伝達リストの変更

**形式** | setdatasync [-i interval] schedule *filename*

setdatasync cancel *filename*

setdatasync push *filename*

setdatasync backup

setdatasync -h

**機能説明**

setdatasync では、ユーザー作成ファイルのデータ伝達リストへの追加またはリストからの削除を指定できます。データ伝達リストは、メインシステムコントローラからスペアシステムコントローラ (SC) に自動フェイルオーバー用のデータ同期の一部としてコピーするファイルを識別します。指定されたユーザーファイルおよびファイルが存在するディレクトリは、両方の SC のユーザーに対する読み取り書き込み特権を持っている必要があります。

データ同期プロセスでは、メイン SC 上のユーザー作成ファイルが変更されているかどうかチェックされます。メイン SC 上のユーザー作成ファイルが最後の伝達以降に変更されている場合は、スペア SC にも再伝達されています。データ同期プロセスで、デフォルトでは、指定したファイルは 60 分ごとにチェックされます。ただし、setdatasync を使用してユーザーファイルの変更をチェックする頻度を指定しなければなりません。

---

**注 –** ファイルがメイン SC からスペア SC に伝達された後、ファイルはメイン SC 上のファイルが更新されたときのみスペア SC に再伝達されます。伝達されたファイルをスペア SC から削除すると、そのファイルはメイン SC 上の対応するファイルが更新されるまで自動的に再伝達されません。

---

setdatasync を使用すると、次のことができます。

- 指定したファイルをデータ伝達リストに追加することなくスペア SC に伝達することができます。
- メイン SC およびスペア SC 上の SC 構成ファイルを再同期することができます。

**オプション**

次のオプションがサポートされています。

## backup

SMS 以外の原因によってスペア SC 上の SMS ファイルに望ましくない変更が加えられたときに、強制的に再同期を実行します。

setdatasync backup は、SMS のすべての構成、データ、およびログファイルを再伝達します。fomd では、この処理は自動的に実行されます。

setdatasync backup を使用すると、fomd による自動ファイル伝達のを速度を低下させる可能性があります。

setdatasync backup の実行に要する時間の長さは、転送されるファイル数におおよそ比例します。ファイル転送の速度に影響を与えるその他の要因には、転送されるファイルのサイズ、SC で利用可能なメモリー量、SC の負荷 (CPU サイクルとディスクトラフィック)、I2 ネットワークの稼働の有無などがあります。詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 9 章「SC フェイルオーバー」を参照してください。

setdatasync backup は、次に挙げる場合のみ使用してください。

- メイン SC で SMS が動作している間に、スペア SC に SMS を再インストールした場合

---

**注 -** SMS ユーザーグループは、setdatasync backup を実行する前に正しく設定する必要があります。

---

- メイン SC で SMS が動作している間に、スペア SC 上の SMS ファイルが削除された場合
- スペア SC 上の SMS ファイルが上書きされたか壊れている場合 (SMS の動作の有無は問わない)

`cancel filename` 指定したファイルをデータ伝達リストから削除 (取り消し) します。指定したファイルはスペア SC には適用されなくなります。このオプションでは指定したファイルが実際にスペア SC から削除されることはありません。ファイル名には絶対パスを含める必要があり、別のファイルへのシンボリックリンクであってはなりません。

`-h` ヘルプ。使用方法を表示します。

---

**注 -** 単一で使用します。`-h` に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

`-i interval` 指定したファイルが変更されたかどうかをチェックする頻度を示します。デフォルトの間隔は 60 分です。指定できる間隔は、1 から 1440 分 (24 時間) です。

`push filename` 指定したファイルをデータ伝達リストに追加することなくスペア SC に伝達 (プッシュ) します。ファイル名には絶対パスを含める必要があり、別のファイルへのシンボリックリンクであってはなりません。

`schedule filename` 指定したファイルをデータ伝達リストに追加します。ファイル名には絶対パスを含める必要があり、別のファイルへのシンボリックリンクであってはなりません。データ同期時には、ファイルはスペア SC の同じ絶対パスへ伝達されます。

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティオプションと管理特権」を参照してください。

### 使用例

**使用例 1** ユーザーファイルをメインからスペアに 30 分ごとに適用する

ユーザー指定ファイルへのパスは絶対パスであることが必要であり、シンボリックリンクを含んではなりません。

```
sc0:sms-user:>setdatasync -i 30 schedule /path/filename
```

#### 使用例 2 – データ適用リストからのファイル名の削除

ユーザー指定ファイルへのパスは絶対パスであることが必要であり、シンボリックリンクを含んではなりません。

```
sc0:sms-user:>setdatasync cancel /path/filename
```

#### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

#### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

#### 関連項目

showdatasync(1M), smsbackup(1M)

名前	setdate - システムコントローラ (SC) またはドメインの日付と時刻の設定
形式	setdate [-d <i>domain_indicator</i> ] [-u] [-q] [ <i>mmdd</i> ]HHMM   <i>mmdd</i> HHMM[ <i>ccyy</i> ]. <i>SS</i>  setdate -h
機能説明	setdate(1M) を使用すると、SC プラットフォーム管理者は SC またはオプションでドメインの日付と時刻値を設定できます。ドメイン管理者は、これらのドメインに対して日付と時刻を設定することができます。日付と時刻を設定すると、setdate(1M) は現在の日付と時刻を表示します。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -d <i>domain_indicator</i>  次のいずれかを使ってドメインを指定します。  <i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。  <i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。  ドメインのキースイッチが OFF または STANDBY の位置にあるときにドメインの時刻 (TOD) を設定します。このオプションは setdate の主な使用方法ではありません。通常、setdate はこのオプションなしで SC の TOD の設定に使用されます。  -h ヘルプ。使用方法を表示します。 <hr/> <b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。 <hr/> -q 新しい値を設定した後は現在の日付と時刻を表示しません。  -u グリニッジ標準時刻 (GMT) を使用して時刻を表示します。デフォルトでは該当地域のタイムゾーンが使用されます。



## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

<code>[mddd]HHMM[.SS]</code>	日付と時刻のフォーマット。mm は月 (1-12)、dd は日 (1-31)、HH は時 (0-23)、MM は分 (0-59)、SS は秒 (0-59) です。
<code>mdddHHMM[cc]yy[.SS]</code>	日付と時刻のフォーマット。mm は月 (1-12)、dd は日 (1-31)、HH は時 (0-23)、MM は分 (0-59)、cc は世紀から 1 を引いた値、yy は年を 2 桁で表したものの、SS は秒 (0-59) です。

## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権またはドメイン管理者特権が必要です。プラットフォーム管理者特権を持っている場合は、自身のドメインに対してのみこのコマンドを実行することができます。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

使用例 1 – 太平洋標準時での日付設定

```
sc0:sms-user:>setdate 020210302002.00
System Controller:Sat Feb 2 10:30:00 PST 2002
```

使用例 2 – GMT を使用した日付設定

```
sc0:sms-user:>setdate -u 020218302002.00
System Controller:Sat Feb 2 18:30:00 GMT 2002
```

使用例 3 – ドメイン A の太平洋標準時での日付設定

```
sc0:sms-user:>setdate -u 020218302002.00
Domain a:Sat Feb 2 10:30:00 PST 2002
```

使用例 4 – ドメイン A の GMT を使用した日付設定

```
sc0:sms-user:>setdate -d a -u 020218302002.00
Domain a:Sat Feb 2 18:30:00 GMT 2002
```

## setdate(1M)

### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

### 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

### 関連項目

addtag(1M)、setkeyswitch(1M)、showdate(1M)

名前	setdefaults - 直前にアクティブであったドメインのすべてのインスタンスの削除、および Capacity on Demand (COD) 情報をリセット
形式	setdefaults [-d <i>domain_indicator</i> [-p ]] [-y -n ]  setdefaults -h
機能説明	<p>setdefaults(1M) は、直前にアクティブであったドメインのすべての SMS インスタンスと Capacity on Demand (COD) 情報を削除します。ドメインインスタンスには、ネットワーク情報を除くすべての pcd エントリ、すべてのメッセージ、コンソール、シスログファイルと、オプションですべての NVRAM および起動パラメタが含まれます。pcd エントリと NVRAM および起動パラメタはシステムのデフォルト設定に戻ります。IDPROM データは影響を受けません。</p> <p>削除される COD 情報には、インスタントアクセス CPU と、ドメイン用に予約されていた COD RTU (right-to-use) ライセンスが含まれます。インスタントアクセス CPU の値をリセットできるのは、プラットフォーム管理者だけです。ドメインに予約している COD RTU ライセンスをリセットできるのは、プラットフォーム管理者とドメイン管理者です。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><i>-d domain_indicator</i></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p><i>-h</i> ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/> <p><i>-n</i> すべてのプロンプトに自動的に no と応答します。</p>

- p NVRAM および起動パラメータデータを保持します。デフォルトでは、NVRAM および起動パラメータデータを削除するかどうか尋ねられます。-p オプションが使用されている場合は、プロンプトは表示されずにデータが保持されます。
- y すべてのプロンプトに自動的に yes と応答します。

#### 拡張機能説明

-d *domain\_indicator* を指定すると、setdefaults コマンドはドメイン情報をリセットします。対象のドメインはアクティブではなく、仮想キースイッチがオフに設定されていることが条件になります。この条件を満たさないと、setdefaults コマンドはエラーで終了します。プラットフォーム管理者はアクセス制御リスト (ACL) とドメインの COD RTU ライセンスをリセットできますが、これらの操作はドメイン管理者には許可されません。

プラットフォーム管理者特権を持つユーザーが -d *domain\_indicator* を指定せずに setdefaults コマンドを実行すると、COD RTU ライセンス違反にならない場合のみ、COD インスタントアクセス CPU がリセットされます。

#### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、指定されたドメインに対するプラットフォーム管理者特権またはドメイン管理者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティオプションと管理特権」を参照してください。

#### 使用例

**使用例 1** — ドメイン A に対するドメイン、NVRAM および起動パラメータのプロンプト付きデフォルトの設定

```
sc0:sms-user:>setdefaults -d a
Are you sure you want to remove domain info? y
Do you want to remove NVRAM and boot parameter data? y
```

**使用例 2** — ドメイン A に対するプロンプトなしで NVRAM および起動パラメータデータを保持するデフォルトの設定

```
sc0:sms-user:>setdefaults -d a -p -y
```

**使用例 3** — ドメイン A に対するプロンプトなしで NVRAM および起動パラメータデータを保持しないデフォルトの設定

```
sc0:sms-user:>setdefaults -d a -y
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 1 不正なドメインが指定されました。
- 2 不正なオプションが入力されました。
- 3 ドメインがないか、または複数のドメインが指定されました。
- 4 ユーザーが有効なアクセス権を持っていません。
- 5 キースイッチが無効な位置にあります。
- 6 ドメインが現在アクティブです。
- 7 pcd への接続中にエラーが発生しました。
- 8 mld への接続中にエラーが発生しました。
- 9 osd への接続中にエラーが発生しました。
- 10 内部エラーが発生しました。
- 11 ユーザーが操作を取り消しました。
- 12 codd との通信中にエラーが発生しました。

## ファイル

このコマンドでは次のファイルが影響を受けます。

`/var/opt/SUNWSMS/.pcd/domain_info`

ドメイン pcd 情報ファイル。

`/var/opt/SUNWSMS/.pcd/sysboard_info`

プラットフォーム pcd 情報ファイル。

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/console`

ドメインコンソールログファイル。最大 10 までのメッセージファイルを一度にシステム上に格納できます (`console.0` から `console.9`)。

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/messages`

ドメインログファイル。最大 10 までのメッセージファイルを一度にシステム上に格納できます (message.0 から message.9)。

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/syslog`

ドメインシスログファイル。最大 10 までのメッセージファイルを一度にシステム上に格納できます (syslog.0 から syslog.9)。

`/var/opt/SUNWSMS/data/domain_id/bootparamdata`

ドメイン起動パラメタ情報ファイル。

`/var/opt/SUNWSMS/data/domain_id/nvramdata`

ドメイン nvram 情報ファイル。

#### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

#### 関連項目

addtag(1M)、mld(1M)、osd(1M)、pcd(1M)、setobpparams(1M)  
showobpparams(1M)

名前	setfailover – システムコントローラ (SC) フェイルオーバーメカニズムの状態の変更
形式	setfailover <i>action</i>  setfailover -h
機能説明	setfailover(1M) は、SC フェイルオーバーメカニズムの状態を変更する機能です。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -h                   ヘルプ。使用方法を表示します。
<hr/>	
	<b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
<hr/>	
オペランド	次のオペランドがサポートされています。  <i>action</i> 有効なアクションは次のとおりです。  force           フェイルオーバーをスペア SC に強制します。スペア SC が利用可能であることが必要です。  off             フェイルオーバーメカニズムを使用不可にします。これにより、メカニズムが再び使用可能になるまでフェイルオーバーが行われません。  on              フェイルオーバーまたはオペレータの要求によって以前にフェイルオーバーを使用不可にしたシステムのフェイルオーバーを使用可能にします。on は、フェイルオーバーのみを再び使用可能にするようコマンドに指示します。フェイルオーバーを再び使用可能にできない場合は、後続の showfailover コマンドの使用により使用可能を妨げている現在のエラーを示します。

## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMSのセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

これらのコマンドは正常に完了した場合は何も出力しません。アクションを実行できなかった場合に、エラーメッセージが表示されます。

**使用例 1** – フェイルオーバーをオンにする

```
sc0:sms-user:>setfailover on
```

**使用例 2** – フェイルオーバーをオフにする

```
sc0:sms-user:>setfailover off
```

**使用例 3** – フェイルオーバーを強制する

```
sc0:sms-user:>setfailover force
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

showfailover(1M)



名前	setkeyswitch - 仮想キースイッチ位置の変更
形式	setkeyswitch -d <i>domain_indicator</i> [-q] [-y -n] <i>position</i>
機能説明	<p>setkeyswitch(1M) は、仮想キースイッチの位置を指定した値に変更します。setkeyswitch は、ボードの電源の投入/停止とドメインの起動に使用します。詳細については、「オペランド」を参照してください。</p> <p>指定したドメインが、自動システム回復 (ASR) ブラックリストファイルにボードを含んでいる場合は、エラーメッセージが表示されて setkeyswitch はそのボードの電源投入をスキップして処理を続行します。</p> <p>各仮想キースイッチの状態はシステムコントローラ (SC) の電源の再投入の間または pcd(1M) による電源供給の物理的電源再投入によって維持されます。showkeyswitch を使用して仮想キースイッチの現在の位置を表示します。</p>
オプション	次のオプションがサポートされています。
<hr/> <p><b>注 -</b> -y および -n は、setkeyswitch(1M) コマンドに対するオプションの引数です。オプションの引数の 1 つが指定されていない場合は、on、diag、または secure 位置から off または standby 位置に変更するときに setkeyswitch によって、確認プロンプトが表示されます。</p> <hr/>	
<p><b>-d <i>domain_indicator</i></b></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p><b>-h</b> ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/>	
<p><b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>	

-n すべてのプロンプトに自動的に **no** と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

-q 非出力。プロンプトを含むすべての `stdout` へのメッセージを抑制します。

単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。

-y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、-q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。

-Y すべてのプロンプトに自動的に **yes** と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*position* オペランドの有効値は次のとおりです。

**on** off または **standby** 位置からは、**on** はドメインに割り当てられているすべてのボードの電源を投入にします (電源が未投入の場合)。それによりドメインがアクティブになります。**diag** 位置からは、**on** は単なる位置変更に過ぎず、動作しているドメインには影響を与えません。**secure** 位置からは、**on** はドメインへの書き込みアクセス権を復元します。

**standby** 現在の位置が **on**、**diag** または **secure** の場合、**standby** を指定すると確認メッセージが表示されます。**yes** と応答すると、ドメインがリセットおよび構成解除に適した状態にあるかどうか (OS の動作の有無など) がチェックされます。ドメインがリセットおよび構成解除に適した状態であれば、**setkeyswitch** はそのドメインに割り当てられている全ボードをリセットし、構成解除します。適した状態にない場合、**setkeyswitch** はリセットと

構成解除を実行する前に、ドメインを安全に終了させます。現在の位置が `off` の場合、`standby` を指定すると、ドメインに割り当てられている全ボードに電源が投入されます (電源が未投入の場合)。

`off`

現在の位置が `on`、`diag`、または `secure` の場合、`off` を指定すると確認メッセージが表示されます。`yes` と応答すると、ドメインが電源オフに適した状態かどうか (OS の動作の有無など) がチェックされます。ドメインが電源の切断に適した状態であれば、`setkeyswitch` はそのドメインに割り当てられている全ボードの電源を切断します。電源の切断に適さないドメインでは、`setkeyswitch` の実行は中断され、ドメインログにメッセージが出力されます。現在の位置が `standby` の場合、`off` を指定するとドメイン内の全ボードの電源が切断されます。

`diag`

現在の位置が `off` または `standby` の場合、`diag` を指定すると、ドメインに割り当てられている全ボードの電源が投入されます (電源が未投入の場合)。その結果、位置が `on` と同様に、ドメインは稼動状態になります (ただし、POST が冗長モードで呼び出され、診断レベルがデフォルト以上のレベルに設定される点を除きます)。現在の位置が `on` の場合、`diag` を指定しても位置が変更されるに過ぎません。ただし、ドメインの自動システム復元 (ASR) 時には、POST が冗長モードで呼び出され、診断レベルがデフォルト以上のレベルに設定されます。現在の位置が `secure` の場合、`diag` を指定するとドメインへの書き込み許可が復元されます。さらに、ASR の実行時には `post` が冗長モードで呼び出され、診断レベルがデフォルト以上のレベ

ルに設定されます。ASRの詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第6章「ドメイン制御」を参照してください。

secure

off または standby 位置からは、secure はドメインに割り当てられているすべてのボードの電源を投入にします (電源が未投入の場合)。次にドメインが on 位置にあるときのようにアクティブになりますが、secure 位置がドメインへの書き込みアクセス権を削除して、たとえば、flashupdate および reset が機能しなくなります。on 位置からは、secure は上記のようにドメインへの書き込みアクセス権を削除します。diag 位置からは、secure は上記のようにドメインへの書き込みアクセス権を削除して次にドメインを再起動したときに post が冗長で起動され、diag レベルがデフォルト値に設定されます。

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、指定したドメインに対するドメイン管理者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMSのセキュリティオプションと管理特権」を参照してください。

### 使用例

使用例 1 – ドメイン A のキースイッチのオン設定

```
sc0:sms-user:> setkeyswitch -d A on
```

使用例 2 – ASR ブラックリストファイルにボードを含むドメイン上のキースイッチの使用

```
sc0:sms-user:> setkeyswitch -d A on
```

```
SB0 is in the ASR Blacklist.
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

`/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist`

esmd によって除外されるコンポーネントの一覧。

---

**注 -** このファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。

---

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

`addtag(1M)`、`esmd(1M)`、`flashupdate(1M)`、`pcd(1M)`、`reset(1M)`、`showkeyswitch(1M)`

名前	setobpparams - ドメインの OpenBoot PROM 変数の設定
形式	setobpparams -d <i>domain_indicator</i> <i>param=value...</i>  setobpparams -h
機能説明	<p>setobpparams(1M) を使用すると、ドメイン管理者は、setkeyswitch(1M) によって OpenBoot PROM に渡される仮想 NVRAM および REBOOT 変数を設定できます。-d オプションと <i>domain_id</i> または <i>domain_tag</i> が必要です。変更内容を有効にするにはドメインを再起動する必要があります。</p> <p>このコマンドはエラー回復用であり、日常のシステム管理用ではありません。詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 4 章「SMS の構成」を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><i>-d domain_indicator</i></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p><i>-h</i> ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>
オペランド	<p>次のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>param=value</i> NVRAM および REBOOT 変数値。有効な変数は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ diag-switch?</li> </ul> <p>デフォルト値 : false</p>

`false` に設定すると、デフォルトの起動ドライブは `boot-device` で指定され、デフォルトの起動ファイルは `boot-file` で指定されます。

`true` に設定すると OpenBoot PROM が診断モードで実行され、正しいデフォルトの起動デバイスまたはファイルを指定するには `diag-device` または `diag-file` の設定が必要になります。これらのデフォルトの起動デバイスとファイルの設定には、`setobpparams` は使用できません。OpenBoot PROM の `setenv(1)` を使用してください。

- `auto-boot?`

デフォルト値 : `false`

`true` に設定すると、ドメインは電源投入または全リセットの後、自動的に起動します。使用される起動デバイスと起動ファイルは、`diag-switch` の設定で決まります (前述の説明を参照)。`boot-device` と `boot file` は、どちらも `setobpparams` で設定することはできません。繰り返しパニックに陥る場合など、OK プロンプトが利用できないときには、`setobpparams` を使用して `auto-boot?` を `false` に設定してください。

`setobpparams` を使用して変数 `auto-boot?` を `false` に設定すると、再起動変数は無効になり、システムは自動起動せずに OpenBoot PROM で停止します。この OpenBoot PROM で、新しい NVRAM 変数を設定できます。

- `fcode-debug?`

デフォルト値 : `false`

`true` に設定すると、この変数はプラグインデバイスの FCodes の名前フィールドを組み込みます。

- `use-nvramrc?`

デフォルト値 : `false`

true に設定すると、この変数はシステム起動時に NVRAMRC でコマンドを実行します。

- security-mode

デフォルト値 : none

ファームウェアのセキュリティーレベルです。

セキュリティーモードを除くすべてに対して有効な変数値は次のとおりです。

- true

- false

セキュリティーモードに対して有効な変数値は次のとおりです。

- none

- command

- full

各変数値の説明は次のとおりです。

none - パスワードは必要ありません (デフォルト)

command - boot(1M) と go 以外のすべてのコマンドでパスワードが必要

full - go 以外のすべてのコマンドでパスワードが必要

---

**注 -** セキュリティーパスワードを忘れないこと、セキュリティーモードを設定する前にセキュリティーパスワードを設定することが重要です。このパスワードを忘れた場合は、システムを使用することはできなくなります。システムを再び起動するにはベンダーのカスタマサポートサービスにお問い合わせください。security-mode およびその他の OpenBoot PROM 変数の詳細については、『OpenBoot 4.x Command Reference Manual』を参照してください。

---



---

注 - ほとんどのシェルでは、変数値を単一引用符で囲んで疑問符 (?) が特殊文字として処理されるのを防ぎます。使用例 1 を参照してください。

---

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

指定されたドメインについて、ドメイン管理者または設定者の特権を持っている必要があります。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

### 使用例

**使用例 1** - ドメイン A に対する OpenBootPROM 変数 `diag-switch` をオンに設定

```
sc0:sms-user:>setobpparams -d a 'diag-switch?=true'
```

**使用例 2** - ドメイン A に対する OpenBootPROM 変数 `security-mode` の Full 設定

```
sc0:sms-user:>setobpparams -d a security-mode=full
```

### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

### 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

### 関連項目

`addtag(1M)`、`setkeyswitch(1M)`、`showobpparams(1M)`

## setupplatform(1M)

名前	setupplatform - ドメインで使用する使用可能構成要素リストと Capacity on Demand (COD) 資源の設定
形式	setupplatform -p available [-d <i>domain_indicator</i> [-a -r] <i>location</i> ...] setupplatform -p cod [ <i>headroom</i>  -d <i>domain_indicator</i> <i>domainRTU</i> ] setupplatform [-d <i>domain_indicator</i> -] setupplatform -h
機能説明	setupplatform(1M) は、ドメインで使用する使用可能構成要素リストと COD 資源を設定します。 <i>domain_id</i> または <i>domain_tag</i> を指定する場合は、ボードリストの指定が <b>必須</b> です。空のボードリストはダッシュ記号 (-) で指定できます。 <i>domain_id</i> と <i>domain_tag</i> をどちらも指定しないと、現在の値がコマンドプロンプトに角カッコ ([ ]) で囲まれて表示されます。パラメタの値を指定しないと、該当する項目は現在の値のまま維持されます。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -a      ドメインの使用可能構成要素リストにスロットを追加します。  -d <i>domain_indicator</i>  次のいずれかを使ってドメインを指定します。  <i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。  <i>domain_tag</i> - addtag (1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。  -h      ヘルプ。使用方法を表示します。
注	- 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されます。
	-p available  ドメインの使用可能構成要素リストに変更を加えます。  -p cod  COD 資源を割り当てます。

- r      ドメインの使用可能構成要素リストからスロットを削除します。
- 使用可能構成要素リスト全体を消去します。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*domainRTU*      ドメイン用に予約する COD RTU (right-to-use) ライセンスの数

*headroom*      有効にするヘッドルーム (プロセッサ) の数量

*location*      ボード位置で、スペースで区切ります。

次の *location* 形式が使用できます。

Sun Fire 15K, Sun Fire 12K

SB(0...17), SB(0...8)

IO(0...17), IO(0...8)

## 拡張機能説明

オプションをいっさい指定せずに `setupplatform` コマンドを実行すると、プラットフォームと COD の情報を入力するように促すコマンドプロンプトが表示されます。18 のドメインすべてを対象として、使用可能構成要素リスト、COD ヘッドルームの数量、および予約する COD RTU ライセンス数を指定するように求められます。COD 情報を入力するプロンプトには、許容される最大値が丸カッコ (( )) 内、デフォルト値が角カッコ ([ ]) 内にそれぞれ表示されます。

COD ヘッドルーム (必要に応じて使用できるプロセッサ) を有効にするには、`setupplatform` コマンドを `-p cod` オプション付きで実行します。`-p cod` オプションと共に `-d domain_indicator` を指定すれば、ドメイン用に予約する COD RTU ライセンスの数を指定できます。

ドメインの使用可能構成要素リストと COD RTU ライセンスの予約数をリセットするには、`setupplatform` コマンドを `domain_indicator` および `-` オプションを指定して実行します。

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

使用例

setupplatform を実行した後は、setupplatform(1M) を使用して使用可能構成要素リストを表示します。

使用例 1 – すべてのドメイン用の使用可能構成要素リストの設定

```
sc0:sms-user:> setupplatform
Available component list for domain domainA [SB3 SB2 SB1 IO5 IO4 IO3]? -
r SB1
Are you sure[no]: (yes/no)? y
Available for domain DomainB [SB6 SB4 SB1 IO3 IO2 ]? -
Are you sure[no]: (yes/no)? y
Available for domain C [SB7 SB5 IO8 IO7]? -a SB17 SB16
Available for domain D [SB9 SB8 SB4 SB2 IO6 IO5 IO1]?
Available for domain E [SB0 IO0]?
Available for domain F []?
Available for domain G []?
Available for domain H []?
Available for domain I []?
Available for domain J []?
Available for domain K []?
Available for domain L []?
Available for domain M []?
Available for domain N []?
Available for domain O []?
Available for domain P []?
Available for domain Q []?
Available for domain R []?
PROC Headroom Quantiy (0 to disable, 8 MAX) [0]? 4
PROC RTUs reserved for domain A (10 MAX) [0]? 3
PROC RTUs reserved for domain B (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain C (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain D (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain E (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain F (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain G (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain H (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain I (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain J (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain K (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain L (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain M (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain N (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain O (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain P (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain Q (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain R (10 MAX) [3]? 3
```

```
sc0:sms-user:> showplatform -p available
Available for domain DomainA:
  SB3 SB2
  IO0 IO4 IO3
Available for domain DomainB:
  None
  None
Available for domain DomainC:
  SB1 SB6 SB7 SB5
  IO8 IO7
Available for domain D:
  SB9 SB8 SB4
  IO6 IO5 IO1
Available for domain E:
  SB0
  IO0
Available for domain DomainF:
  None
  None
Available for domain DomainG:
  None
  None
Available for domain DomainH:
  None
  None
Available for domain I:
  None
  None
Available for domain J:
  None
  None
Available for domain DomainK:
  None
  None
Available for domain L:
  None
  None
Available for domain M:
  None
  None
Available for domain N:
  None
  None
Available for domain O:
  None
  None
Available for domain P:
  None
  None
Available for domain Q:
  None
  None
Available for domain R:
  None
  None
```

**使用例 2** — ドメイン engB 用の使用可能構成要素リストの SB0、IO1、IO2 のボードへの設定

```
sc0:sms-user:>setupplatform -p available -d engB SB0 IO1 IO2
```

**使用例 3** — ドメイン engB の使用可能構成要素リストに含まれるすべてのボードと COD RTU 予約数のリセット

```
sc0:sms-user:>setupplatform -d engB -
```

**使用例 4** — SB0 および IO2 での engB 使用可能構成要素リストへのボードの追加

```
sc0:sms-user:>setupplatform -p available engB -a SB0 IO2
```

**使用例 5** — SB3 および IO3 での engB 使用可能構成要素リストからのボードの削除

```
sc0:sms-user:>setupplatform -p available -d engB -r SB3 IO3
```

**使用例 6** — COD CPU ヘッドルームの数量とドメイン用に予約する COD RTU ライセンス数の設定

```
sc0:sms-user:> setupplatform -p cod
PROC Headroom Quantity (0 to disable, 8 MAX) [0]? 4
PROC RTUs reserved for domain A (10 MAX) [0]? 3
PROC RTUs reserved for domain B (7 MAX) [0]? 0
PROC RTUs reserved for domain C (9 MAX) [2]? 0
.
.
.
PROC RTUs reserved for domain R (7 MAX) [0]? 0
```

**使用例 7** — COD ヘッドルーム CPU を 8 に設定

```
sc0:sms-user:> setupplatform -p cod 8
```

**使用例 8** — ドメイン engB 用に予約する COD RTU 数を 6 に設定

```
sc0:sms-user:> setupplatform -p cod -d engB 6
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 内部エラーが発生しました (詳細は、/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages を参照してください。)

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

addtag(1M)、showplatform(1M)

名前 | showboards - ボードの割り当て情報と状態の表示

形式 | showboards [-d *domain\_indicator*] [-v ]

showboards -h

機能説明

showboards(1M) はボードの割り当てと状態を表示します。 *domain\_id* または *domain\_tag* を指定した場合、このコマンドは指定されたドメインに割り当てられているか、そのドメインで利用可能なボードを表示します。また、ボードが Capacity on Demand (COD) ボードであるかどうかを示す情報も表示されます。

-v オプションを使用すると、showboards は **ドメイン構成ユニット (DCU)** やシステムコントローラ (SC) を含むすべてのコンポーネントを表示します (DCU には、CPU、MCPU、HPCI、HPCI+、および WPCI が含まれます)。

オプション

次のオプションがサポートされています。

-d *domain\_indicator*

次のいずれかを使ってドメインを指定します。

*domain\_id* - ドメインの ID です。有効な *domain\_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

*domain\_tag* - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。

-h ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されます。

---

-v DCU を含むすべてのコンポーネントを表示します。

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、指定されたドメインに対するプラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。



詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

プラットフォーム管理者特権：

- オプションが何も指定されていない場合、showboards では assigned または available な DCU を含むすべてのコンポーネントを表示します。
- *domain\_id* または *domain\_tag* が指定されている場合、showboards では指定ドメインに assigned または available な DCU に関する情報を表示します。他のドメインに assigned されている DCU は、表示されません。
- *-v* オプションが指定されている場合、showboards では、すべての assigned または available な DCU に関する情報を表示します。また、showboards ではその他すべてのコンポーネントに関する情報も表示します。
- *domain\_id* または *domain\_tag* および *-v* オプションが指定されている場合、showboards では指定ドメインに assigned または available な DCU に関する情報を表示します。また、showboards ではその他すべてのコンポーネントに関する情報も表示します。他のドメインに assigned されている DCU は、表示されません。

ドメイン管理者または構成者特権：

- オプションが何も指定されていない場合、showboards では assigned または available な DCU を含む、ユーザーが特権を持つすべてのドメイン用のすべてのボードを表示します。
- *domain\_id* または *domain\_tag* が指定されている場合、showboards では指定ドメインに assigned および available な DCU に関する情報を表示します。他のドメインに assigned されている DCU は、表示されません。Available DCU は、ドメインの使用可能構成要素リスト内にあるボードです。setupplatform(1M) および showplatform(1M) を参照してください。指定したドメインに対するドメイン管理者特権またはドメイン構成者特権が必要です。
- このユーザーは *-v* オプションを利用できません。

## ステータスフィールドの表示内容

ここでは、showboards のコマンド出力に表示されるステータス情報について説明します。

Pwr フィールドには、次の 5 つの値の中の 1 つが含まれます。

On	フル電圧
Off	電圧なし
Min	電圧あり
Unk	不明。ボードの電源状態を判別できません。
—	スロットが空で該当する電源の状態がありません。

Min は、ボードが使用されていることを示すのではなく、単にボード上で電圧が検出されたことを意味します。電源が入れられるまで使用しないでください。反対に、電源を切るまではシステムから取り外さないでください。

Board Status フィールドには、次の 4 つの中のいずれかの値が含まれます。

Active	ボードはドメインに割り当てられ、POST を通過しています。
Assigned	ボードはドメインに割り当てられています。
Available	ボードはドメインに割り当てることができます。
—	ドメイン割り当てまたはアクティビティがこのボードに適応していません。

Test Status フィールドの値は、前回の POST で PCD データベースに登録されたエントリを反映しており、次の 6 つの値のいずれかになります。

Passed	ボードが POST を通過しました。
Degraded	ボードが degraded モードです。
Failed	ボードが POST に失敗しました。

Sun のサービス担当者に連絡し、ボードの交換が必要かどうかの判断を仰いでください。

iPOST        ボードが POST 中です。  
Unknown      ボードはテストされていません。  
—            このボードのテスト状態がありません。

Domain フィールドには、次の 4 つの中のいずれかの値が含まれます。

*domain\_id*    ドメインの ID。  
*domain\_tag*   addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられた名前。  
Isolated      ボードはどのドメインにも割り当てられていません。  
—            ドメイン割り当てはこのボードには適用されません。

## 使用例

## 使用例 1 - Sun Fire 15K システムのプラットフォーム管理者用のボードの一覧

```
sc0:sms-user:> showboards
```

Location	Pwr	Type	Board Status	Test Status	Domain
----	---	----	-----	-----	-----
SB0	On	CPU	Active	Passed	domainC
SB1	On	CPU	Active	Passed	A
SB2	On	CPU	Active	Passed	A
SB3	On	CPU	Active	Passed	engB
SB4	On	CPU	Active	Passed	engB
SB5	On	CPU	Active	Passed	engB
SB6	On	CPU	Active	Passed	A
SB7	On	CPU	Active	Passed	domainC
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB9	On	CPU	Active	Passed	dmnJ
SB10	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB11	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB12	Off	CPU	Assigned	Unknown	engB
SB13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB14	Off	CPU	Assigned	Failed	domainC
SB15	On	CPU	Active	Passed	P
SB16	On	CPU	Active	Passed	domainC
SB17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR
IO0	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO1	On	HPCI	Active	Passed	A
IO2	On	MCPU	Active	Passed	engB
IO3	On	MCPU	Active	Passed	domainC
IO4	On	HPCI+	Available	Degraded	domainC
IO5	Off	HPCI+	Assigned	Unknown	engB
IO6	On	HPCI	Active	Passed	A
IO7	On	HPCI	Active	Passed	dmnJ
IO8	On	WPCI	Active	Passed	Q
IO9	On	HPCI+	Assigned	iPOST	dmnJ
IO10	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO11	Off	HPCI	Assigned	Failed	engB
IO12	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO14	Off	HPCI+	Available	Unknown	Isolated
IO15	On	HPCI	Active	Passed	P
IO16	On	HPCI	Assigned	Unknown	Q
IO17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR

次の例では、プラットフォーム管理者特権を持っていて、Sun Fire 15K システム上のドメインを指定した場合の showboards コマンドの出力を示します。出力には、他のドメインに割り当てられているボードは含まれません。

## 使用例 2 – ドメイン B 用のプラットフォーム管理者用のボードの一覧

```
sc0:sms-user:> showboards -d b
```

Location	Pwr	Type	Board Status	Test Status	Domain
SB3	On	CPU	Active	Passed	engB
SB4	On	CPU	Active	Passed	engB
SB5	On	CPU	Active	Passed	engB
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB10	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB11	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB12	Off	CPU	Assigned	Unknown	engB
SB13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO0	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO2	On	MCPU	Active	Passed	engB
IO5	Off	HPCI+	Assigned	Unknown	engB
IO10	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO11	Off	HPCI	Assigned	Failed	engB
IO12	On	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO14	Off	HPCI+	Available	Unknown	Isolated

次の例では、プラットフォーム管理者特権を持っていて、Sun Fire 15K システム上で `-v` オプションを使用した場合の `showboards` コマンドの出力を示します。このコマンドは、すべてのコンポーネントを表示します。ボードが COD ボードの場合には、その旨が `Type` フィールドに示されます。

## 使用例 3 – `-v` オプションを使用したプラットフォーム管理者用のボードの一覧

```
sc0:sms-user:> showboards -v
```

Location	Pwr	Type of Board	Board Status	Test Status	Domain
SC0	On	SC	Main	-	-
SC1	On	SC	Spare	-	-
PS0	On	PS	-	-	-
PS1	On	PS	-	-	-
PS2	On	PS	-	-	-
PS3	On	PS	-	-	-
PS4	Off	PS	-	-	-
PS5	On	PS	-	-	-
FT0	On	FANTRAY	-	-	-
FT1	On	FANTRAY	-	-	-
FT2	On	FANTRAY	-	-	-
FT3	On	FANTRAY	-	-	-
FT4	On	FANTRAY	-	-	-
FT5	On	FANTRAY	-	-	-
FT6	On	FANTRAY	-	-	-
FT7	On	FANTRAY	-	-	-
CS0	On	CSB	-	-	-
CS1	On	CSB	-	-	-
EX0	-	EXB	-	-	-

showboards(1M)

EX1	-	EXB	-	-	-
EX2	-	EXB	-	-	-
EX3	-	EXB	-	-	-
EX4	On	EXB	-	-	-
EX5	-	EXB	-	-	-
EX6	On	EXB	-	-	-
EX7	-	EXB	-	-	-
EX8	-	EXB	-	-	-
EX9	-	EXB	-	-	-
EX10	-	EXB	-	-	-
EX11	-	EXB	-	-	-
EX12	Off	EXB	-	-	-
EX13	-	EXB	-	-	-
EX14	-	EXB	-	-	-
EX15	-	EXB	-	-	-
EX16	On	EXB	-	-	-
EX17	-	EXB	-	-	-
IO4/C3V0	On	C3V	-	-	domainC
IO4/C5V0	On	C5V	-	-	domainC
IO4/C3V1	On	C3V	-	-	domainC
IO4/C5V1	On	C5V	-	-	domainC
IO6/C3V0	On	C3V	-	-	A
IO6/C5V0	On	C5V	-	-	A
IO6/C3V1	On	C3V	-	-	A
IO6/C5V1	On	C5V	-	-	A
IO9/C3V0	On	C3V	-	-	dmnJ
IO9/C5V0	On	C3V	-	-	dmnJ
IO9/C3V1	On	C3V	-	-	dmnJ
IO9/C3V2	On	C3V	-	-	dmnJ
IO12/C3V0	Off	Unknown	-	-	engB
IO12/C5V0	Off	Unknown	-	-	engB
IO12/C3V1	Off	Unknown	-	-	engB
IO12/C5V1	Off	Unknown	-	-	engB
IO16/C3V0	On	C3V	Assigned	Unknown	Q
IO16/C5V0	On	C5V	Assigned	Unknown	Q
IO16/C3V1	On	C3V	Assigned	Unknown	Q
IO16/C5V1	On	C5V	Assigned	Unknown	Q
SB0	On	CPU	Active	Passed	domainC
SB1	On	CPU	Active	Passed	A
SB2	On	CPU	Active	Passed	A
SB3	On	CPU	Active	Passed	engB
SB4	On	CPU (COD)	Active	Passed	engB
SB5	On	CPU	Active	Passed	engB
SB6	On	CPU (COD)	Active	Passed	A
SB7	On	CPU	Active	Passed	domainC
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB9	On	CPU	Active	Passed	dmnJ
SB10	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB11	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB12	Off	CPU (COD)	Assigned	Unknown	engB
SB13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB14	Off	CPU	Assigned	Failed	domainC
SB15	On	CPU	Active	Passed	P
SB16	On	CPU (COD)	Active	Passed	domainC
SB17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR
IO0	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO1	On	HPCI	Active	Passed	A
IO2	On	MCPU	Active	Passed	engB
IO3	On	MCPU	Active	Passed	domainC
IO4	On	HPCI	Available	Degraded	domainC

IO5	Off	HPCI+	Assigned	Unknown	engB
IO6	On	HPCI	Active	Passed	A
IO7	On	HPCI	Active	Passed	dmnJ
IO8	On	wPCI	Active	Passed	Q
IO9	On	HPCI+	Assigned	iPOST	dmnJ
IO10	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO11	Off	HPCI	Assigned	Failed	engB
IO12	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO14	Off	HPCI+	Available	Unknown	Isolated
IO15	On	HPCI	Active	Passes	Isolated
IO16	On	HPCI	Assigned	Unknown	Q
IO17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR

次の例では、Sun Fire 15K システム上でドメイン B、J、R に対するドメイン特権を持っている場合の showboards コマンドの出力を示します。

showboards は、ドメイン B、J、R に assigned または available なボードの情報を表示します。他のドメインに assigned されているボードまたはドメイン B、J、R の使用可能構成要素リストに表示されないボードは表示されません。

#### 使用例 4 – ドメイン B、J、R に対する特権を持つドメイン管理者用のボードの一覧

```
sc0:sms-user:> showboards
```

Location	Pwr	Type	Board Status	Test Status	Domain
----	----	----	-----	-----	-----
SB3	On	CPU	Active	Passed	engB
SB4	On	CPU	Active	Passed	engB
SB5	On	CPU	Active	Passed	engB
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB9	On	CPU	Active	Passed	dmnJ
SB10	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB11	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB12	Off	CPU	Assigned	Unknown	engB
SB13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR
IO0	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO2	On	MCPU	Active	Passed	engB
IO5	Off	HPCI+	Assigned	Unknown	engB
IO7	On	HPCI	Active	Passed	dmnJ
IO9	On	HPCI+	Assigned	iPOST	dmnJ
IO10	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO11	Off	HPCI	Assigned	Failed	engB
IO12	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO14	Off	HPCI+	Available	Unknown	Isolated
IO17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR

次の例では、Sun Fire 15K システム上のドメイン B、J、R に対するドメイン特権を持っている場合の showboards コマンドの出力を示します。このコマンドは、指定したドメインに assigned、または available な DCU のボード情報を表示します。他のドメインに assigned されている DCU または、指定したドメインの使用可能構成要素リストに表示されない DCU は表示されません。

#### 使用例 5 - ドメイン B 用のドメイン管理者用のボードの一覧

```
sc0:sms-user:> showboards -d b
```

Location	Pwr	Type	Board Status	Test Status	Domain
----	---	----	-----	-----	-----
SB3	On	CPU	Active	Passed	engB
SB4	On	CPU	Active	Passed	engB
SB5	On	CPU	Active	Passed	engB
SB6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB10	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB11	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB12	Off	CPU	Assigned	Unknown	engB
SB13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO0	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO2	On	MCPU	Active	Passed	engB
IO5	Off	HPCI+	Assigned	Unknown	engB
IO6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO10	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO11	Off	HPCI	Assigned	Failed	engB
IO12	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO14	Off	HPCI+	Available	Unknown	Isolated

#### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 1 不正なドメインが指定されました。
- 2 不正なコマンド行オプションが指定されました。
- 3 不正な数のドメインが指定されました。
- 4 ユーザーが有効な特権を持っていません。
- 5 内部エラーが発生しました。
- 6 ボード情報の取得中にエラーが発生しました。

#### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。



## 関連項目

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

addtag(1M)、setupplatform(1M)、showcodusage(1M)、  
showplatform(1M)

名前	showbus - アクティブドメイン内の拡張ボードのバス構成を表示
形式	showbus [-v ] showbus -h
機能説明	showbus(1M) は、アクティブドメイン内の拡張ボードのバス構成を表示します。この情報は、スロット順序 EX0-EX17 で構成を表示するようデフォルト設定されます。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -h      ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> <b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま す。 <hr/>
	-v      冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。拡張ボード構成に加えて、ドメイン、ドメインキースイッチ位置、スロット 0 およびスロット 1 ボード割り当てが表示されます。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	システム内の通信拡張ボード (SOCX) のすべてのセットを表示するには、プラットフォームの管理者特権、オペレータ特権または保守特権が必要です。  ドメイン管理者または構成者が表示できるのは、自身が特権を持っているドメインに割り当てられている SOCX のみです。  詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

## 使用例 1 - すべてのドメインに対するバス構成の表示

この表示はプラットフォーム管理者のデフォルトです。ドメイン管理者または構成者は、これを表示するにはすべてのドメインに対する特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、ユーザーが特権を持っているドメインのみが表示されます。

```
sc0:sms-user:> showbus
```

Location	Data	Address	Response	SOCX
EX0	CS0	CS1	CS0	0x0001
EX1	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX2	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX3	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX4	BOTH	BOTH	BOTH	0x14010
EX5	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX6	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX7	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX8	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX9	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX10	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX11	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX12	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX13	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX14	BOTH	BOTH	BOTH	0x14010
EX15	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF
EX16	BOTH	BOTH	BOTH	0x14010
EX17	UNCONF	UNCONF	UNCONF	UNCONF

## 使用例 2 — -v を使用したすべてのドメインに対する showbus 表示

```
sc0:sms-user:> showbus -v
-----
SOCX: 0x14010
-----
Data:      BOTH
Address:   BOTH
Response:  BOTH
-----
Domain:A keyswitch: ON
Location:EX4 SB4:active IO4 :active
Location:EX14          IO14:active
Location:EX16          IO16:active
-----
SOCX: 0x00001
-----
Data:      CS0
Address:   CS1
Response:  CS0
-----
Domain:B keyswitch: ON
Location:EX0 SB0:active IO0:active
-----
UNCONFIGURED
-----
Domain: A keyswitch: ON
Location:EX6 SB6:unknown
```

### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

### 関連項目

setbus(1M)

名前 showcmdsyc - 現在のコマンド同期リストの表示

形式 showcmdsyc [-v]

showcmdsyc -h

機能説明 showcmdsyc は、SC のフェイルオーバー後に再起動する必要があるコマンドまたはスクリプトを判別するためにスペアシステムコントローラ (SC) で使用されるコマンド同期リストを表示します。

コマンド同期リストは *Descriptor*、*Identifier*、*Cmd* フォーマットで表示されま  
す。

*Descriptor* 特定のスクリプトを表すコマンド同期記述子です。

*Identifier* 自動フェイルオーバーが発生した後にスクリプトを新しいメ  
イン SC 上に再開可能なスクリプト内のマーカーポイントを識  
別します。識別子 -1 は、スクリプトがマーカーポイントを持  
っていないことを示します。

*Cmd* 再開するスクリプトの名前です。

オプション 次のオプションがサポートされています。

-h ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま  
す。

---

-v すべての利用可能コマンド情報を表示します。

#### 拡張機能説明

#### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオ  
ペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の  
特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニユア  
ル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してく  
ださい。

## 使用例

使用例 1 - コマンド同期リストの表示

```
sc0:sms-user:> showcmdsyc
```

```
DESCRIPTOR      IDENTIFIER      CMD
                0                -1      c1 a1 a2
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

cancelcmdsyc(1M)、initcmdsyc(1M)、runccmdsyc(1M)、  
savecmdsyc(1M)

名前	showcodlicense - Capacity on Demand (COD) ライセンスデータベースに登録されている COD RTU (right-to-use) ライセンスの表示
形式	showcodlicense [-r] [-v] showcodlicense -h
機能説明	showcodlicense(1M) は、COD ライセンスデータベースに登録されている COD ライセンスの情報を表示します。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
注	注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
	-r ライセンス情報を加工せずに、COD ライセンスデータベース内と同じ形式 ( <i>license-signature</i> ) で表示します。
	-v 冗長モード。ライセンス情報を、加工した形式と未加工の <i>license-signature</i> 形式の両方で表示します。
拡張機能説明	showcodlicense コマンドが表示する COD 情報は次のとおりです。
Description	資源の種類 (プロセッサ)
Lic Ver	ライセンスのバージョン番号 (常に 01)
Expiration	なし
Count	該当する資源に与えられている RTU ライセンス数
Status	該当する資源のライセンスが有効 (GOOD) か失効している (EXPIRED) かを示します。
Cls	サポートされていません。階層クラスの値は常に 1 です。
Tier Num	サポートされていません。階層番号は常に 1 です。
Req	サポートされていません。必要な下位ライセンス数は常に 0 です。

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者グループまたはプラットフォームオペレータグループの特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

COD ライセンス情報の表示例を以下に示します。

## 使用例 1 — ライセンスデータを加工した形式で表示

```
sc0:sms-user:>showcodlicense
```

Description	Lic		Count	Status	Cls	Tier	
	Ver	Expiration				Num	Req
PROC	01	NONE	16	GOOD	1	1	0

## 使用例 2 — ライセンスデータを未加工の形式で表示

```
sc0:sms-user:> showcodlicense -r
```

```
01:5014936C37048:03001:0201010100:16:00000000:RKQhd8zKNnTwvxT5DJ  
lZnQ
```

## 使用例 3 — ライセンスデータを加工した形式と未加工形式の両方で表示

```
sc0:sms-user:> showcodlicense -v
```

Description	Lic		Count	Status	Cls	Tier	
	Ver	Expiration				Num	Req
PROC	01	NONE	16	GOOD	1	1	0

```
01:5014936C37048:03001:0201010100:16:00000000:RKQhd8zKNnTwvxT5D  
JlZnQ
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了
- 1 不正な使用方法
- 2 ユーザーが有効な特権を持たない
- >2 内部エラーが発生しました (詳細は、/var/opt/SUNWSMS/adm/  
platform/messages を参照)



## 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

addcodlicense(1M)、codd(1M)、deletecodlicense(1M)、  
showcodusage(1M)

名前	showcodusage - Capacity on Demand (COD) 資源の現在の使用状況統計の表示
形式	showcodusage [-v] [-p resource domains ]  showcodusage -h
機能説明	showcodusage(1M) は、COD RTU (right-to-use) ライセンスの現在の使用状況に関する情報を表示します。デフォルトでは、使用中およびインストール済みの COD RTU ライセンスの要約が、各資源の現在の状態と共に表示されます。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -h      ヘルプ。使用方法を表示します。
<hr/>	
注 -	単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
<hr/>	
	-p domains  ライセンスの使用状況をドメイン別に表示します。表示される統計情報には、ドメインで使用されている COD RTU ライセンス数、ドメインに割り当てられている資源、およびドメインに予約されている COD RTU ライセンス数が含まれます。
	-p resource  ライセンスの使用状況を資源の種類別に表示します。
	-v      冗長モード。COD の使用状況に関する利用可能な全情報 (システムとそのメインでの COD RTU ライセンスの使用状況を含む) を表示します。
拡張機能説明	showcodusage -p resource コマンドが表示するシステムの COD 使用状況情報は次のとおりです。
Resource	利用可能な COD 資源の種類 (プロセッサ)
In Use	システムで使用されている COD CPU の数
Installed	システムに取り付けられている COD CPU の数

License	インストール済みの COD RTU ライセンスの数
Status	次のいずれかの COD 属性
OK	使用中の COD CPU 数と対比して、十分な数のライセンスが利用できることを示します。追加して利用できる COD 資源の数と、利用可能なインスタントアクセス CPU (ヘッドルーム) の数も示されます。
HEADROOM	使用中のインスタントアクセス COD CPU の数
Violation	現在の COD RTU ライセンス違反の数。使用中の COD CPU 数のうち、利用可能な COD RTU ライセンスを超過する部分がライセンス違反になります。COD RTU ライセンスデータベースから COD RTU ライセンスキーを強制的に削除したときに、削除したライセンスに対応する COD RTU の使用をそのまま継続すると、ライセンス違反になる可能性があります。

showcodusage -p domain コマンドがドメインごとに表示する COD 使用状況情報は次のとおりです。

Domain/Resource	各ドメインの COD RTU 資源 (プロセッサ)。Unused と表示されているプロセッサは、ドメインに割り当てられていない COD CPU です。
In Use	ドメインで使用されている COD CPU の数
Installed	ドメインに取り付けられている COD CPU 資源の数
Reserved	ドメインに割り当てられている COD CPU ライセンスの数
Status	-v オプションを指定したときに、次のいずれかの値が表示されます。

Licensed	このドメイン COD CPU は使用中で、対応する COD RTU ライセンスが存在する。
Unlicensed	このドメイン COD CPU は使用されておらず、対応する COD RTU ライセンスは存在しない。
Unused	この COD CPU は使用されていない。

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、またはドメイン管理者のグループ特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

プラットフォーム管理者特権を持つユーザーは、資源とドメインの使用状況サマリーを共に表示できます。ドメイン管理者特権を持つユーザーが表示できるのは、特権を持つドメインの使用状況サマリーと、未使用ライセンスのレポートだけです。

## 使用例 1 – COD 使用状況の表示 (資源の種類別)

```
sc0:sms-user:> showcodusage -p resource
Resource  In Use  Installed  Licensed  Status
-----  -
PROC      4       4          16       OK: 12 available
```

## 使用例 2 - COD 使用状況の表示 (ドメイン別)

```
sc0:sms-user:> showcodusage -p domains
```

Domain/Resource	In Use	Installed	Reserved
A - PROC	0	0	0
B - PROC	0	0	0
C - PROC	0	0	0
D - PROC	4	4	0
E - PROC	0	0	0
F - PROC	0	0	0
G - PROC	0	0	0
H - PROC	0	0	0
I - PROC	0	0	0
J - PROC	0	0	0
K - PROC	0	0	0
L - PROC	0	0	0
M - PROC	0	0	0
N - PROC	0	0	0
O - PROC	0	0	0
P - PROC	0	0	0
Q - PROC	0	0	0
R - PROC	0	0	0
Unused - PROC	0	0	12

## 使用例 3 - COD 使用状況の表示 (資源およびドメイン別)

```

sc0:sms-user:>showcodusage -v
Resource  In Use  Installed  Licensed  Status
-----  -
PROC      4       4          16      OK: 12 available

Domain/Resource  In Use  Installed  Reserved  Status
-----  -
A - PROC          0       0          0
B - PROC          0       0          0
   SB6 - PROC      0       0
       SB6/P0                Unused
       SB6/P1                Unused
       SB6/P2                Unused
       SB6/P3                Unused
C - PROC          0       0          0
   SB12 - PROC     0       0
       SB12/P0                Unused
       SB12/P1                Unused
       SB12/P2                Unused
       SB12/P3                Unused
D - PROC          4       4          0
   SB4 - PROC      4       4
       SB4/P0                Licensed
       SB4/P1                Licensed
       SB4/P2                Licensed
       SB4/P3                Licensed
   SB16 - PROC     4       4
       SB16/P0                Unused
       SB16/P1                Unused
       SB16/P2                Unused
       SB16/P3                Unused
E - PROC          0       0          0
F - PROC          0       0          0
G - PROC          0       0          0
H - PROC          0       0          0
I - PROC          0       0          0
J - PROC          0       0          0
K - PROC          0       0          0
L - PROC          0       0          0
M - PROC          0       0          0
N - PROC          0       0          0
O - PROC          0       0          0
P - PROC          0       0          0
Q - PROC          0       0          0
R - PROC          0       0          0
Unused - PROC     0       0          12

```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了
- 1 ユーザーによる取り消し
- 2 不正な使用方法
- 3 ユーザーが有効な特権を持たない
- >3 内部エラーが発生しました (詳細は、`/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages` を参照)

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

`showcodlicense(1M)`、`codd(1M)`

名前	showcomponent - コンポーネントのブラックリスト状態の表示
形式	showcomponent [-a -d <i>domain_indicator</i> ] [-v] [ <i>location...</i> ]  showcomponent -h
機能説明	<p>showcomponent(1M) は、指定したコンポーネントがプラットフォーム、ドメイン、または ASR ブラックリストファイルにリストされているかどうかを示します。</p> <p>-a または -d オプションのいずれも指定していない場合は、showcomponent はプラットフォームブラックリストを表示します。<i>location</i> が指定されていない場合は、showcomponent では指定したブラックリスト内のすべてのコンポーネントを表示します。</p> <p><i>blacklist</i> は、POST が起動時に使用できないコンポーネントを一覧表示した内部ファイルです。POST はシステムを起動用に準備する前にブラックリストファイルを読み取り、OpenBoot PROM とともに正常にテストが完了したコンポーネントのみのリストを渡します。ブラックリストにあるファイルは除外されます。</p> <p>SMS では、ドメインボード用、プラットフォームボード用、内部自動システム回復 (ASR) ブラックリストの 3 つのブラックリストをサポートします。</p> <p>プラットフォームおよびドメインブラックリストの使用および編集に関する詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 6 章「ドメイン制御」を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-a ASR ブラックリストを指定します。</p> <p>-d <i>domain_indicator</i></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。このオプションはドメインブラックリストを指定します。</p> <p><i>domain_tag</i> - addtag (1M) を使用してドメインに割り当てられる名前です。このオプションはドメインブラックリストを指定します。</p>



-h ヘルプ。使用方法を表示します。

---

**注 -** 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま  
す。

---

-v すべての利用可能コマンド情報を表示します。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*location* コンポーネントの場所。次のいずれかの形式で、スラッシュ  
で区切って指定します。

*board\_loc/proc/bank/logical\_bank*  
*board\_loc/proc/bank/all\_dimms\_on\_that\_bank*  
*board\_loc/proc/all\_banks\_on\_that\_proc*  
*board\_loc/all\_banks\_on\_that\_board*  
*board\_loc/proc*  
*board\_loc/procs*  
*board\_loc/cassette*  
*board\_loc/bus*  
*board\_loc/paroli\_link*

*location* 引数が複数の場合は、スペースで区切ります。

*location* 形式は、オプションであり、特定の位置にあるボード  
上の特定のコンポーネントを指定するために使用されます。

たとえば、*location* が SB5/P0/B1/L1 の場合、SB5 にあるプロ  
セッサ 0 上のバンク 1 の論理バンク1 を示します。

*location* が SB0/PP1 の場合、SB0 にあるプロセッサペア 1 を示  
します。

*location* が CS0/ABUS1 の場合、CS0 にあるアドレスバス 1 を  
示します。

次の *board\_loc* 形式が使用できます。

Sun Fire 15K, Sun Fire 12K

SB(0...17), SB(0...8)

IO(0...17), IO(0...8)

CS(0|1), CS(0|1)

EX(0...17), EX(0...8)

プロセッサ位置は、単一のプロセッサまたはプロセッサペアを示します。

1枚のCPU/メモリーボードでは、4つのプロセッサが使用できます。ボード上のプロセッサペアは、procs 0 と 1、および procs 2 と 3 です。

MaxCPU には、procs 0 と 1、および 1 つのみの proc ペア (PP0) の 2 つのプロセッサがあります。このボードに PP1 を使用すると、disablecomponent が終了し、エラーメッセージが表示されます。

次の *proc* 形式が使用できます。

P(0...3) PP(0|1)

次の *bank* 形式が使用できます。

B(0|1)

次の *logical\_bank* 形式が使用できます。

L(0|1)

次の *all\_dimms\_on\_that\_bank* 形式が使用できます。

D

次の *all\_banks\_on\_that\_proc* 形式が使用できます。

B

次の *all\_banks\_on\_that\_board* 形式が使用できます。

B

次の *paroli\_link* 形式が使用できます。

## PAR(011)

hsPCI アセンブリには、ホットスワップ可能なカセットが含まれます。

次の *hsPCI* 形式が使用できます。

## C(315)V(011)

hsPCI+ アセンブリには、ホットスワップ可能なカセットが含まれます。

次の *hsPCI+* 形式が使用できます。

## C3V(011)2) および C5V0

バス位置には、アドレス、データおよび応答の 3 つがあります。

次の *bus* 形式が使用できます。

## ABUS|DBUS|RBUS (011)

## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。ドメイン特権を持っている場合は、特権を持っているドメインに対してのみこのコマンドを実行することができます。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

使用例 1 – SB0 が ASR ブラックリストにあるかどうかの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent -a SB0
Component SB0 is disabled: #High Voltage
```

**使用例 2** — ドメイン B 内の 4 つのボード/コンポーネントがブラックリストにあるかどうかの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent -dB IO4/PP0 SB5 IO6/C5V0 EX7/ABUS0
Component IO4/PP0 is disabled:#High temp
Component SB5 is disabled:<no reason given>
Component IO6/C5V0 is NOT disabled.
Component EX7/ABUS0 is NOT disabled.
```

**使用例 3** — ドメイン B 内の IO7 上の論理バンクがブラックリストに登録されているかどうかの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent -dB IO7/P0/B1/L0
Component IO7/P0/B1/L0 is disabled:<no reason given>
```

**使用例 4** — すべてのプラットフォームブラックリスト掲載コンポーネントの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent
Component SB0 is disabled:#High temp
Component SB3 is disabled:
Component IO2 is disabled. <no reason given>
```

**使用例 5** — ドメイン B のブラックリストに含まれる全コンポーネントの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent -dB
Component IO4/PP0 is disabled: #High temp
Component SB5 is disabled:<no reason given>
```

**使用例 6** — ASR ブラックリストに含まれる全コンポーネントの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent -a
Component SB0 is disabled: #High temp
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist

esmd によって除外されたコンポーネントの一覧。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/platform/blacklist
```

除外されるプラットフォームコンポーネントの一覧。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/domain_id/blacklist
```

除外されるドメインコンポーネントの一覧。

---

**注 -** ASR ブラックリストファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。

---

#### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

#### 関連項目

enablecomponent(1M)、disablecomponent(1M)、esmd(1M)

名前	showdatasync - フェイルオーバーに対するシステムコントローラ (SC) のデータ同期状態の表示
形式	showdatasync [-l   -Q] [-v]  showdatasync -h
機能説明	showdatasync は、メイン SC からスペア SC に適用 (コピー) されたファイルの現在の状態を提供します。データ適用は、スペア SC 上のデータをメイン SC 上のデータと同期して、SC フェイルオーバーが発生した場合にスペア SC がメイン SC とともに最新の状態になっているようにします。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -h      ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> <b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま す。 <hr/>
	-l      現在のデータ適用リスト内にファイルを一覧表示します。表示される 情報の詳細については、「拡張機能説明」の節を参照してください。
	-Q      適用のため待ち行列に入れられているファイルを一覧表示します。各 ファイル名には、ファイルへの絶対パスが含まれます。
	-v      冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。
拡張機能説明	ここでは、showdatasync コマンドによって表示される情報について説明し ます。  オプションを showdatasync コマンドとともに指定していない場合は、次の 情報が表示されます。  File Propagation Status: Active File: Queued files:

File Propagation Status	データ同期の現在の状態を表示します。
Active	データ同期プロセスが使用可能になっていて、正常に機能していることを示します。
Disabled	SC フェイルオーバーが使用不可になっているためにデータ同期プロセスが使用不可になっていることを示します。
Failed	データ同期プロセスがファイルをスペア SC に適用できないことを示します。
Active File	現在適用されているファイルの絶対パスまたはリンクがアイドル状態であることを示すダッシュ (-) のどちらかを表示します。
Queued files	適用するファイルで、まだ処理されていないファイルの数を指定します。

-l オプションを showdatasync コマンドとともに指定した場合、データ適用リスト内の各エントリは次の形式で表示されます。

```

TIME PROPAGATED          INTERVAL          FILE
time                     interval         filename

```

ここで、

<i>time</i>	ファイルがメイン SC からスペア SC に適用された最後の時刻を示します。
<i>interval</i>	ファイルの変更をチェックする間隔を分単位で指定します。デフォルトの間隔は 60 分です。
<i>filename</i>	適用されたファイルの絶対パスと名前を示します。

#### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMSのセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

使用例 1 – データ同期の状態の表示

```
sc0:sms-user:> showdatasync
File Propagation State:  ACTIVE
Active File:              -
Queued files:            0
```

使用例 2 – データ同期リストの表示

```
sc0:sms-user:> showdatasync -l
TIME PROPAGATED          INTERVAL      FILE
Mar 23 16:00:00          60           /tmp/t1
```

使用例 3 – データ同期キューの表示

```
sc0:sms-user:> showdatasync -Q
FILE
/tmp/t1
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

setdatasync(1M)



名前	showdate - システムコントローラ (SC) またはドメインの日付と時刻の表示
形式	showdate [-d <i>domain_indicator</i> ] [-u] [-v]  showdate -h
機能説明	showdate (1M) は、SC の現在の日付と時刻を表示します。オプションで、showdate はドメインの時間を表示します。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -d <i>domain_indicator</i>  次のいずれかを使ってドメインを指定します。  <i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。  <i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。  -h ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> <b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。 <hr/>
	-u グリニッジ標準時刻 (GMT) を使用して時刻を解釈して表示します。デフォルトでは該当地域のタイムゾーンが使用されます。
	-v 冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	SC の日付を表示するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、またはプラットフォーム保守の特権が必要です。ドメインの日付を表示するには、指定したドメインに対するドメイン管理者特権またはドメイン構成者特権が必要です。  詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

使用例 1 – 太平洋標準時 (PST) での現在のローカル日付表示

```
sc0:sms-user:> showdate
System Controller:Sat Feb 2 15:23:21 PST 2002
```

使用例 2 – GMT を使用した現在の日付表示

```
sc0:sms-user:> showdate -u
System Controller:Sat Feb 2 23:23:21 GMT 2002
```

使用例 3 – 太平洋標準時でのドメイン A の現在のローカル日付表示

```
sc0:sms-user:> showdate -d a
Domain a:Sat Feb 2 15:33:20 PST 2002
```

使用例 4 – GMT を使用したドメイン A の現在の日付表示

```
sc0:sms-user:> showdate -d a -u
Domain a:Sat Feb 2 23:33:20 GMT 2002
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

addtag(1M)、setdate(1M)

名前	showdevices - システムボードデバイスおよび資源使用状況情報の表示
形式	showdevices [-v] [-p bydevice byboard query force] <i>location</i> ... showdevices [-v] [-p bydevice byboard] -d <i>domain_indicator</i> showdevices -h
機能説明	<p>showdevices(1M) は、システムボード上の構成された物理デバイスおよびこれらのデバイスで利用可能な資源を表示します。使用状況情報は、システム資源をアクティブに管理しているアプリケーションおよびサブシステムによって提供されます。管理対象資源のオフライン照会を実行することによってシステムボード DR 操作の予測される影響を表示できます。非管理対象のデバイスはデフォルトでは表示されません。-v オプションを使用する必要があります。</p> <p>showdevices は、1 つ以上の Sun Fire 15K/12K ドメインからデバイス情報を収集します。このコマンドでは、dca(1M) をプロキシとして使用してドメインから情報を収集します。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_indicator</i></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><i>domain_tag</i> - addtag (1M) を使用してドメインに割り当てられる名前です。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>

- p 特定のレポートを表示します。
- p に対する有効な引数は次のとおりです。
- |          |  |
|----------|--|
| bydevice | リスト出力はデバイスのタイプ (CPU、メモリー、IO) によってグループ化されます。これはデフォルト設定です。   |
| byboard  | リスト出力はシステムボードによってグループ化されます。デフォルトの出力はデバイスのタイプ (CPU、メモリー、IO) でグループ化された表形式です。                         |
| query    | 出力されるリストには、システムボードの削除の影響予測を照会した結果が表示されます。  |
| force    | オフライン照会を強制します。資源消費プログラムは、システム資源の使用を破棄できるかどうかを予測するときに強制セマンティックを適用するよう要求されます。(cfgadm(1M) を参照してください)。 |

---

注 - 引数 query および force は、-d と共に使用することはできません。

---

- v すべての I/O デバイスを表示します。管理対象および非管理対象 I/O デバイスの両方が含まれます。管理対象デバイスはアクティブに管理されている資源をエクスポートします。非管理対象デバイスは物理的に構成されていますが、アクティブに管理されている資源をエクスポートしません。非管理対象デバイスの使用状況情報は利用できません。

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

- location* ボード位置のリストで、スペースで区切ります。複数の *location* 引数を使用できます。

次の`location`形式が使用できます。

Sun Fire 15K, Sun Fire 12K

SB(0...17), SB(0...8)

IO(0...17), IO(0...8)

## 拡張機能説明

`showdevices` のフィールドは次のとおりです。

`domain` タグまたは識別子

`board` ボード識別子

CPU:

`id` プロセッサ ID

`state` プロセッサの状態

`speed` CPU の周波数 MHz 単位

`ecache` CPU キャッシュサイズ MB 単位

メモリー:

`board mem` ボードのメモリーサイズ MB 単位

`perm mem` ボード上の再配置不可能メモリー量 MB 単位

`base address` ボード上のメモリーのベース物理アドレス

`domain mem` システムメモリーサイズ MB 単位

`board` ボード識別子

メモリーの消耗が進行している場合は、次の項目が利用できます。

`target board` ターゲットボード識別子

`deleted` すでに削除されているメモリー量 MB 単位

`remaining` 削除可能な残りのメモリー量 MB 単位

I/O デバイス:

`device` I/O デバイスのインスタンス名

resource 管理対象資源名  
usage リソース使用状況インスタンスの説明  
query リソースのオフライン照会の結果

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、指定したすべてのボードに対するドメイン管理者特権または構成者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

## 使用例 1 - システムボード IO1 に対するデバイスの表示

```
sc0:SMS-user:>showdevices IO1
```

```
IO Devices
```

```
-----
```

domain	location	device	resource	usage
A	IO1	sd3	/dev/dsk/c0t3d0s0	mounted filesystem "/"
A	IO1	sd3	/dev/dsk/c0t3s0s1	dump device (swap)
A	IO1	sd3	/dev/dsk/c0t3s0s1	swap area
A	IO1	sd3	/dev/dsk/c0t3d0s3	mounted filesystem "/var"
A	IO1	sd3	/var/run	mounted filesystem "/var/run"

## 使用例 2 - ドメイン A に対するデバイスの表示

```
sc0:SMS-user:> showdevices -v -d A
```

```
CPU
```

```
----
```

domain	location	id	state	speed	ecache
A	C1	40	online	400	4
A	C1	41	online	400	4
A	C1	42	online	400	4
A	C1	43	online	400	4
A	C2	55	online	400	4
A	C2	56	online	400	4
A	C2	57	online	400	4
A	C2	58	online	400	4

```
Memory drain in progress:
```

```
-----
```

domain	location	board	perm	base	domain	target	deleted	remaining
		mem MB	mem MB	address	mem MB	board	mem MB	mem MB
A	C1	2048	723	0x600000	4096	C2	250	1500
A	C2	2048	0	0x200000	4096			

```
IO Devices
```

```
-----
```

domain	location	device	resource	usage
A	IO1	sd0		

```

A      IO1      sd1
A      IO1      sd2
A      IO1      sd3      /dev/dsk/c0t3d0s0      mounted filesystem "/"
A      IO1      sd3      /dev/dsk/c0t3s0s1      dump device (swap)
A      IO1      sd3      /dev/dsk/c0t3s0s1      swap area
A      IO1      sd3      /dev/dsk/c0t3d0s3      mounted filesystem "/var"
A      IO1      sd3      /var/run                mounted filesystem "/var/run"
A      IO1      sd4
A      IO1      sd5
A      IO1      sd6

```

### 使用例 3 – システムボード IO1 に対するオフライン照会の結果表示

```

sc0:sms-user:> showdevices -p query IO1
Location IO1 - Domain A
=====
IO Devices
-----
device  resource                                query  usage/reason
sd3     /dev/dsk/c0t3d0s0                        fail   mounted filesystem "/"
sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1                        fail   dump device (swap)
sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1                        fail   swap area
sd3     /dev/dsk/c0t3d0s3                        fail   mounted filesystem "/var"
sd3     /var/run                                  -      mounted filesystem "/var/run"

```

query フィールドは、資源を除去した結果の予測を表示します。マウントされたファイルシステム /var をオフラインにするのに失敗した場合は、照会がレイヤーマウントポイント /var/run に達することができなくなります。

### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 1 不正なドメインが指定されました。
- 2 不正なオプションなどのコマンド行エラーが検出されました。
- 3 複数のドメインが指定されました。
- 4 pcd との通信中にエラーが発生しました。
- 5 ドメインとの通信中にエラーが発生しました。
- 6 デバイス情報の処理中にエラーが発生しました。
- 7 メモリー割り当ての失敗などの内部エラーが発生しました。

### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

showdevices(1M)

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、dca(1M)、pcd(1M)



名前	showenvironment - 環境データの表示
形式	<pre>showenvironment [-d <i>domain_indicator</i> [, <i>domain_indicator</i>]...]... [-p temps volts currents fans powers [, temps volts currents fans powers]...]... [-v ]  showenvironment [-d <i>domain_indicator</i> [, <i>domain_indicator</i>]...] [-p faults] [-v ]  showenvironment -h</pre>
機能説明	<p>showenvironment(1M) は、環境データ (温度、電圧など) を表示します。<i>domain_id</i> または <i>domain_tag</i> が指定されている場合、ユーザーがドメイン特権を持っていれば、そのドメインに関係している環境データが表示されます。ドメインが指定されていない場合は、そのユーザーに許可されるすべてのドメインデータが表示されます。</p>
注 -	<hr/> <p>ドメイン構成ユニット (DCU) (たとえば、CPU または I/O) のみがドメインに属します。ファントレイ、バルク電源またはその他のボード (exb、csb) などに関連する環境データを表示するには、プラットフォーム特権が必要です。また、温度、電圧、電流、バルク電源状態、およびファントレイの状態または障害の個々のレポートを <code>-p</code> オプションを使用して指定することもできます。<code>-p</code> オプションがない場合は、すべてのレポートが表示されます。</p> <hr/>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><code>-d <i>domain_indicator</i></code></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><i>domain_tag</i> - <code>addtag (1M)</code> を使用してドメインに割り当てられるドメイン名です。</p> <p><code>-h</code> ヘルプ。使用方法を表示します。</p>

---

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま  
す。

---

-p 特定のレポートを表示します。レポート引数が複数の場合は、コンマ  
で区切ります。

有効なレポートは次のとおりです。

temps リスト出力は温度によってグループ化されます。

volts リスト出力は電圧によってグループ化されます。

currents リスト出力は電流によってグループ化されます。

fans リスト出力はファンによってグループ化されます。

powers リスト出力はバルク電源供給によってグループ化され  
ます。

-p faults

リスト出力は最適なスレッシュホールド内に収まらないすべてのコンポー  
ネント読み取り値です。

---

注 - faults 引数はその他のレポート引数と一緒に使用されません。

---

-v 冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。

Unit フィールドには、次の 3 つの値の中の 1 つが含まれます。

C 摂氏

V ボルト

A アンペア

Status フィールドには、次の 16 の状態のいずれかの値が含まれます。

温度測定値 :

OVERLIMIT	制限超過
HIGH_CRIT	危険・高
HIGH_WARN	警告・高
LOW_CRIT	危険・低
LOW_WARN	警告・低
OK	最適
INVALID	測定失敗

## 電圧測定値：

HIGH_MAX	最高
LOW_MIN	最低
OK	許容範囲
INVALID	測定失敗

## 電流測定値：

OK	組み合わせコンポーネントの両方の測定値の違いが許容範囲内である
BAD	組み合わせコンポーネントの両方の測定値の違いが許容範囲外である
INVALID	測定失敗

## その他：

ON	電源投入
OFF	電源切断
PRESENCE	スロット 1 にホットプラグカードがある
FAIL	障害状態

HIGH	高速に設定
NORMAL	標準速度に設定
INVALID	測定失敗
AGE	測定時間
UNKNOWN	電源/ボードのタイプが <b>unknown</b> である

## 必要なグループ特権

ドメイン管理者特権または構成者特権を持つドメイン情報のみが表示されます。それ以外の場合は、プラットフォームの管理者、オペレータ、または保守特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

## 使用例 1 - Sun Fire 15K システム上のすべてのドメイン用の環境データの表示

```
sc0:sms-user:> showenvironment
```

LOCATION	DEVICE	SENSOR	VALUE	UNIT	AGE	STATUS
SC at SC0	max1617a	RIO Temp	38.00	C	35.5	sec OK
SC at SC0	max1617a	IOA Temp	32.00	C	35.5	sec OK
SC at SC0	pcf8591	PS0 Temp	46.49	C	35.5	sec OK
SC at SC0	pcf8591	PS1 Temp	43.26	C	35.5	sec OK
SC at SC0	sbbc	SBBC Temp	45.83	C	35.5	sec OK
SC at SC0	cbh	CBH Temp	50.49	C	35.5	sec OK
SCPER at SCPER0	max1617a	AMB 0 Temp	26.00	C	35.7	sec OK
SCPER at SCPER0	max1617a	AMB 1 Temp	25.00	C	35.7	sec OK
SCPER at SCPER0	max1617a	AMB 2 Temp	25.00	C	35.7	sec OK
SC at SC0	pcf8591	1.5 VDC	1.48	V	37.1	sec OK
SC at SC0	pcf8591	3.3 VDC	3.28	V	37.1	sec OK
SC at SC0	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	37.1	sec OK
SC at SC0	pcf8591	5.0 VDC	4.99	V	37.1	sec OK
SC at SC0	pcf8591	+12.0 VDC	11.95	V	37.1	sec OK
SC at SC0	pcf8591	-12.0 VDC	-12.01	V	37.1	sec OK
SC at SC0	pcf8591	1.5 CVT0 VDC	1.48	V	37.1	sec OK
SC at SC0	pcf8591	1.5 CVT1 VDC	1.48	V	37.1	sec OK
SCPER at SCPER0	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	37.3	sec OK
SCPER at SCPER0	pcf8591	5.0 VDC	5.02	V	37.3	sec OK
SCPER at SCPER0	pcf8591	+12.0 VDC	12.10	V	37.3	sec OK
SC at SC0	pcf8591	3.3 V_PS0	6.44	A	37.2	sec OK
SC at SC0	pcf8591	3.3 V_PS1	5.71	A	37.2	sec OK
SC at SC0	pcf8591	5.0 V_PS0	6.10	A	37.2	sec OK
SC at SC0	pcf8591	5.0 V_PS1	6.22	A	37.2	sec OK
SC at SC1	max1617a	RIO Temp	30.00	C	35.5	sec OK
SC at SC1	max1617a	IOA Temp	25.00	C	35.5	sec OK
SC at SC1	pcf8591	PS0 Temp	41.65	C	35.5	sec OK
SC at SC1	pcf8591	PS1 Temp	33.58	C	35.5	sec OK
SCPER at SCPER1	max1617a	AMB 0 Temp	18.00	C	35.7	sec OK
SCPER at SCPER1	max1617a	AMB 1 Temp	18.00	C	35.7	sec OK
SCPER at SCPER1	max1617a	AMB 2 Temp	18.00	C	35.7	sec OK
SC at SC1	pcf8591	1.5 VDC	1.48	V	37.0	sec OK

SC at SC1	pcf8591	3.3 VDC	3.28	V	37.0	sec	OK
SC at SC1	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	37.0	sec	OK
SC at SC1	pcf8591	5.0 VDC	4.99	V	37.0	sec	OK
SC at SC1	pcf8591	+12.0 VDC	11.95	V	37.0	sec	OK
SC at SC1	pcf8591	-12.0 VDC	-12.01	V	37.0	sec	OK
SC at SC1	pcf8591	1.5 CVT0 VDC	1.88	V	37.0	sec	OK
SC at SC1	pcf8591	1.5 CVT1 VDC	1.87	V	37.0	sec	OK
SCPER at SCPER1	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	37.3	sec	OK
SCPER at SCPER1	pcf8591	5.0 VDC	5.02	V	37.3	sec	OK
SCPER at SCPER1	pcf8591	+12.0 VDC	12.03	V	37.3	sec	OK
SC at SC1	pcf8591	3.3 V_PS0	6.15	A	37.0	sec	OK
SC at SC1	pcf8591	3.3 V_PS1	5.85	A	37.0	sec	OK
SC at SC1	pcf8591	5.0 V_PS0	5.98	A	37.0	sec	OK
SC at SC1	pcf8591	5.0 V_PS1	6.22	A	37.0	sec	OK
CSB at CS0	max1617a	AMB Top Temp	30.00	C	29.8	sec	OK
CSB at CS0	max1617a	AMB Bot Temp	31.00	C	29.8	sec	OK
CSB at CS0	sbbc	SBBC Temp	39.16	C	29.8	sec	OK
CSB at CS0	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	36.8	sec	OK
CSB at CS0	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	36.8	sec	OK
CSB at CS0	pcf8591	2.5 VDC	2.54	V	36.8	sec	OK
CSB at CS0	pcf8591	3.3 VDC HK	3.30	V	36.8	sec	OK
CSB at CS1	max1617a	AMB Top Temp	24.00	C	29.6	sec	OK
CSB at CS1	max1617a	AMB Bot Temp	26.00	C	29.6	sec	OK
CSB at CS1	sbbc	SBBC Temp	33.16	C	29.6	sec	OK
CSB at CS1	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	36.7	sec	OK
CSB at CS1	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	36.7	sec	OK
CSB at CS1	pcf8591	2.5 VDC	2.54	V	36.7	sec	OK
CSB at CS1	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	36.7	sec	OK
CP at CP0	dmx0	DMX0 Temp	33.91	C	32.3	sec	OK
CP at CP0	dmx1	DMX1 Temp	33.95	C	32.3	sec	OK
CP at CP0	dmx3	DMX3 Temp	29.92	C	32.3	sec	OK
CP at CP0	dmx5	DMX5 Temp	23.98	C	32.3	sec	OK
CP at CP0	amx0	AMX0 Temp	37.32	C	32.3	sec	OK
CP at CP0	amx1	AMX1 Temp	35.43	C	32.3	sec	OK
CP at CP0	rmx	RMX Temp	37.47	C	32.3	sec	OK
CP at CP0	darb	DARB Temp	31.85	C	32.3	sec	OK
CP at CP1	dmx0	DMX0 Temp	37.26	C	30.0	sec	OK
CP at CP1	dmx1	DMX1 Temp	37.26	C	30.0	sec	OK
CP at CP1	dmx3	DMX3 Temp	31.14	C	30.0	sec	OK
CP at CP1	dmx5	DMX5 Temp	29.12	C	30.0	sec	OK
CP at CP1	amx0	AMX0 Temp	36.60	C	30.0	sec	OK
CP at CP1	amx1	AMX1 Temp	38.77	C	30.0	sec	OK
CP at CP1	rmx	RMX Temp	36.73	C	30.0	sec	OK
CP at CP1	darb	DARB Temp	37.16	C	30.0	sec	OK
EXB at EX1	max1617a	AMB Top Temp	38.00	C	43.3	sec	OK
EXB at EX1	max1617	AMB Bot Temp	35.00	C	43.3	sec	OK
EXB at EX1	sbbc	SBBC Temp	50.49	C	43.3	sec	OK
EXB at EX1	axq	AXQ Temp	26.91	C	43.3	sec	OK
EXB at EX1	sdim	SDIM Temp	42.91	C	43.3	sec	OK
EXB at EX1	sdisc	SDISC Temp	48.83	C	43.3	sec	OK
EXB at EX1	sdis	SDISE Temp	38.67	C	43.3	sec	OK
EXB at EX1	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	36.5	sec	OK
EXB at EX1	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	36.5	sec	OK
EXB at EX1	pcf8591	2.5 VDC	2.51	V	36.5	sec	OK
EXB at EX1	pcf8591	3.3 VDC HK	3.30	V	36.5	sec	OK
CPU at SB1	max1617a	PROC 0 Temp	64.00	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	max1617a	PROC 1 Temp	69.00	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	max1617a	PROC 2 Temp	69.00	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	max1617a	PROC 3 Temp	67.00	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	sdco	SDC0 Temp	69.82	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	ar0	AR0 Temp	63.16	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	dx0	DX0 Temp	66.49	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	dx1	DX1 Temp	64.49	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	dx2	DX2 Temp	62.49	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	dx3	DX3 Temp	56.49	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	sbbc0	SBBC0 Temp	60.49	C	0.7	sec	OK
CPU at SB1	sbbc1	SBBC1 Temp	69.82	C	0.7	sec	OK

CPU at SB1	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	37.3	sec	OK
CPU at SB1	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	37.3	sec	OK
CPU at SB1	pcf8591	Core 0 Volt	1.64	V	37.3	sec	OK
CPU at SB1	pcf8591	Core 1 Volt	1.65	V	37.3	sec	OK
CPU at SB1	pcf8591	Core 2 Volt	1.64	V	37.3	sec	OK
CPU at SB1	pcf8591	Core 3 Volt	1.64	V	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	PS0 Temp	48.10	C	43.9	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	PS1 Temp	35.19	C	43.9	sec	OK
HPCI at IO1	sdc	SDC0 Temp	69.16	C	43.9	sec	OK
HPCI at IO1	ar	AR0 Temp	63.16	C	43.9	sec	OK
HPCI at IO1	dx0	DX0 Temp	62.49	C	43.9	sec	OK
HPCI at IO1	dx1	DX1 Temp	55.83	C	43.9	sec	OK
HPCI at IO1	sbbc	SBBC Temp	41.16	C	43.9	sec	OK
HPCI at IO1	max1617a	IOA0 Temp	53.00	C	43.9	sec	OK
HPCI at IO1	max1617a	IOA1 Temp	53.00	C	43.9	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	1.5 VDC	1.49	V	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	5.0 VDC	4.99	V	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	+12.0 VDC	11.95	V	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	-12.0 VDC	-11.92	V	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	1.5 CVT0 VDC	3.28	V	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	1.5 CVT1 VDC	1.49	V	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	3.3 V_PS0	10.25	A	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	3.3 V_PS1	10.25	A	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	5.0 V_PS0	3.41	A	37.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	5.0 V_PS1	3.41	A	37.3	sec	OK
Schizo0.0	max1617a	Schizo 0 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo1.0	max1617a	Schizo 1 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo0.1	max1617a	Schizo 0 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo1.1	max1617a	Schizo 1 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
EXB at EX3	max1617a	AMB Top Temp	35.00	C	56.1	sec	OK
EXB at EX3	max1617	AMB Bot Temp	34.00	C	56.1	sec	OK
EXB at EX3	sbbc	SBBC Temp	47.83	C	56.1	sec	OK
EXB at EX3	axq	AXQ Temp	26.93	C	56.1	sec	OK
EXB at EX3	sdim	SDIM Temp	42.58	C	56.1	sec	OK
EXB at EX3	sdisc	SDISC Temp	42.52	C	56.1	sec	OK
EXB at EX3	sdise	SDISE Temp	36.69	C	56.1	sec	OK
EXB at EX3	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	37.0	sec	OK
EXB at EX3	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	37.0	sec	OK
EXB at EX3	pcf8591	2.5 VDC	2.51	V	37.0	sec	OK
EXB at EX3	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	37.0	sec	OK
CPU at SB3	max1617a	PROC 0 Temp	62.00	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	max1617a	PROC 1 Temp	67.00	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	max1617a	PROC 2 Temp	66.00	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	max1617a	PROC 3 Temp	65.00	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	sdc0	SDC0 Temp	74.49	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	ar0	AR0 Temp	60.49	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	dx0	DX0 Temp	65.16	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	dx1	DX1 Temp	55.83	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	dx2	DX2 Temp	61.82	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	dx3	DX3 Temp	55.83	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	sbbc0	SBBC0 Temp	59.83	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	sbbc1	SBBC1 Temp	56.49	C	3.9	sec	OK
CPU at SB3	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	37.6	sec	OK
CPU at SB3	pcf8591	3.3 VDC	3.32	V	37.6	sec	OK
CPU at SB3	pcf8591	Core 0 Volt	1.64	V	37.6	sec	OK
CPU at SB3	pcf8591	Core 1 Volt	1.64	V	37.6	sec	OK
CPU at SB3	pcf8591	Core 2 Volt	1.65	V	37.6	sec	OK
CPU at SB3	pcf8591	Core 3 Volt	1.63	V	37.6	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	PS0 Temp	43.26	C	56.5	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	PS1 Temp	38.42	C	56.5	sec	OK
HPCI at IO3	sdc	SDC0 Temp	72.49	C	56.5	sec	OK
HPCI at IO3	ar	AR0 Temp	63.82	C	56.5	sec	OK
HPCI at IO3	dx0	DX0 Temp	63.16	C	56.5	sec	OK
HPCI at IO3	dx1	DX1 Temp	61.16	C	56.5	sec	OK
HPCI at IO3	sbbc	SBBC Temp	43.83	C	56.5	sec	OK

HPCI at IO3	max1617a	IOA0 Temp	52.00	C	56.5	sec	OK
HPCI at IO3	max1617a	IOA1 Temp	51.00	C	56.5	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	1.5 VDC	1.49	V	37.6	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	37.6	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	5.0 VDC	4.99	V	37.6	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	+12.0 VDC	12.03	V	37.6	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	-12.0 VDC	-12.01	V	37.6	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	37.6	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	1.5 CVT0 VDC	3.28	V	37.6	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	1.5 CVT1 VDC	1.49	V	37.6	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	3.3 V_PS0	10.54	A	37.7	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	3.3 V_PS1	10.54	A	37.7	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	5.0 V_PS0	3.41	A	37.7	sec	OK
HPCI at IO3	pcf8591	5.0 V_PS1	3.41	A	37.7	sec	OK
Schizo0.0	max1617a	Schizo 0 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo1.0	max1617a	Schizo 1 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo0.1	max1617a	Schizo 0 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo1.1	max1617a	Schizo 1 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
EXB at EX5	max1617a	AMB Top Temp	35.00	C	48.0	sec	OK
EXB at EX5	max1617	AMB Bot Temp	33.00	C	48.0	sec	OK
EXB at EX5	sbbc	SBBC Temp	47.16	C	48.0	sec	OK
EXB at EX5	axq	AXQ Temp	26.84	C	48.0	sec	OK
EXB at EX5	sdim	SDIM Temp	30.59	C	48.0	sec	OK
EXB at EX5	sdisc	SDISC Temp	32.42	C	48.0	sec	OK
EXB at EX5	sdise	SDISE Temp	30.52	C	48.0	sec	OK
EXB at EX5	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	34.3	sec	OK
EXB at EX5	pcf8591	3.3 VDC	3.32	V	34.3	sec	OK
EXB at EX5	pcf8591	2.5 VDC	2.51	V	34.3	sec	OK
EXB at EX5	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	34.3	sec	OK
CPU at SB5	max1617a	PROC 0 Temp	69.00	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	max1617a	PROC 1 Temp	73.00	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	max1617a	PROC 2 Temp	75.00	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	max1617a	PROC 3 Temp	72.00	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	sdco	SDC0 Temp	63.16	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	ar0	AR0 Temp	60.49	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	dx0	DX0 Temp	59.16	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	dx1	DX1 Temp	58.49	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	dx2	DX2 Temp	60.49	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	dx3	DX3 Temp	53.16	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	sbbc0	SBBC0 Temp	57.16	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	sbbc1	SBBC1 Temp	59.16	C	7.9	sec	OK
CPU at SB5	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	34.8	sec	OK
CPU at SB5	pcf8591	3.3 VDC	3.32	V	34.8	sec	OK
CPU at SB5	pcf8591	Core 0 Volt	1.64	V	34.8	sec	OK
CPU at SB5	pcf8591	Core 1 Volt	1.66	V	34.8	sec	OK
CPU at SB5	pcf8591	Core 2 Volt	1.63	V	34.8	sec	OK
CPU at SB5	pcf8591	Core 3 Volt	1.64	V	34.8	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	D147#0_0	24.00	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	D147#0_1	25.00	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	D147#0_2	24.00	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	D147#1_0	22.00	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	D147#1_1	23.00	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	D147#1_2	25.00	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	max1617a	XMITS0 Temp	34.00	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	max1617a	XMITS1 Temp	27.00	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	sbbc	SBBC Temp	32.50	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	sdco	SDC0 Temp	48.49	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	ar	AR0 Temp	47.16	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	dx0	DX0 Temp	44.50	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	dx1	DX1 Temp	39.83	C	46.2	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	1.5 VDC1	1.54	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	2.5 VDC1	2.53	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	3.3 VDC1	3.35	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	5.0 VDC1	5.02	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	+12.0 VDC1	12.36	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	-12.0 VDC1	-12.41	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	3.3 VDC HK1	3.33	V	13.0	sec	OK

HPCI+ at IO5	pcf8591	1.5 VDC1	1.54	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	2.5 VDC1	2.53	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	3.3 VDC1	3.35	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	5.0 VDC1	5.02	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	+12.0 VDC1	12.36	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	-12.0 VDC1	-12.41	V	13.0	sec	OK
HPCI+ at IO5	pcf8591	3.3 VDC HK1	3.61	V	13.0	sec	OK
XMITS0.0	max1617a	XMITS 0 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
XMITS1.0	max1617a	XMITS 1 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
XMITS0.1	max1617a	XMITS 0 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
XMITS1.1	max1617a	XMITS 1 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
EXB at EX7	max1617a	AMB Top Temp	34.00	C	37.2	sec	OK
EXB at EX7	max1617	AMB Bot Temp	35.00	C	37.2	sec	OK
EXB at EX7	sbbc	SBBC Temp	44.50	C	37.2	sec	OK
EXB at EX7	axq	AXQ Temp	19.18	C	37.2	sec	OK
EXB at EX7	sdim	SDIM Temp	34.42	C	37.2	sec	OK
EXB at EX7	sdisc	SDISC Temp	40.32	C	37.2	sec	OK
EXB at EX7	sdise	SDISE Temp	34.72	C	37.2	sec	OK
EXB at EX7	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	36.3	sec	OK
EXB at EX7	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	36.3	sec	OK
EXB at EX7	pcf8591	2.5 VDC	2.49	V	36.3	sec	OK
EXB at EX7	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	36.3	sec	OK
CPU at SB7	max1617a	PROC 0 Temp	41.00	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	max1617a	PROC 1 Temp	40.00	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	max1617a	PROC 2 Temp	52.00	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	max1617a	PROC 3 Temp	50.00	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	sdco	SDC0 Temp	61.82	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	ar0	AR0 Temp	55.16	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	dx0	DX0 Temp	58.49	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	dx1	DX1 Temp	59.83	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	dx2	DX2 Temp	56.49	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	dx3	DX3 Temp	59.83	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	sbbc0	SBBC0 Temp	61.82	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	sbbc1	SBBC1 Temp	54.49	C	8.1	sec	OK
CPU at SB7	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	37.2	sec	OK
CPU at SB7	pcf8591	3.3 VDC	3.32	V	37.2	sec	OK
CPU at SB7	pcf8591	Core 0 Volt	1.63	V	37.2	sec	OK
CPU at SB7	pcf8591	Core 1 Volt	1.62	V	37.2	sec	OK
CPU at SB7	pcf8591	Core 2 Volt	1.62	V	37.2	sec	OK
CPU at SB7	pcf8591	Core 3 Volt	1.62	V	37.2	sec	OK
MCPU at IO7	max1617a	PROC 0 Temp	67.00	C	8.3	sec	OK
MCPU at IO7	max1617a	PROC 1 Temp	71.00	C	8.3	sec	OK
MCPU at IO7	sbbc0	SBBC0 Temp	41.83	C	8.3	sec	OK
MCPU at IO7	sdco	SDC0 Temp	70.49	C	8.3	sec	OK
MCPU at IO7	ar0	AR0 Temp	63.82	C	8.3	sec	OK
MCPU at IO7	dx0	DX0 Temp	61.82	C	8.3	sec	OK
MCPU at IO7	dx1	DX1 Temp	59.83	C	8.3	sec	OK
MCPU at IO7	dx2	DX2 Temp	53.83	C	8.3	sec	OK
MCPU at IO7	dx3	DX3 Temp	49.83	C	8.3	sec	OK
MCPU at IO7	pcf8591	1.5 VDC	1.48	V	36.7	sec	OK
MCPU at IO7	pcf8591	3.3 VDC	3.28	V	36.7	sec	OK
MCPU at IO7	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	36.7	sec	OK
MCPU at IO7	pcf8591	Core 0 Volt	1.63	V	36.7	sec	OK
MCPU at IO7	pcf8591	Core 1 Volt	1.63	V	36.7	sec	OK
WPCI at IO8	max1617a	IOA0 Temp	42.00	C	51.8	sec	OK
WPCI at IO8	dx0	DX0 Temp	61.82	C	51.8	sec	OK
WPCI at IO8	dx1	DX1 Temp	55.83	C	51.8	sec	OK
WPCI at IO8	sdco	SDC Temp	62.49	C	51.8	sec	OK
WPCI at IO8	sbbc	SBBC Temp	38.50	C	51.8	sec	OK
WPCI at IO8	ar	AR Temp	65.16	C	51.8	sec	OK
WPCI at IO8	wci	WCIO Temp	21.11	C	51.8	sec	OK
WPCI at IO8	wci	WCII Temp	21.11	C	51.8	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	+12 VDC	12.03	V	12.6	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	-12 VDC	-11.92	V	12.6	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	3.3 HK	3.26	V	12.6	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	12.6	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	1.5 VDC	1.49	V	12.6	sec	OK



WPCI at IO8	pcf8591	2.5 VDC	2.49	V	12.6	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	5.0 VDC	5.02	V	12.6	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	1.5 VDC PAR0	1.52	V	12.6	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	1.5 VDC PAR1	1.51	V	12.6	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	3.3 VDC PAR0	3.28	V	12.6	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	3.3 VDC PAR1	3.28	V	12.6	sec	OK
Schizo0.0	max1617a	Schizo 0 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo0.1	max1617a	Schizo 0 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
EXB at EX10	max1617a	AMB Top Temp	31.00	C	49.0	sec	OK
EXB at EX10	max1617	AMB Bot Temp	28.00	C	49.0	sec	OK
EXB at EX10	sbbc	SBBC Temp	51.83	C	49.0	sec	OK
EXB at EX10	axq	AXQ Temp	26.87	C	49.0	sec	OK
EXB at EX10	sdim	SDIM Temp	32.56	C	49.0	sec	OK
EXB at EX10	sdisc	SDISC Temp	40.21	C	49.0	sec	OK
EXB at EX10	sdise	SDISE Temp	30.64	C	49.0	sec	OK
EXB at EX10	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	36.3	sec	OK
EXB at EX10	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	36.3	sec	OK
EXB at EX10	pcf8591	2.5 VDC	2.51	V	36.3	sec	OK
EXB at EX10	pcf8591	3.3 VDC HK	3.30	V	36.3	sec	OK
CPU at SB10	max1617a	PROC 0 Temp	37.00	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	max1617a	PROC 1 Temp	40.00	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	max1617a	PROC 2 Temp	40.00	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	max1617a	PROC 3 Temp	38.00	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	sdco	SDC0 Temp	61.16	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	ar0	AR0 Temp	61.16	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	dx0	DX0 Temp	55.16	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	dx1	DX1 Temp	56.49	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	dx2	DX2 Temp	55.83	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	dx3	DX3 Temp	51.16	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	sbbc0	SBBC0 Temp	53.16	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	sbbc1	SBBC1 Temp	55.16	C	6.0	sec	OK
CPU at SB10	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	36.8	sec	OK
CPU at SB10	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	36.8	sec	OK
CPU at SB10	pcf8591	Core 0 Volt	1.62	V	36.8	sec	OK
CPU at SB10	pcf8591	Core 1 Volt	1.62	V	36.8	sec	OK
CPU at SB10	pcf8591	Core 2 Volt	1.61	V	36.8	sec	OK
CPU at SB10	pcf8591	Core 3 Volt	1.62	V	36.8	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	PS0 Temp	41.65	C	49.4	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	PS1 Temp	28.74	C	49.4	sec	OK
HPCI at IO10	sdc	SDC0 Temp	69.16	C	49.4	sec	OK
HPCI at IO10	ar	AR0 Temp	61.82	C	49.4	sec	OK
HPCI at IO10	dx0	DX0 Temp	58.49	C	49.4	sec	OK
HPCI at IO10	dx1	DX1 Temp	47.16	C	49.4	sec	OK
HPCI at IO10	sbbc	SBBC Temp	35.16	C	49.4	sec	OK
HPCI at IO10	max1617a	IOA0 Temp	51.00	C	49.4	sec	OK
HPCI at IO10	max1617a	IOA1 Temp	47.00	C	49.4	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	1.5 VDC	1.49	V	36.8	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	3.3 VDC	3.28	V	36.8	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	5.0 VDC	5.02	V	36.8	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	+12.0 VDC	12.03	V	36.8	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	-12.0 VDC	-12.01	V	36.8	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	36.8	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	1.5 CVT0 VDC	3.28	V	36.8	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	1.5 CVT1 VDC	1.23	V	36.8	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	3.3 V_PS0	10.40	A	36.9	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	3.3 V_PS1	10.40	A	36.9	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	5.0 V_PS0	3.54	A	36.9	sec	OK
HPCI at IO10	pcf8591	5.0 V_PS1	3.54	A	36.9	sec	OK
Schizo0.0	max1617a	Schizo 0 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo1.0	max1617a	Schizo 1 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo0.1	max1617a	Schizo 0 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo1.1	max1617a	Schizo 1 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
EXB at EX12	max1617a	AMB Top Temp	28.00	C	61.1	sec	OK
EXB at EX12	max1617	AMB Bot Temp	26.00	C	61.1	sec	OK
EXB at EX12	sbbc	SBBC Temp	55.16	C	61.1	sec	OK
EXB at EX12	axq	AXQ Temp	-4.33	C	61.1	sec	OK
EXB at EX12	sdim	SDIM Temp	21.09	C	61.1	sec	OK

EXB at EX12	sdisc	SDISC Temp	50.86	C	61.1	sec	OK
EXB at EX12	sdise	SDISE Temp	40.83	C	61.1	sec	OK
EXB at EX12	pcf8591	1.5 VDC	1.50	V	36.9	sec	OK
EXB at EX12	pcf8591	3.3 VDC	3.28	V	36.9	sec	OK
EXB at EX12	pcf8591	2.5 VDC	2.51	V	36.9	sec	OK
EXB at EX12	pcf8591	3.3 VDC HK	3.26	V	36.9	sec	OK
CPU at SB12	max1617a	PROC 0 Temp	60.00	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	max1617a	PROC 1 Temp	62.00	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	max1617a	PROC 2 Temp	62.00	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	max1617a	PROC 3 Temp	62.00	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	sdco	SDCO Temp	59.83	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	ar0	AR0 Temp	53.83	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	dx0	DX0 Temp	52.49	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	dx1	DX1 Temp	49.83	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	dx2	DX2 Temp	51.16	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	dx3	DX3 Temp	42.50	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	sbbc0	SBBC0 Temp	44.50	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	sbbc1	SBBC1 Temp	61.82	C	6.8	sec	OK
CPU at SB12	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	37.2	sec	OK
CPU at SB12	pcf8591	3.3 VDC	3.34	V	37.2	sec	OK
CPU at SB12	pcf8591	Core 0 Volt	1.65	V	37.2	sec	OK
CPU at SB12	pcf8591	Core 1 Volt	1.65	V	37.2	sec	OK
CPU at SB12	pcf8591	Core 2 Volt	1.63	V	37.2	sec	OK
CPU at SB12	pcf8591	Core 3 Volt	1.64	V	37.2	sec	OK
HPCI at IO12	--	--	--	--	--	OFF	
EXB at EX16	max1617a	AMB Top Temp	32.00	C	38.0	sec	OK
EXB at EX16	max1617	AMB Bot Temp	32.00	C	38.0	sec	OK
EXB at EX16	sbbc	SBBC Temp	42.50	C	38.0	sec	OK
EXB at EX16	axq	AXQ Temp	13.40	C	38.0	sec	OK
EXB at EX16	sdim	SDIM Temp	34.72	C	38.0	sec	OK
EXB at EX16	sdisc	SDISC Temp	40.54	C	38.0	sec	OK
EXB at EX16	sdise	SDISE Temp	36.65	C	38.0	sec	OK
EXB at EX16	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	36.9	sec	OK
EXB at EX16	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	36.9	sec	OK
EXB at EX16	pcf8591	2.5 VDC	2.51	V	36.9	sec	OK
EXB at EX16	pcf8591	3.3 VDC HK	3.30	V	36.9	sec	OK
CPU at SB16	max1617a	PROC 0 Temp	39.00	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	max1617a	PROC 1 Temp	38.00	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	max1617a	PROC 2 Temp	43.00	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	max1617a	PROC 3 Temp	44.00	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	sdco	SDCO Temp	61.16	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	ar0	AR0 Temp	53.83	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	dx0	DX0 Temp	53.83	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	dx1	DX1 Temp	53.16	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	dx2	DX2 Temp	59.16	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	dx3	DX3 Temp	51.16	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	sbbc0	SBBC0 Temp	53.16	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	sbbc1	SBBC1 Temp	57.83	C	7.1	sec	OK
CPU at SB16	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	37.3	sec	OK
CPU at SB16	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	37.3	sec	OK
CPU at SB16	pcf8591	Core 0 Volt	1.62	V	37.3	sec	OK
CPU at SB16	pcf8591	Core 1 Volt	1.63	V	37.3	sec	OK
CPU at SB16	pcf8591	Core 2 Volt	1.61	V	37.3	sec	OK
CPU at SB16	pcf8591	Core 3 Volt	1.62	V	37.3	sec	OK
MCPU at IO16	max1617a	PROC 0 Temp	36.00	C	7.2	sec	OK
MCPU at IO16	max1617a	PROC 1 Temp	36.00	C	7.2	sec	OK
MCPU at IO16	sbbc0	SBBC0 Temp	33.83	C	7.2	sec	OK
MCPU at IO16	sdco	SDCO Temp	60.49	C	7.2	sec	OK
MCPU at IO16	ar0	AR0 Temp	55.83	C	7.2	sec	OK
MCPU at IO16	dx0	DX0 Temp	50.49	C	7.2	sec	OK
MCPU at IO16	dx1	DX1 Temp	53.83	C	7.2	sec	OK
MCPU at IO16	dx2	DX2 Temp	50.49	C	7.2	sec	OK
MCPU at IO16	dx3	DX3 Temp	43.83	C	7.2	sec	OK
MCPU at IO16	pcf8591	1.5 VDC	1.49	V	37.3	sec	OK
MCPU at IO16	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	37.3	sec	OK
MCPU at IO16	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	37.3	sec	OK
MCPU at IO16	pcf8591	Core 0 Volt	1.61	V	37.3	sec	OK

```

MCPU at IO16      pcf8591   Core 1 Volt      1.61   V      37.3 sec OK

FANTRAY  POWER  SPEED  FAN0  FAN1  FAN2  FAN3  FAN4  FAN5  FAN6
-----  -
FT0      ON     HIGH  OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT1      ON     HIGH  OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT2      ON     HIGH  OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT3      ON     HIGH  OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT4      ON     HIGH  OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT6      ON     HIGH  OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT7      ON     HIGH  OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK

POWER  UNIT  AC0  AC1  DC0  DC1  FAN0  FAN1
-----  -
PS0    FAIL  FAIL  FAIL  ON   ON   OK    OK
PS1    FAIL  OK   OK   ON   ON   OK    OK
PS2    OK   OK   OK   ON   ON   OK    OK
PS4    OK   OK   OK   ON   ON   OK    OK
PS5    OK   OK   OK   ON   ON   OK    OK

POWER  VALUE  UNIT  STATUS
-----  -
PS0
  Current0  0.39  A    N/A
  Current1  0.39  A    N/A
  48VDC     0.39  V    N/A
PS1
  Current0  8.36  A    N/A
  Current1  5.97  A    N/A
  48VDC     48.60 V    N/A
PS2
  Current0  8.36  A    N/A
  Current1  6.77  A    N/A
  48VDC     48.80 V    N/A
PS4
  Current0  7.57  A    N/A
  Current1  7.17  A    N/A
  48VDC     50.00 V    N/A
PS5
  Current0  6.77  A    N/A
  Current1  7.17  A    N/A
  48VDC     49.40 V    N/A

```

## 使用例 2 - ドメイン A の温度レポート

この例では、ドメイン A の IO7 および IO16 に MCPU が含まれていると想定しています。

```
sc0:sms-user:> showenvironment -p temps -d a
```

```

LOCATION      DEVICE      SENSOR          VALUE  UNIT  AGE      STATUS
-----      -
MCPU at IO7  max1617a    PROC 1 Temp     71.00  C     8.0 sec  OK
...
MCPU at IO16 max1617a    DX0 Temp        50.49  C     8.0 sec  OK
...

```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

## showenvironment(1M)

- 0 正常に終了しました。
- 1 不正なドメインが使用されました。
- 2 不正なコマンド行オプションが使用されました。
- 3 アクセス権が無効です。
- 4 内部エラーが発生しました。

### 属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

### 関連項目

addtag(1M)

名前	showfailover - システムコントローラ (SC) のフェイルオーバー状態または役割の表示
形式	showfailover [-r] [-v]  showfailover -h
機能説明	showfailover(1M) は、SC フェイルオーバーメカニズムの状態を監視できます。このコマンドでは、フェイルオーバーメカニズムの現在の状態を表示します。-r オプションを指定していない場合は、次の情報が表示されます。  SC Failover Status: <i>state</i>  フェイルオーバーメカニズムは、次の 4 つの状態 (ACTIVATING、ACTIVE、DISABLED、FAILED) のいずれかになります。「拡張機能説明」の節を参照してください。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -h      ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> <b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。 <hr/>
	-r      SC の役割を MAIN、SPARE または UNKNOWN のいずれかで表示します。
	-v      冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。
拡張機能説明	フェイルオーバーメカニズム状態は次のとおりです。  ACTIVATING    フェイルオーバーメカニズムが ACTIVE 状態への移行の準備に入ったことを示します。フェイルオーバーは、すべてのテストにパスし、ファイルの同期が完了した時点でアクティブになります。  ACTIVE        フェイルオーバーメカニズムが使用可能で正常に機能していることを識別します。

**DISABLED** フェイルオーバーメカニズムがフェイルオーバーまたはオペレータの要求によって (たとえば、`setfailover off`) 使用不可になっていることを識別します。

**FAILED** フェイルオーバーメカニズムがフェイルオーバーを妨げる障害を検出したことを識別します。

さらに、外部ネットワークが構成されている場合には、`showfailover` はフェイルオーバープロセスによって監視された各外部ネットワークインタフェースリンクの状態を表示します。表示形式は次のとおりです。

*external community name:* [UP|DOWN]

障害の状態を記述した障害文字列が返されます。それぞれの障害文字列には、対応するコードがあります。次の表は、各コードと対応する障害文字列の定義を示しています。

文字列	説明
None	障害はありません。
S-SC EXT NET	スペア SC の外部ネットワークインタフェースに障害が発生しました。
S-SC CONSOLE BUS	スペア SC のコンソールバスパスに障害が検出されました。
S-SC LOC CLK	スペア SC のローカルクロックに障害が発生しました。
S-SC DISK FULL	スペア SC のシステムがいっぱいです。
S-SC IS DOWN	スペア SC が停止しているか応答していない。このメッセージが、停止している I2 ネットワーク/HASRAM から戻された場合には、スペア SC は動作している可能性があります。スペア SC にログインして確認してください。

文字列	説明
S-SC MEM EXHAUSTED	スペア SC のメモリー/スワップスペースが使い果たされました。
S-SC SMS DAEMON	スペア SC 上で少なくとも 1 つの SMS デーモンが開始または再開できませんでした。
S-SC INCOMPATIBLE SMS VERSION	スペア SC で異なるバージョンの SMS ソフトウェアが動作している。両方の SC で同じバージョンの SMS を実行する必要があります。
I2 NETWORK/ HASRAMS DOWN	SC 間の通信インタフェースが 2 つとも停止している。スペア SC で動作している SMS のバージョンとその状態が、メイン SC 側で認識できません。メイン SC はスペア SC の停止を宣言し、メッセージをログに出力します。ファイル伝達など、依存するサービスは利用できなくなります。

#### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権、プラットフォームオペレータ特権またはプラットフォーム保守特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

#### 使用例

**使用例 1** – フェイルオーバー状態の表示 (問題が発生していない状態)

```
sc0:sms-user:> showfailover
SC Failover Status: ACTIVE
C1: UP
```

**使用例 2** – フェイルオーバー状態の表示 (スベア SC システムのディスクの空きが不足している状態)

```
sc0:sms-user:> showfailover
SC Failover Status: FAILED
S-SC DISK FULL
C1: UP
```

**使用例 3** – SC の役割の表示

```
sc0:sms-user:> showfailover -r
SPARE
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop
Interface Stability	Evolving
Command Output	Unstable

関連項目

setfailover(1M)



名前 showkeyswitch - 仮想キースイッチ位置の表示

形式 showkeyswitch -d *domain\_indicator* [-v ]

showkeyswitch -h

機能説明 showkeyswitch(1M) は、指定したドメインの仮想キースイッチの位置を表示します。各仮想キースイッチの状態はシステムコントローラ (SC) の電源の再投入の間または pcd(1M) による電源供給の物理的電源再投入によって維持されます。

オプション 次のオプションがサポートされています。

-d *domain\_indicator*

次のいずれかを使ってドメインを指定します。

*domain\_id* - ドメインの ID です。有効な *domain\_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

*domain\_tag* - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。

-h ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

-v すべての利用可能コマンド情報を表示します。

#### 拡張機能説明

#### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、指定されたドメインに対するプラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティオプションと管理特権」を参照してください。

## showkeyswitch(1M)

**使用例** | 使用例 1 - ドメイン A のキースイッチ状態の表示

```
sc0:sms-user:> showkeyswitch -d A
Virtual keyswitch position:ON
```

**終了ステータス** | 次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

**属性** | 次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

**関連項目** | addtag(1M)、setkeyswitch(1M)、pcd(1M)

名前	showlogs - メッセージログファイルの表示
形式	<pre>showlogs [-F] [-f filename] [-d domain_indicator] [-p log_type] [-v ] showlogs -h</pre>
機能説明	<p>showlogs(1M) は、プラットフォームまたはドメインログファイルを表示します。デフォルトではプラットフォームメッセージログを表示します。デフォルトを実行するにはプラットフォームグループ特権を持っている必要があります。それ以外の場合はエラーメッセージが表示されます。持っている特権によって、プラットフォームまたは指定したドメインのメッセージログ、console ログ、または syslog を表示することができます。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><b>-F</b> showlogs コマンドの実行時点からログファイルに追加された行だけを表示します。'tail -f' コマンドと同様です。出力は CTRL-C で中断されるまで継続されます。</p> <p><b>-d domain_indicator</b></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><b>domain_id</b> - ドメインの ID です。有効な <b>domain_id</b> は A ~ R で、大文字と小文字は区別されません。</p> <p><b>domain_tag</b> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられるドメイン名です。</p> <p><b>-f filename</b></p> <p>showlogs コマンドの出力を指定したファイルに配置します。</p> <p><b>-h</b> ヘルプ。使用方法を表示します。</p>
注 -	<p>単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p>

`-p log_type`

表示するログとして、プラットフォームメッセージログ (m)、ドメインコンソールログ (c)、ドメイン syslog (s) のいずれかを指定します。

- m      プラットフォームメッセージログを表示するにはプラットフォームグループ特権が必要です。これは showlogs のデフォルトです。
- c      ドメインコンソールログを表示するには `-d` オプションおよびドメインに対するドメイン特権が必要です。
- s      ドメインシスログを表示するにはドメインに対するドメイン特権が必要です。システムコントローラ (SC) からドメイン以外のシステムに転送された syslog は、`/var/opt/SUNWSMS/adm/anonymous` に格納されます。

`-v`      冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

プラットフォームの管理者特権、オペレータ特権または保守特権を持っている場合は、プラットフォームメッセージログファイルを表示することができます。

ドメイン管理者/構成者特権を持っている場合は、特権を持っているドメインのログファイルのみを表示することができます。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

### 使用例

#### 使用例 1 — プラットフォームメッセージログを標準出力に表示

```
sc0:SMS-user:> showlogs
Aug 24 14:30:53 2000 xc8-sc0 hwad[104609]:[0 5751139758216 ERR SCCSR.cc 1347] g
etCrt - Client:104621.14 has locked - 167
Aug 24 14:30:53 2000 xc8-sc0 hwad[104609]:[0 5751170721148 ERR SCCSR.cc 1362] g
etCrt - Client:104621.14 about to unlock - 167.....
```

**使用例 2** — ドメイン A のメッセージログを標準出力に表示

```
sc0:SMS-USER:> showlogs -d A
Aug 15 14:28:05 2000 xc8-sc0 dsmd[106850]-A():[0 8500962546702 INFO Observers.cc 125]
DOMAIN_UP A event has been sent to SYMON, rc = 0.
Aug 15 14:28:05 2000 xc8-sc0 dsmd[106850]-A():[0 8500963756755 INFO DomainMon.cc 183]
Start monitoring domain A every 5 second....
```

**使用例 3** — ドメイン A のメッセージログに新しく追加された行を標準出力に表示

```
sc0:SMS-USER:> showlogs -d A -F
Aug 25 14:28:05 2000 xc8-sc0 dsmd[106850]-A():[0 8500960648900 INFO Observers.c
c 193] DOMAIN_UP A event has been sent to DXS, rc = 0.....
```

**使用例 4** — ドメイン A のコンソールログを標準出力に表示

```
sc0:SMS-USER:> showlogs -d A -p c
** Domain Server Shutting Down - disconnecting
** Domain Server Shutting Down - disconnecting
Sun Fire 15K system, using IOSRAM based Console
OpenBoot 4.0, 2048 MB memory installed, Serial #10000000.
Ethernet address 8:0:20:b8:2d:b1, Host ID:80a3e446.
```

**使用例 5** — ドメイン sms2 の syslog を標準出力に表示

```
sc0:SMS-USER:> showlogs -d sms2 -p s
Sep  7 13:51:49 sms2 agent[6629]:[ID 240586 daemon.alert] syslog
Sep  7 13:51:49 agent {received software termination signal}
Sep  7 13:51:49 sms2 agent[6629]:[ID 985882 daemon.alert] syslog
Sep  7 13:51:49 agent *** terminating execution ***
Sep  7 13:51:50 sms2 platform[22481]:[ID 345917 daemon.alert] syslog
Sep  7 13:51:50 platform *** terminating execution ***
Sep  7 14:49:07 sms2 platform[4309]:[ID 745356 daemon.alert] syslog
Sep  7 14:49:07 platform general parsing error
Sep  7 14:49:07 sms2 platform[4309]:[ID 334248 daemon.alert] syslog
Sep  7 14:49:07 platform file://localhost/scmonitor-d.x;flags=ro
Sep  7 14:49:07 sms2 platform[4309]:[ID 449452 daemon.alert] syslog
Sep  7 14:49:07 platform couldn't load file ...
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## ファイル

次のファイルがサポート使用されます。

`/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages`

プラットフォームメッセージファイル

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/messages`

ドメインメッセージファイル

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/console`

ドメインコンソールファイル

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/syslog`

ドメイン syslog ファイル

## 属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

`tail(1)`

名前 showobpparams - ドメインの OpenBoot PROM 起動パラメタの表示

形式 showobpparams -d *domain\_indicator* [-v ]

showobpparams -h

機能説明 showobpparams(1M) を使用すると、ドメイン管理者は、setkeyswitch(1M) によって OpenBoot PROM に渡される仮想 NVRAM および REBOOT パラメタを表示することができます。-d オプションと *domain\_id* または *domain\_tag* が必要です。

オプション 次のオプションがサポートされています。

-d *domain\_indicator*

次のいずれかを使ってドメインを指定します。

*domain\_id* - ドメインの ID です。有効な *domain\_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

*domain\_tag* - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。

-h ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

-v すべての利用可能コマンド情報を表示します。

#### 拡張機能説明

#### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、指定したドメインに対するドメイン管理者または構成者の特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

使用例 | 使用例 1 – ドメイン A の OpenBoot PROM パラメタの表示

```
sc0:sms-user:>showobpparams -d a
auto-boot?=false
diag-switch?=true
fcode-debug?=false
use-nvramrc?=false
security-mode=none
```

終了ステータス | 次の終了値が返されます。

0        正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性 | 次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目 | addtag(1M)、setkeyswitch(1M)、setobpparams(1M)



名前	showplatform - ボードの使用可能構成要素リスト、各ドメインの状態、および Capacity on Demand (COD) 情報の表示
形式	showplatform [-d <i>domain_indicator</i> ] [-p <i>report</i> ] [-v ] showplatform -h
機能説明	showplatform(1M) コマンドは、使用可能構成要素リスト、ドメインの状態、およびドメインの Ethernet アドレスを表示します。COD 情報には、ヘッドルームの数、インストール済みの COD RTU (right-to-use) ライセンス数、およびドメインに予約されている COD RTU ライセンス数が含まれます。 <i>domain_id</i> または <i>domain_tag</i> を指定すると、そのドメインに関する情報だけが表示されます。 <i>domain_indicator</i> と <i>-p</i> オプションが指定されていない場合は、特権を持つすべてのドメインの使用可能構成要素リスト、Ethernet アドレス、および COD 情報が表示されます。
オプション	次のオプションがサポートされています。  <i>-d domain_indicator</i>  次のいずれかを使ってドメインを指定します。  <i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。  <i>domain_tag</i> - <i>addtag (1M)</i> を使用してドメインに割り当てられるドメイン名です。  <i>-h</i> ヘルプ。使用方法を表示します。
注 -	単一で使用します。 <i>-h</i> に追加して指定されたオプションは無視されません。
	<i>-p report</i>  特定のレポートを表示します。  有効な引数は次のとおりです。  <i>domains</i> リスト出力はドメインの状態によってグループ化されます。

## 拡張機能説明

available	リスト出力はドメインの使用可能構成要素リストによってグループ化されます。
ethernet	リスト出力はドメインの <b>Ethernet</b> アドレスによってグループ化されます。
cod	<b>COD</b> 情報が表示されます。
-v	冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。
	ドメインの状態は次のいずれかになります。
Unknown	ドメイン状態が判別できません。 <b>Ethernet</b> アドレスの場合には、当該ドメインの <b>idprom</b> イメージファイルが存在しないことを示します。購入先にご連絡ください。
Powered Off	ドメインの電源が切断されています。
Keyswitch Standby	ドメインのキースイッチが <b>STANDBY</b> 位置になっています。
Running Domain POST	ドメイン電源投入時自己診断が実行中です。
Loading OBP	ドメインの <b>OpenBoot PROM</b> がロードされています。
Booting OBP	ドメインの <b>OpenBoot PROM</b> が起動中です。
Running OBP	ドメインの <b>OpenBoot PROM</b> が実行中です。
In OBP Callback	ドメインが停止され <b>OpenBoot PROM</b> に戻されています。
Loading Solaris	<b>OpenBoot PROM</b> が <b>Solaris</b> ソフトウェアをロードしています。
Booting Solaris	ドメインが <b>Solaris</b> ソフトウェアを起動しています。

Domain Exited OBP	ドメイン OpenBoot PROM が終了しました。
OBP Failed	ドメイン OpenBoot PROM が失敗しました。
OBP in sync Callback to OS	OpenBoot PROM が Solaris ソフトウェアに同期コールバックをしています。
Exited OBP	OpenBoot PROM が終了しました。
In OBP Error Reset	ドメインがエラー reset 状態のために OpenBoot PROM になっています。
Solaris Halted, in OBP	Solaris ソフトウェアが停止し、ドメインが OpenBoot PROM になっています。
OBP Debugging	OpenBoot PROM がデバッガとして使用されています。
Environmental Domain Halt	環境に起因する緊急事態によってドメインがシャットダウンしました。
Booting Solaris Failed	OpenBoot PROM を実行しましたが、起動に失敗しました。
Loading Solaris Failed	OpenBoot PROM を実行しましたが、ロードに失敗しました。
Running Solaris	Solaris ソフトウェアがドメイン上で実行中です。
Solaris Quiesce In-progress	Solaris ソフトウェアが休止されています。
Solaris Quiesced	Solaris ソフトウェアが休止しました。

Solaris Resume In-progress	Solaris ソフトウェアを再開していません。
Solaris Panic	Solaris ソフトウェアがパニックになっています。パニックフローが開始されました。
Solaris Panic Debug	Solaris ソフトウェアがパニックになり、デバッガモードに入っています。
Solaris Panic Continue	デバッガモードを終了しパニックフローが継続しています。
Solaris Panic Dump	パニックダンプが開始されました。
Solaris Halt	Solaris ソフトウェアが停止していません。
Solaris Panic Exit	Solaris ソフトウェアがパニックにより終了しました。
Envirmental Emergency	環境的な緊急事態が検出されました。
Debugging Solaris	Solaris ソフトウェアをデバッグしています。ハング状態ではありません。
Solaris Exited	Solaris ソフトウェアが終了しました。
Domain Down	ドメインがダウンしており、キースイッチが setkeyswitch によって ON、DIAG、または SECURE の位置に設定されています。
In Recovery	ドメインで自動システム回復が実行中です。

#### 必要なグループ特権

プラットフォームの管理者特権、オペレータ特権または保守特権を持っている場合は、showplatform ではすべてのドメインの使用可能構成要素リストおよびボード状態情報を表示します。それ以外の場合は、ドメイン管理者特権またはドメイン構成者特権を持つドメインの情報のみが表示されます。

## 使用例

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

---

**注 -** 次の例には、Ethernet アドレスが UNKNOWN 状態のドメインが含まれています。この状態は、そのドメインに idprom ファイルが存在しないことを示します。購入先にご連絡ください。

---

**使用例 1 - Sun Fire 15K システム上のすべてのドメインの使用可能構成要素リスト、ドメイン状態、およびCOD情報の表示**

次の出力は、プラットフォーム特権を持っている場合の例です。

```
sc0:sms-user:> showplatform
```

```
COD:
====
Chassis HostID : 5014936C37048
PROC RTUs installed : 8
PROC Headroom Quantity : 0
PROC RTUs reserved for domain A : 4
PROC RTUs reserved for domain B : 0
PROC RTUs reserved for domain C : 0
PROC RTUs reserved for domain D : 0
PROC RTUs reserved for domain E : 0
PROC RTUs reserved for domain F : 0
PROC RTUs reserved for domain G : 0
PROC RTUs reserved for domain H : 0
PROC RTUs reserved for domain I : 0
PROC RTUs reserved for domain J : 0
PROC RTUs reserved for domain K : 0
PROC RTUs reserved for domain L : 0
PROC RTUs reserved for domain M : 0
PROC RTUs reserved for domain N : 0
PROC RTUs reserved for domain O : 0
PROC RTUs reserved for domain P : 0
PROC RTUs reserved for domain Q : 0
PROC RTUs reserved for domain R : 0
```

```
Available Component List for Domains:
```

```
=====
Available for domain newA:
SB0 SB1 SB2 SB7
IO1 IO3 IO6
Available for domain engB:
No System boards
No IO boards
Available for domain domainC:
No System boards
IO0 IO1 IO2 IO3 IO4
Available for domain engl:
No System boards
No IO boards
Available for domain E:
No System boards
No IO boards
Available for domain domainF:
No System boards
No IO boards
Available for domain dmnG:
No System boards
No IO boards
Available for domain domain H:
No System boards
No IO boards
Available for domain I:
No System boards
No IO boards
Available for domain dmnJ:
No System boards
No IO boards
Available for domain K:
No System boards
No IO boards
Available for domain L:
No System boards
No IO boards
Available for domain M:
```

```

        No System boards
        No IO boards
Available for domain N:
        No System boards
        No IO boards
Available for domain O:
        No System boards
        No IO boards
Available for domain P:
        No System boards
        No IO boards
Available for domain Q:
        No System boards
        No IO boards
Available for domain dmnR:
        No System boards
        No IO boards

```

## Domain Ethernet Addresses:

```

=====
Domain ID   Domain Tag   Ethernet Address
A           newA         8:0:20:b8:79:e4
B           engB         8:0:20:b4:30:8c
C           domainC     8:0:20:b7:30:b0
D           -           8:0:20:b8:2d:b0
E           eng1        8:0:20:f1:b7:0
F           domainF     8:0:20:be:f8:a4
G           dmnG        8:0:20:b8:29:c8
H           -           8:0:20:f3:5f:14
I           -           8:0:20:be:f5:d0
J           dmnJ        UNKNOWN
K           -           8:0:20:f1:ae:88
L           -           8:0:20:b7:5d:30
M           -           8:0:20:f1:b8:8
N           -           8:0:20:f3:5f:74
O           -           8:0:20:f1:b8:8
P           -           8:0:20:b8:58:64
Q           -           8:0:20:f1:b7:ec
R           dmnR        8:0:20:f1:b7:10

```

## Domain Configurations:

```

=====
DomainID   Domain Tag   Solaris Nodename   Domain Status
A           newA         -                   Powered Off
B           engB         sun15-b             Keyswitch Standby
C           domainC     sun15-c             Running OBP
D           -           sun15-d             Running Solaris
E           eng1        sun15-e             Running Solaris
F           domainF     sun15-f             Running Solaris
G           dmnG        sun15-g             Running Solaris
H           -           sun15-g             Solaris Quiesced
I           -           -                   Powered Off
J           dmnJ        -                   Powered Off
K           -           sun15-k             Booting Solaris
L           -           -                   Powered Off
M           -           -                   Powered Off
N           -           sun15-n             Keyswitch Standby
O           -           -                   Powered Off
P           -           sun15-p             Running Solaris
Q           -           sun15-q             Running Solaris
R           dnmR        sun15-r             Running Solaris

```

## 使用例 2 - ドメイン engB の使用可能構成要素リストおよびドメイン状態の表示

```
sc0:sms-user:> showplatform -d engB

COD:
====
PROC RTUs reserved for domain B : 0

Available Component List for Domains:
=====
Available for domain engB:
          SB4 SB5 SB6
          IO4 IO5

Domain Ethernet Addresses:
=====
Domain ID   Domain Tag   Ethernet Address
B           engB        8:0:20:b4:30:8c
```

### Domain Configurations:

```
=====
DomainID Domain Tag  Solaris Nodename  Domain Status
B        engB    sun15-b          Keyswitch Standby
```

## 使用例 3 - 管理者特権を持つドメインの情報の表示

次の例ではドメイン管理者特権または構成者特権を持つすべてのドメイン、この場合はドメイン engB、C、および E の使用可能構成要素リストおよび状態情報を表示します。

```
sc0:sms-user:> showplatform

COD:
====
PROC RTUs reserved for domain B : 0
PROC RTUs reserved for domain C : 0
PROC RTUs reserved for domain E : 0

Available Component List for Domains:
=====
Available for domain engB:
          SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 SB6
          IO1 IO2 IO3 IO4 IO5 IO6 IO7

Available for domain C:
          SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 SB6
          IO1 IO2 IO3 IO4 IO5 IO6 IO7

Available for domain E:
          SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 SB6
          IO1 IO2 IO3 IO4 IO5 IO6 IO7
```



## Domain Ethernet Addresses:

```

=====
Domain ID   Domain Tag   Ethernet Address
B           engB        8:0:20:b4:30:8c
C           domainC    8:0:20:b7:30:b0
E           eng1       8:0:20:f1:b7:0

```

## Domain Configurations:

```

=====
DomainID    Domain Tag   Solaris Nodename   Domain Status
B           engB        sun15-b           Keyswitch Standby
C           domainC    sun15-c           Running OBP
E           eng1       sun15-e           Running Solaris

```

## 使用例 4 - ドメイン engB の使用可能構成要素リストの表示

```
sc0:sms-user:> showplatform -d engB -p available
```

## Available Component List for Domains:

```

=====
Available for domain engB:
          SB4 SB5 SB6
          IO4 IO5

```

## 使用例 5 - ドメイン engB のドメイン状態の表示

```
sc0:sms-user:> showplatform -d engB -p domains
```

## Domain Configurations:

```

=====
DomainID    Domain Tag   Solaris Nodename   Domain Status
B           engB        sun15-b           Keyswitch Standby

```

## 使用例 6 - ドメイン engB に予約された COD RTU (right-to-use) ライセンスの表示

```
sc0:sms-user:> showplatform -d engB -p cod
```

```

COD:
====
PROC RTUs reserved for domain B : 0

```

## 使用例 7 - すべての COD 情報の表示

次の出力は、プラットフォーム特権を持っている場合の例です。Chassis HostID が UNKNOWN になる場合、Chassis HostID の値を正しく表示するには、センタープレーンサポートボードに電源を投入してから showplatform

-p cod コマンドを再実行します。センタープレーンサポートボードに電源を入れた後、1分ほど待ってから showplatform を実行すると、出力に Chassis HostID の情報が表示されます。

```
sc0:sms-user:> showplatform -p cod
COD:
====
Chassis HostID : 5014936C37048
PROC RTUs installed : 8
PROC Headroom Quantity : 0
PROC RTUs reserved for domain A : 4
PROC RTUs reserved for domain B : 0
PROC RTUs reserved for domain C : 0
PROC RTUs reserved for domain D : 0
PROC RTUs reserved for domain E : 0
PROC RTUs reserved for domain F : 0
PROC RTUs reserved for domain G : 0
PROC RTUs reserved for domain H : 0
PROC RTUs reserved for domain I : 0
PROC RTUs reserved for domain J : 0
PROC RTUs reserved for domain K : 0
PROC RTUs reserved for domain L : 0
PROC RTUs reserved for domain M : 0
PROC RTUs reserved for domain N : 0
PROC RTUs reserved for domain O : 0
PROC RTUs reserved for domain P : 0
PROC RTUs reserved for domain Q : 0
PROC RTUs reserved for domain R : 0
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 1 不正なドメインが指定されました。
- 2 不正なコマンド行オプションが指定されました。
- 3 不正な数のドメインが指定されました。
- 4 ユーザーが有効な特権を持っていません。
- 5 プラットフォーム構成デーモン (pcd(1M)) との通信中にエラーが発生しました。
- 6 ハードウェアアクセスデーモン (hwad(1M)) との通信中にエラーが発生しました。
- 7 タスク管理デーモン (tmd(1M)) との通信中にエラーが発生しました。
- 8 内部エラーが発生しました。

9 Capacity on Demand デーモン (codd(1M)) との通信中にエラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

addcodlicense(1M)、addtag(1M)、hwad(1M)、pcd(1M)、  
setupplatform(1M)、tmd(1M)

名前	showxirstate - プロセッサにリセットパルスを送信後、CPU ダンプ情報を表示
形式	<pre>showxirstate -d <i>domain_indicator</i> [-v]</pre> <pre>showxirstate -f <i>filename</i> [-v]</pre> <pre>showxirstate -h</pre>
機能説明	<p>showxirstate(1M) は、リセットパルスを送信後にCPU ダンプ情報を表示します。この保存状態ダンプは、異常なドメイン動作の原因を分析するために使用できます。showxirstate は、ドメイン内のすべてのアクティブプロセッサのリストを作成し、各プロセッサの保存状態情報を取得します。</p> <p><i>domain_indicator</i> または <i>filename</i> が指定されていない場合、showxirstate はエラーを返します。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><b>-d <i>domain_indicator</i></b></p> <p>次のいずれかを使ってドメインを指定します。</p> <p><i>domain_id</i> - ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><i>domain_tag</i> - addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p><b>-f <i>filename</i></b></p> <p>以前に生成された <i>xir_dump</i> を含むファイルの名前。デフォルトは <code>/var/opt/SUNWSMS/adm/<i>domain_id</i>/dump</code> で、変更することはできません。</p> <p><b>-h</b> ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p><b>注 -</b> 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/> <p><b>-v</b> 冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。</p>

## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、指定したドメインに対するドメイン管理者特権が必要です。xir\_dump ファイルの読み取りには特別な特権は必要ありません。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第2章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

## 使用例 1 – 1つのCPUを持つドメインAのダンプ情報の表示

```
sc0:SMS-user:> showxirstate -dA
```

```
Location:SB4/P0
```

```
XIR Magic XIR Version 00415645 Buglevel 00000000
```

```
XIR Save Total Size 0x58495253 bytes
```

```
ver : 00000000.00000000
```

```
tba : 00000000.00000000
```

```
pil : 0x0
```

```
y : 00000000.00000000
```

```
afsr : 00000000.00000000 afar : 00000000.00000000
```

```
pcontext: 00000000.00000000 scontext: 00000000.00000000
```

```
dcu : 00000000.00000000
```

```
dcr : 00000000.00000000
```

```
pcr : 00000000.00000000
```

```
gsr : 00000000.00000000
```

```
softint : 0x0000
```

```
pa_watch: 00000000.00000000
```

```
va_watch: 00000000.00000000
```

```
instbp : 00000000.00000000
```

```
tick: 00000000.00000000 tick_cmpr: 00000000.00000000
```

```
stick: 00000000.00000000 stick_cmpr: 00000000.00000000
```

```
tl: 0
```

```
tt tstate tpc tnpc
```

```
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
```

```
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
```

```
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
```

```
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
```

```
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
```

```
Globals:
```

```
R Normal Alternate Interrupt MMU
```

```
0 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.000000
```

showxirstate(1M)

```
000
1 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
2 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
3 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
4 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
5 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
6 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
7 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
```

```
wstate: 0x00
cansave: 0 cleanwin: 0
canrestore: 0 otherwin: 0
```

Register Windows:

Window 0

```
R Locals          Ins
0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000
```

Window 1

```
R Locals          Ins
0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000
```

Window 2

```
R Locals          Ins
0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
```

```

2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000

```

## Window 3

```
R Locals          Ins
```

```

0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000

```

## Window 4

```
R Locals          Ins
```

```

0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000

```

## Window 5

```
R Locals          Ins
```

```

0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000

```

## Window 6

```
R Locals          Ins
```

```

0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000

```

# showxirstate(1M)

```
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000
```

Window 7

R Locals                    Ins

```
0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000
```

```
nest_save_ptr: 00000000
XIR Nest Version 00000000 Buglevel 00000000
XIR Nest nest_count 0 save_block 88
```

```
tick: 00000000.00000000
stick: 00000000.00000000
```

t1:73

tt     tstate            tpc                    tnpc

```
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0        正常に終了しました。

0 以外   エラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

reset(1M)



名前	smsbackup – SMS 環境のバックアップ
形式	smsbackup <i>directory_name</i>  smsbackup -h
機能説明	<p>smsbackup(1M) は、SMS の運用環境を維持するファイルの cpio(1) アーカイブを作成します。完全かつ正確なバックアップを作成するには、smsbackup を実行する前に SMS を停止してください。SMS を手動で開始および停止する方法については、『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』を参照してください。</p> <p>メイン SMS 環境が、たとえば、ドメインのシャットダウンなどで変更されたときには、smsbackup をもう一度実行してシステムコントローラ用の現在のバックアップファイルを維持する必要があります。</p> <p>バックアップファイルの名前は sms_backup.XX.cpio です。XX はバックアップが行われたアクティブなバージョンを示します。</p> <p>SMS バックアップファイルを smsrestore(1M) コマンドを使用して復元します。</p> <p>エラーが発生した場合、smsbackup は /var/sadm/system/logs が存在する場合には /var/sadm/system/logs/smsbackup に、存在しない場合には /var/tmp にエラーメッセージを書き込みます。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h      ヘルプ。使用方法を表示します。</p>
<hr/> <p><b>注 -</b>    単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>	
オペランド	<p>次のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>directory_name</i>    バックアップファイルが作成されるディレクトリの名前。このファイルは、ユーザーが読み取り、書き込み特権を持っているシステム、接続されているネットワークまたはテープデバイスのどのディレクトリにでも配置できます。</p>

*directory\_name* が指定されていない場合は、バックアップファイルは /var/tmp 内に作成されます。*directory\_name* は、ファイルの絶対パス名を必要としません。

指定された *directory\_name* は UFS ファイルシステムとしてマウントされる必要があります。TMPFS ファイルシステムを /tmp のように指定すると、smsbackup が失敗します。*directory\_name* が UFS ファイルシステムとしてマウントされているかどうかはわからない場合は、次のように入力します。

```
/usr/bin/df -F ufs directory_name
```

UFS ファイルシステムからディレクトリ情報が返されます。その他のタイプのファイルシステムでは、警告が返されません。

## 拡張機能説明

### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、スーパーユーザー特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

### 使用例

**使用例 1** — /var/opt/SUNWSMS/bkup への SMS のバックアップ

```
sc0:sms-user:> smsbackup /var/opt/SUNWSMS/bkup
```

**使用例 2** — テープデバイス 0 への SMS のバックアップ

```
sc0:sms-user:> smsbackup /dev/rmt/0
```

**使用例 3** — TMPFS システムへの SMS のバックアップ

```
sc0:sms-user:> smsbackup /tmp
```

```
ERROR:smsbackup fails to backup to /tmp, a TMPFS
file system.Please specify a directory that is
mounted on a UFS filesystem.
```

```
ABORT:
```

### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

```
0      正常に終了しました。
```

	0 以外 エラーが発生しました。				
ファイル	このコマンドでは次のファイルが使用されます。  /var/sadm/system/logs/smsbackup smsbackup ログファイル				
属性	次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。				
	<table border="1"><thead><tr><th>属性タイプ</th><th>属性値</th></tr></thead><tbody><tr><td>Availability</td><td>SUNWSMSop</td></tr></tbody></table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	smsrestore(1M)				

名前	smsconfig – SMS 環境の構成
形式	<pre>smsconfig -m smsconfig -m I1 [ domain_id   sc   netmask ] smsconfig -m I2 [ sc0   sc1   netmask ] smsconfig -m L smsconfig -g smsconfig -a -u username -G platform_role platform smsconfig -r -u username -G platform_role platform smsconfig -a -u username -G domain_role domain_id smsconfig -r -u username -G domain_role domain_id smsconfig -l domain_id smsconfig -l platform smsconfig -s security_option smsconfig -v smsconfig -h</pre>
機能説明	<p>smsconfig(1M) は、SMS 環境の 3 つの領域、すなわちネットワーク管理、セキュリティ、およびユーザーグループ特権を構成します。</p> <p>smsconfig は、MAN デーモン (mand(1M)) で使用されるホスト名および IP アドレス設定を構成および変更します。smsconfig はネットワークごとに、ネットワーク内のインタフェース指定を 1 つまたは複数、個別に設定できます。デフォルトでは、smsconfig は内部ネットワークと外部コミュニティーネットワークの両方の構成を一度に実行します。</p> <hr/> <p>注 – MAN ネットワークを構成したり、構成を変更した場合、新しい構成を反映するにはシステムコントローラ (SC) を再起動する必要があります。</p> <hr/>

個々のネットワークを構成するには、コマンド行に *net\_id* を付加します。管理ネットワーク *net\_id* は、I1、I2、および L が指定されます。エンタープライズネットワーク内の単一の *interface* を目的の *interface* と *net\_id* の両方を指定することによって構成します。一方の SC で `smsconfig -m` を使ってネットワーク構成に変更を加えた場合には、もう一方の SC にも必ず同じ変更を加えてください。ネットワーク構成が、他方の SC に自動的に反映されることはありません。

セキュリティ上の理由によって、SMS は起動時に適切な `ndd` ユーティリティ変数を設定し、転送、ブロードキャスト、およびマルチキャストを無効化します。

Sunfire 15K/12K システムでは、セキュリティツールキットによる SC の堅牢化の一環として `smsconfig -s ssh` を使用し、SC のセキュリティをいっそう高めることができます。SC のセキュリティを強固にするには、次に挙げる Sun BluePrints Online の記事に記載されている手順に従ってください。これらの記事は、<http://www.sun.com/security/blueprints> で閲覧できます。

- Securing Sun Fire 12K and 15K System Controller: Updated for SMS 1.3
- Securing Sun Fire 12K and 15K Domains: Updated for SMS 1.3

`smsconfig` は、SMS によって使用される UNIX グループを構成してユーザー特権を記述します。SMS では、各 SC にローカルにインストールされたデフォルトの UNIX グループセットを使用します。`smsconfig` を使用すると、`-g` オプションを使用してこれらのグループをカスタマイズできます。詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』を参照してください。

`smsconfig` は、ユーザーを SMS グループに追加してドメインおよびプラットフォーム管理特権を構成します。`smsconfig` は、アクセス制御リスト (ACL) 属性を SMS ディレクトリに設定します。

---

注 - `/etc/group` SMS ファイルエントリを手動で編集してユーザーを追加または削除しないでください。ユーザーアクセスに障害が発生します。

---

## オプション

次のオプションがサポートされています。

- a ユーザーを SMS グループに追加して、ドメインまたはプラットフォームディレクトリへの読み取り、書き込みおよび実行アクセス権を指定します。有効な *username*、SMS グループおよび該当する場合は *domain\_id* を指定する必要があります。
- G SMS グループを指定します。大文字と小文字を区別する必要はありません。
- g SMS によって使用される UNIX グループを構成してユーザー特権を記述します。
- h ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されます。

---

- l 指定した SMS ドメインまたは platform へのアクセス権を持つすべてのユーザーをリストします。
- m すべてのエンタープライズネットワークおよび外部コミュニティ用のすべてのインタフェースを構成します。
- m I1 エンタープライズネットワーク I1 用のすべてのインタフェースを構成します。ネットワーク指定は大文字と小文字を区別しません。MAN *hostname* を NONE に指定すれば、特定のドメインを I1 ネットワーク構成から除外できます。この方法による除外は I1 ネットワークのみで有効です。
- m I2 エンタープライズネットワーク I2 用のすべてのインタフェースを構成します。ネットワーク指定は大文字と小文字を区別しません。
- m L 外部コミュニティネットワーク用のすべてのインタフェースを構成します。ネットワーク指定は大文字と小文字を区別しません。

- `-r` ユーザーを SMS グループから削除して、ドメインまたはプラットフォームディレクトリへの読み取り、書き込みおよび実行アクセス権を取り消します。有効な *username*、SMS グループおよび該当する場合は *domain\_id* を指定する必要があります。
- `-s security_option` セキュリティー機能を使用するように SMS ソフトウェアを構成するためのオプションです。構成するセキュリティ機能は *security\_option* で指定します。
- security\_option* に設定できる値は次のとおりです。
- `ssh` 遠隔 SC との通信に `rsh` に基づくデフォルトのコマンドを使用せず、代わりに `ssh` ベースのコマンドを使用するように SMS に指示します。`ssh` ベースのコマンドは、すべて `/usr/bin` 内にあります。これらのコマンドが `/usr/bin` 内で見つからないと、`smsconfig` は正常に終了せず、ログにエラーが出力されます。
- 注意事項:** Secure Shell (`ssh`) を使用するように SMS ソフトウェアを構成する前に、両方の SC で `ssh` を適切に構成してください。`ssh` が正しく構成されていないと、`smsconfig` はエラーを画面とログに出力して終了します。詳細は、`ssh` と `scp` のマニュアルページを参照してください。
- SMS ソフトウェアのデフォルトの遠隔シェルは `rsh(1)` です。Secure Shell が正しく構成されていない場合、SMS はデフォルトの遠隔シェルの使用を試みます。したがって、`smsconfig -s ssh` による SMS ソフトウェアの構成が成功するまで、`rsh` を有効なまま維持することが強く推奨されます。Secure Shell を正しく構成すると、SC のセキュリティを強化して `rsh` を無効化できます。詳細については、Sun BluePrints Online の記事と

『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』のセキュリティー関連の節を参照してください。

rsh rsh ベースのコマンドを使用するように SMS の構成を戻します。

-u *username* ユーザーのログイン名を示します。

-v 遠隔シェルの構成を表示します。

**オペランド** 次のオペランドがサポートされています。

*domain\_id* ドメインの ID です。有効な *domain\_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

*domain\_role* *domain\_role* の有効値は次のとおりです。

admn

rcfg

*platform* Sun Fire 15K/12K プラットフォームおよびプラットフォーム専用ディレクトリを指定します。

*platform\_role* *platform\_role* の有効値は次のとおりです。

admn

oper

svc

SC0, SC1 Sun Fire 15K/12K SC 用のインタフェース指定。インタフェース指定は大文字と小文字を区別しません。

*netmask* IP アドレスのネットワーク部分をマスキング (ブロック) して、アドレスのホストコンピュータ部分だけを利用するための 32 ビット長の数値。ネットマスクは通常、10 進数の数値として表されます。たとえば、255.255.255.0 はクラス C サブネットの一般的なネットマスクです。*netmask* の値の大文字と小文字は区別されません。



## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、スーパーユーザー特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

## 使用例 1 – MAN ネットワークの設定

MAN ネットワーク内のすべてのインタフェースを構成する必要があります。この例では、IPv4 を使用した 3 つすべてのエンタープライズネットワークを設定するために必要なすべてのプロンプトを示します。

---

**注意** – 以下に記載の IP アドレスは、一例にすぎません。使用するネットワークで有効な IP アドレスについては、『Sun Fire 15K/12K システムサイト計画の手引き』を参照してください。特定の状況のもとでは、無効なネットワーク IP アドレスを使用すると、システムが起動できなくなる場合があります。

---

IPv6 ネットワークの例は若干異なり、netmasks と /etc/ipnodes のプロンプトが表示されず、/etc/hosts の部分も変更されています。

フェイルオーバー、hme0、および eri1 での外部ネットワークの IP アドレスは、各 SC で一意である必要があります。浮動 IP アドレスは、各 SC で同じです。

デフォルトでは、I1 ネットワーク設定はそのネットワーク用に入力されたベースネットワークアドレスから派生されます。MAN *hostname* を NONE に指定すれば、特定のドメインを I1 ネットワーク構成から除外できます。使用例 4 を参照してください。詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』を参照してください。

MAN ネットワークがすでに設定されている場合は、必ず SC を再起動してください。

```
sc0:# smsconfig -m
The platform name identifies the entire host machine to the SMS software.
The platform name occupies a different name space than domain names
(hostnames of bootable systems).
```

What is the name of the platform this SMS will service? **sun15**

Configuring the External Network for Community C1

Do you want to define this Community? [y,n] **y**

Two network interfaces controllers (NICs) are required for IPMP network failover.

Enter NICs associated with community C1 [hme0 eri1]: **[Return]**

Enter hostname for hme0 [sun15-sc0-hme0]: **[Return]**

Enter IP address for sun15-sc0-hme0: **10.1.1.52**

Enter hostname for eri1 [sun15-sc0-eri1]: **[Return]**

Enter IP address for sun15-sc0-eri1: **10.1.1.53**

The Logical/Floating IP hostname and address will "float" over to whichever system controller (SC0 or SC1) is acting as the main SC.

Enter Logical/Floating IP hostname for community C1 [sun15-sc-C1]: **[Return]**

Enter IP address for sun15-sc-C1: **10.1.1.50**

Enter Netmask for community C1: **255.255.255.0**

Enter hostname for community C1 failover address [sun15-sc0-C1-failover]: **[Return]**

Enter IP address for sun15-sc0-C1-failover: **10.1.1.51**

Hostname	IP Address (platform=sun15)
-----	-----
sun15-sc-C1	10.1.1.50
sun15-sc0-C1-failover	10.1.1.51
sun15-sc0-hme0	10.1.1.52
sun15-sc0-eri1	10.1.1.53

Do you want to:

- 1) Accept these network settings.
- 2) Edit these network settings.
- 3) Delete these network settings and go onto the next community? [y,n] **y**

Configuring the External Network for Community C2

Do you want to define this Community? [y,n] **n**

Configuring I1 Management Network - 'I1' is the Domain to SC MAN.

MAN I1 Network Identification

Enter the IP network number (base address) for the I1 network: **10.2.1.0**

Enter the netmask for the I1 MAN network [ 255.255.255.224 ]: **[Return]**

Hostname	IP Address	platform=sun15)
-----	-----	
netmask-i1	255.255.255.224	
sun15-sc-i1	10.2.1.1	
sun15-a	10.2.1.2	
sun15-b	10.2.1.3	
sun15-c	10.2.1.4	
sun15-d	10.2.1.5	
sun15-e	10.2.1.6	
sun15-f	10.2.1.7	
sun15-g	10.2.1.8	
sun15-h	10.2.1.9	
sun15-i	10.2.1.10	
sun15-j	10.2.1.11	
sun15-k	10.2.1.12	
sun15-l	10.2.1.13	
sun15-m	10.2.1.14	

```

sun15-n      10.2.1.15
sun15-o      10.2.1.16
sun15-p      10.2.1.17
sun15-q      10.2.1.18
sun15-r      10.2.1.19

```

Do you want to accept these network settings? [y,n] **y**

Configuring I2 Management Network - 'I2' is for SC to SC MAN.

MAN I2 Network Identification

Enter the IP network number (base address) for the I2 network: **10.3.1.0**

Enter the netmask for the I2 MAN network [ 255.255.255.252 ]: **[Return]**

```

Hostname      IP Address(platform=sun15)
-----
netmask-i2    255.255.255.252
sun15-sc0-i2  10.3.1.1
sun15-sc1-i2  10.3.1.2

```

Do you want to accept these settings? [y,n] **y**

Creating /.rhosts to facilitate file propagation ... done.

MAN Network configuration modified!

Changes will take effect on next reboot.

The following changes are about to be applied to the "/etc/hosts" hosts file.

```

-----
ADD: 10.2.1.2   sun15-a #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.3   sun15-b #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.4   sun15-c #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.5   sun15-d #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.6   sun15-e #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.7   sun15-f #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.8   sun15-g #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.9   sun15-h #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.10  sun15-i #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.11  sun15-j #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.12  sun15-k #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.13  sun15-l #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.14  sun15-m #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.15  sun15-n #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.16  sun15-o #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.17  sun15-p #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.18  sun15-q #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.19  sun15-r #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.1   sun15-sc-i1 #smsconfig-entry#
ADD: 10.1.1.50  sun15-sc-C1 #smsconfig-entry#
ADD: 10.1.1.51  sun15-sc0-C1-failover #smsconfig-entry#
ADD: 10.1.1.52  sun15-sc0-hme0 #smsconfig-entry#
ADD: 10.1.1.53  sun15-sc0-eri1 #smsconfig-entry#
ADD: 10.3.1.1   sun15-sc0-i2 #smsconfig-entry#
ADD: 10.3.1.2   sun15-sc1-i2 #smsconfig-entry#
-----

```

Update the hosts file, "/etc/hosts", with these changes? [y,n] **y**

Hosts file "/etc/hosts" has been updated.

The following information is about to be applied to the "/etc/netmasks" file.

```

-----
ADD network: 10.1.1.50, mask: 255.255.255.0
ADD network: 10.2.1.0, mask: 255.255.255.224
ADD network: 10.3.1.0, mask: 255.255.255.252
-----

```

Update the netmasks file, "/etc/netmasks", with these changes? [y,n] **y**

```
Netmasks file "/etc/netmasks" has been updated.
smsconfig complete. Log file is /var/sadm/system/logs/smsconfig
sc#
```

## 使用例 2 - I2 ネットワークの構成

```
sc0:# smsconfig -m I2
```

```
Configuring I2 Management Network - 'I2' is for SC to SC MAN
Which System Controller are you configuring [choose 0 or 1]: 0.
```

```
Hostname          IP Address (platform=sun15)
-----
netmask-i2        255,255,255,252
sun15-sc0-i2      10.3.1.1
sun15-sc1-i2      10.3.1.2
```

```
Do you want to accept these network settings?[y,n] n
```

```
MAN I2 Network Identification
```

```
Enter the IP network number (base address) for the I2 network: 172.16.0.0
```

```
Enter the netmask for the I2 MAN network [ 255.255.255.252 ]:[Return]
```

```
Hostname          IP Address (platform=sun15)
-----
netmask-i2        255.255.255.252
sun15-sc0-i2      172.16.0.1
sun15-sc1-i2      172.16.0.2
```

```
Do you want to accept these network settings?[y,n] y
```

```
Creating /.rhosts to facillitate file propagation ... done.
```

```
MAN Network configuration modified!
Changes will take effect on the next reboot.
```

```
The following changes are about to be applied to the "/etc/hosts" hosts file.
```

```
-----
ADD: 172.16.0.1   sun15-sc0-i2 #smsconfig-entry#
ADD: 172.16.0.2   sun15-sc1-i2 #smsconfig-entry#
-----
```

```
Update the hosts file, "/etc/hosts", with these changes?[y,n] y
```

```
Hosts file "/etc/hosts" has been updated.
```

```
The following information is about to be applied to the "/etc/netmasks" file.
```

```
-----
ADD network:172.16.0.0, mask:255.255.255.252
-----
```

```
Update the netmasks file, "/etc/netmasks", with these changes?[y,n] y
```

```
Netmasks file "/etc/netmasks" has been updated.
```

```
sc#
```

### 使用例 3 – SC から I1 ネットワーク上のドメイン B での内部ホスト名および IP アドレスの構成

```

sc0:# smsconfig -m I1 B

Enter the MAN hostname for DB-I1 [ sun15-b ]:domainB-i1
I could not automatically determine the IP address of domainB-i1.

Please enter the IP address of domainB-i1: 10.2.1.20

You should make sure that this host/IP address is set up properly in
the /etc/inet/hosts file or in your local name service system.

Network:I1 (DB-I1)  Hostname:domainB-i1  IP Address: 10.2.1.20

Do you want to accept these settings?[y,n] y

Creating /.rhosts to facillitate file propagation ... done.

MAN Network configuration modified!
Changes will take effect on the next reboot.

The following changes are about to be applied to the "/etc/hosts" hosts file.
-----
ADD:10.2.1.20  domainB-i1 #smsconfig-entry#
-----
Update the hosts file, "/etc/hosts", with these changes?[y,n] y
Hosts file "/etc/hosts" has been updated.

sc#

```

### 使用例 4 – ドメイン D を I1 ネットワークから除外する

ドメインを除外すると、そのドメイン上の SC から DR 操作 (rcfgadm) を行うことはできなくなります。ただし、そのドメイン自体への DR 操作 (cfgadm) は可能です。詳細については、『Sun Fire 15K/12K Dynamic Reconfiguration (DR) ユーザーマニュアル』を参照してください。

```

sc0: # smsconfig -m I1 D

Enter the MAN hostname for DB-I1 [ sun15-b ]: NONE
Network: I1 (DB-I1)
Hostname: NONE  IP Address: None

Do you want to accept these settings? [y,n] y

Creating /.rhosts to facillitate file propagation ... done.

sc#

```

## 使用例 5 – デフォルト以外のグループの構成

この例では、すべてのドメイン管理者とドメイン再構成者グループがデフォルトのグループのままになります。

```
sc0:# smsconfig -g
1) Edit current configuration
2) Restore default groups
3) Quit
Select one of the above options: 1
```

NOTE:In order to configure a new group the group must already exist.

The Platform Administrator group has configuration control, a means to get environmental status, the ability to assign boards to domains, power control and other generic service processor functions.

Enter the name of the Platform Administrator group [platadm]? **zeus**

The Platform Operator group has a subset of the platform privileges, limited generally to platform power control and platform status

Enter the name of the Platform Operator group [platoper]? **poseidon**

The Platform Service group posses platform service command privileges in addition to limited platform control and platform configuration status privileges

Enter the name of the Platform Service group [platsvc]? **kronos**

The Domain Administrator group posses domain control and status, and console access privileges (for the respective domain), but does not posses platform wide control or platform resource allocation privileges.

```
Enter the name of the Domain A Administrator group [dmnaadm]? [Return]
Enter the name of the Domain B Administrator group [dmnbadm]? [Return]
Enter the name of the Domain C Administrator group [dmncadm]? [Return]
Enter the name of the Domain D Administrator group [dmndadm]? [Return]
Enter the name of the Domain E Administrator group [dmneadm]? [Return]
Enter the name of the Domain F Administrator group [dmnfadm]? [Return]
Enter the name of the Domain G Administrator group [dmngadm]? [Return]
Enter the name of the Domain H Administrator group [dmnhadm]? [Return]
Enter the name of the Domain I Administrator group [dmniadm]? [Return]
Enter the name of the Domain J Administrator group [dmnjadm]? [Return]
Enter the name of the Domain K Administrator group [dmnkadm]? [Return]
Enter the name of the Domain L Administrator group [dmnladm]? [Return]
Enter the name of the Domain M Administrator group [dmnmadm]? [Return]
Enter the name of the Domain N Administrator group [dmnadm]? [Return]
Enter the name of the Domain O Administrator group [dmnoadm]? [Return]
Enter the name of the Domain P Administrator group [dmnpadm]? [Return]
Enter the name of the Domain Q Administrator group [dmnqadm]? [Return]
Enter the name of the Domain R Administrator group [dmnradm]? [Return]
```

The Domain Reconfiguration group posses a subset of the Domain Administration group privileges.This group has no domain control other than board power and reconfiguration (for the respective domain).

Enter the name of the Domain A Reconfiguration group [dmnarcfg]? [Return]

```

Enter the name of the Domain B Reconfiguration group [dmnbrocfg]?[Return]
Enter the name of the Domain C Reconfiguration group [dmnrcrfg]?[Return]
Enter the name of the Domain D Reconfiguration group [dmndrcfg]?[Return]
Enter the name of the Domain E Reconfiguration group [dmnercfg]?[Return]
Enter the name of the Domain F Reconfiguration group [dmnfrcfg]?[Return]
Enter the name of the Domain G Reconfiguration group [dmngrcfg]?[Return]
Enter the name of the Domain H Reconfiguration group [dmnhrcfg]?[Return]
Enter the name of the Domain I Reconfiguration group [dmnircfg]?[Return]
Enter the name of the Domain J Reconfiguration group [dmnjrcfg]?[Return]
Enter the name of the Domain K Reconfiguration group [dmnkrcfg]?[Return]
Enter the name of the Domain L Reconfiguration group [dmnlrcfg]?[Return]
Enter the name of the Domain M Reconfiguration group [dmnmrcfg]?[Return]
Enter the name of the Domain N Reconfiguration group [dmnncrfg]?[Return]
Enter the name of the Domain O Reconfiguration group [dmnocrfg]?[Return]
Enter the name of the Domain P Reconfiguration group [dmnprcfg]?[Return]
Enter the name of the Domain Q Reconfiguration group [dmnqrcfg]?[Return]
Enter the name of the Domain R Reconfiguration group [dmnrrcfg]?[Return]
Configuration complete.

```

```

Select one of the above options:
1) Edit current configuration
2) Restore default groups
3) Quit Select one of the above options: 3
sc#

```

### 使用例 6 – Secure Shell を使用するための SMS の構成

ssh が有効になっていることを確認します。有効になっていないと、このコマンドを実行してもエラーメッセージが表示され、smsconfig はそのまま終了します。

```

sc0: # smsconfig -s ssh
Enabling ssh...
Password/passphrase authentication can be ignored.
System will use ssh
Tue Oct 12 13:21:06 PST 2002
smsconfig complete.

```

### 使用例 7 – rsh を使用するための SMS の構成

```

sc0: # smsconfig -s rsh
System will use rsh
Tue Oct 12 13:25:06 PST 2002
smsconfig complete.

```

### 使用例 8 – 遠隔シェルの表示

```

sc0: # smsconfig -v
Remote Shell
=====
Remote Shell /usr/bin/rsh
Tue Oct 12 13:27:10 PST 2002
smsconfig complete.

```

### 使用例 9 — ドメイン管理者グループへのユーザーの追加とドメイン B ディレクトリへのアクセス権の構成

有効なユーザー名と有効な SMS グループおよびドメインを指定する必要があります。

```
sc0:# smsconfig -a -u fdjones -G admn B
fdjones has been added to the dmnBadmn group.
All privileges to domain B have been applied.
```

### 使用例 10 — ドメイン構成者グループへのユーザーの追加とドメイン C ディレクトリへのアクセス権の構成

有効なユーザー名と有効な SMS グループおよびドメインを指定する必要があります。

```
sc0:# smsconfig -a -u fdjones -G rcfg C
fdjones has been added to the dmnCrcfg group.
All privileges to domain C have been applied.
```

### 使用例 11 — プラットフォームディレクトリへのアクセス権の構成

有効なユーザー名と有効な SMS グループおよびプラットフォームを指定する必要があります。

```
sc0:# smsconfig -a -u jtd -G svc platform
jtd has been added to the platsvc group.
All privileges to the platform have been applied.
```

### 使用例 12 — ドメイン C ディレクトリへのアクセス権を持つユーザーの表示

```
sc0:# smsconfig -l C
fdjones
shea
```

### 使用例 13 — プラットフォームディレクトリへのアクセス権を持つユーザーの表示

```
sc0:# smsconfig -l platform
fdjones
jtd
```



**使用例 14** — ドメイン C ディレクトリへのユーザーアクセス権の削除

有効なユーザー名と有効な SMS グループを指定する必要があります。ユーザーがドメインへのアクセス権を持つ複数のグループに属している場合は、ディレクトリアクセスを取り消す前にすべてのグループから削除する必要があります。

```
sc0:# smsconfig -r -u fdjones -G rcfg C
fdjones has been removed from the dmnCrcfg group.
fdjones belongs to the dmnCadmn group
Access to domain C remains unchanged.
```

```
sc0:# smsconfig -r -u fdjones -G admn C
fdjones has been removed from the dmnCadmn group.
All access to domain C is now denied.
```

**使用例 15** — 無効なグループ名を使用した構成

有効な SMS グループを指定する必要があります。

```
sc0:# smsconfig -a -u fdjones -G staff D
ERROR:group staff does not exist
ABORTING.
```

**使用例 16** — グループと指定の組み合わせ

正しい領域指定とともにグループ名を指定する必要があります。admн グループは、どちらの指定でも機能します。

```
sc0:# smsconfig -a -u fdjones -G rcfg platform
ERROR:group rcfg cannot access the platform
ABORTING.
```

```
sc0:# smsconfig -a -u fdjones -G oper D
ERROR:group oper cannot access a domain
ABORTING.
```

**終了ステータス**

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。

**ファイル**

次の構成ファイルが必要です。

```
/etc/hostname.scman0
```

MAN Ethernet インタフェースファイル

/etc/hostname.scman1

MAN Ethernet インタフェースファイル

/etc/opt/SUNWSMS/config/MAN.cf

MAN デーモン構成ファイル

---

注 - MAN.cf は、内部 SMS システムファイルであり、サンの担当者以外は変更してはなりません。

---

#### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSr
Interface Stability	Evolving

#### 関連項目

mand(1M), ndd(1M), rsh(1), scp(1), ssh(1)

名前	smsconnectsc – 遠隔 SC コンソールへのアクセス
形式	smsconnectsc [-y n]
機能説明	<p>smsconnectsc は、停止した遠隔 SC にアクセスするためにローカル SC から遠隔 tip コンソールセッションを作成します。</p> <p>smsconnectsc は、ローカル SC にログインした際に、ローカル SC のポート B を遠隔 SC の RS-232 ポート A に接続するビットを有効化します。遠隔 SC は、停止中の SC です。いったん tty 接続が有効になると、smsconnectsc は、遠隔 SC に対する tip コンソールセッションを呼び出します。tip コンソールセッションを使用して、遠隔 SC で必要な処理を行うことができます。</p> <p>smsconnectsc が実行されるのは、遠隔 SC への外部接続が行われていない場合です。遠隔 SC からポート A への外部接続がアクティブである場合、smsconnectsc は失敗して、セッションが通常ハングアップします。終了するには、~. と入力します。</p> <p>作業が終わった後、セッションを終了させる方法は、ローカル SC に telnet と rlogin のどちらを使ってログインしたかによって、いくつかに分かれます。「拡張機能説明」を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h      ヘルプ。使用方法を表示します。</p>
<hr/> <p><b>注 -</b>    単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>	
	-n      すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。
	-y      すべてのプロンプトに自動的に「yes」と応答します。

## 拡張機能説明

## 使用法

smsconnectsc によって開始された tip コンソールウィンドウでは、行の先頭のチルド (~) は、tip コンソールで次のアクションを指示するエスケープ記号と解釈されます。

~. tip セッションが切断されます。

ローカル SC との telnet セッションを確立している場合、このように入力すると tip セッションは切断されますが、ローカル SC にはログインしたままです。

ローカル SC との rlogin セッションを確立している場合には、このように入力すると tip セッションだけでなく、rlogin セッションも切断されます。

---

**注 -** チルドは、ピリオドを入力するまでは画面に表示されません。

---

~~. tip セッションが切断されます。

~~. は rlogin のみで有効。ローカル SC との telnet セッションを確立している場合には、次のエラーメッセージが表示されます。

~.: Command not found

ローカル SC との rlogin セッションを確立している場合、このように入力すると tip セッションは切断されますが、ローカル SC にはログインしたままです。

---

**注 -** 画面には最初のチルド (~) は表示されません。また、2 つ目のチルドも、ピリオドを入力するまで表示されません。

---

rlogin は、チルドが新しい行の先頭に表示されている場合でも、チルド-エスケープのシーケンスを処理します。行の先頭でチルドシーケンスを送信する必要があり、rlogin を使用する場合は、2 つのチルド(最初のチルドはエスケープで、2 番目は rlogin に対するチルド)を使用します。もうひとつの方法としては、rlogin の実行中に、行の先頭にチルドを入力しないようにします。kill -9 コマンドを使用してコンソールセッションを終了すると、

smsconnectsc コマンドが実行されたウィンドウまたは端末は、raw モードになり、ハングしたように見えます。このような状況を回避するには、次のように入力します。

```
sc#:sms-user:> CTRL-j
sc#:sms-user:> stty sane
sc#:sms-user:> CTRL-j
```

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

**使用例 1** – ローカル SC から停止した遠隔 SC へ遠隔接続する

次の例では、ローカル SC を sc1、遠隔 SC を sc0 とします。ローカル SC に、プラットフォーム管理者としてログインします。

```
sc1:sms-user:> smsconnectsc
TTY connection is OFF. About to connect to other SC.
Do you want to continue (yes/no)? y
connected
sc0:sms-user:>
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

## 関連項目

rlogin(1M)、tip(1M)

名前	smsinstall - SMS 環境のインストール
形式	smsinstall <i>directory_name</i>  smsinstall -p  smsinstall -h
機能説明	<p>smsinstall(1M) は、メインまたはスペアの SMS システムコントローラ (SC) に SMS パッケージをインストールします。このコマンドで SMS をインストールする方法については、『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』を参照してください。</p> <p>smsinstall を Product 以外のディレクトリから実行するときには、絶対パスを使用する必要があります。</p> <p>エラーが発生すると、smsinstall はエラーメッセージを /var/sadm/system/logs/smsinstall に書き込みます。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h      ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 -    単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>
オペラント	<p>以下のオペラントがサポートされています。</p> <p><i>directory_name</i>    SMS パッケージを含むディレクトリのパス。</p> <p>Web からインストールしている場合、<i>directory_name</i> には Product ディレクトリのパスとして /download_directory/System_Management_Services_1_3/Product を指定します (download_directory は Web からダウンロードしたファイルの保存先ディレクトリ)。</p>

必要な  
グループ特権

拡張機能説明

使用例

CD-ROM からインストールしている場合には、*directory\_name* に指定する Product ディレクトリのパスは /cdrom/cdrom0/System\_Management\_Services\_1\_3/Product になります。

このコマンドを実行するには、スーパーユーザー特権が必要です。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティオプションと管理特権」を参照してください。

使用例 1 – CD-ROM または Web からの SMS のインストール

```
sc#:sms-user:> smsinstall download_directory
```

```
Installing SMS packages. Please wait. . .
pkgadd -n -d "/cdrom/cdrom0/System_Management_Services_1.3/Product" -a
/tmp/smsinstall.admin.24501 SUNWSMSr SUNWSMSop SUNWSMSdf SUNWSMSjh
SUNWSMSlp
SUNWSMSmn SUNWSMSob SUNWSMSod SUNWSMSpd SUNWSMSpo SUNWSMSpp SUNWSMSsu
SUNWScdvr.u SUNWufrx.u SUNWufu
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
205 blocks
```

```
Installation of <SUNWSMSr> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
61279 blocks
```

```
Installation of <SUNWSMSop> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
32 blocks
```

```
Installation of <SUNWSMSdf> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
2704 blocks
```

```
Installation of <SUNWSMSjh> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
5097 blocks
```

```
Installation of <SUNWSMSlp> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
1696 blocks
```

```
Installation of <SUNWSMSmn> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
576 blocks
```

```
Installation of <SUNWSMSob> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
1025 blocks
```

```
Installation of <SUNWSMSod> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
1025 blocks

Installation of <SUNWSMSPd> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
14763 blocks

Installation of <SUNWSMSPo> was successful.

Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.

Installation of <SUNWSMSPp> was successful.

Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
5 blocks

Installation of <SUNWSMSSu> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
479 blocks

Installation of <SUNWscdvr> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
33 blocks

Reboot client to install driver.
type=ddi_pseudo;name=flashprom uflash\N0
Installation of <SUNWufrx> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
13 blocks

Installation of <SUNWufu> was successful.

Verifying that all SMS packages are installed
.....OK
Checking that all installed SMS packages are correct
pkgchk -n SUNWSMSr SUNWSMSop SUNWSMSdf SUNWSMSjh SUNWSMSlp SUNWSMSmm
SUNWSMSob
SUNWSMSod SUNWSMSPd SUNWSMSPo SUNWSMSPp SUNWSMSSu SUNWscdvr SUNWufrx
SUNWufu
OK

Setting up /etc/init.d/sms run control script for SMS 1.3
New SMS version 1.3 is active

Attempting to restart daemon picld
/etc/init.d/picld stop
/etc/init.d/picld start

smsinstall complete. Log file is /var/sadm/system/logs/smsinstall.
```



## 使用例 2 – CD-ROM または Web からの SMS のインストール

```
sc0:sms-user:> smsinstall -p download_directory
Verifying that all SMS packages are installed
.....OK
Checking that all installed SMS packages are correct
pkgchk -n SUNWSMSr SUNWSMSop SUNWSMSdf SUNWSMSjh SUNWSMSlp SUNWSMSmn
SUNWSMSob
SUNWSMSod SUNWSMSpd SUNWSMSpo SUNWSMSPp SUNWSMSSu SUNWscdvr SUNWufrx
SUNWufu
OK
Setting up /etc/init.d/sms run control script for SMS 1.3
New SMS version 1.3 is active
Attempting to restart daemon picld
/etc/init.d/picld stop
/etc/init.d/picld start
smsinstall complete. Log file is /var/sadm/system/logs/smsinstall.
```

### 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。

### ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

/var/sadm/system/logs/smsinstall          smsinstall ログファイル

### 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

### 関連項目

smsconfig(1M)、smsupgrade(1M)

System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル

名前 | smsrestore – SMS 環境の復元

形式 | smsrestore *filename*

          | smsrestore -h

機能説明

smsrestore(1M) は、SMS の操作環境を smsbackup(1M) によって作成されたバックアップファイルから復元します。smsrestore を使用して、SMS ソフトウェアが新しいディスクにインストールされた後に SMS 環境を復元します。

smsrestore を実行する前に、フェイルオーバーを無効にして SMS を停止します。実行が完了すれば、SMS を起動してフェイルオーバーを有効に戻すことができます。SMS を手動で起動および停止する方法については、『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』を参照してください。

エラーが発生した場合は、smsrestore がエラーメッセージを /var/sadm/system/logs/smsrestore に書き込みます。

---

注 -   メイン SMS 環境が、たとえば、ドメインのシャットダウンなどでバックアップファイルの作成後に変更された場合、システムコントローラ用の現在のバックアップファイルを維持するには smsbackup(1M) をもう一度実行する必要があります。

---

オプション

次のオプションがサポートされています。

-h   ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 -   単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

---

## オペランド

次のオペランドがサポートされています。

*filename* smsbackup(1M) によって作成されたバックアップファイルの名前です。指定されたファイルが現在のディレクトリにない場合は、*filename* にはファイルのフルパスを含んでいる必要があります。このファイルは、システム、接続されているネットワークまたはテープデバイスのどこにでも配置できます。*filename* が指定されていない場合は、エラーメッセージが表示されます。

## 拡張機能説明

## 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、スーパーユーザー特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティオプションと管理特権」を参照してください。

## 使用例

使用例 1 – SMS の復元

```
sc# smsrestore sms_backup.1.0.cpio
```

使用例 2 – テープデバイス 0 からの SMS の復元

```
sc# smsrestore /dev/rmt/0/sms_backup.1.0.cpio
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

```
/var/sadm/system/logs/smsrestore
```

smsrestore ログファイル

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

smsrestore(1M)

関連項目

smsbackup(1M)

名前	smsupgrade - SMS ソフトウェアを最新バージョンにアップグレードします。
形式	smsupgrade [-b] [-r] <i>directory_name</i>  smsupgrade -p  smsupgrade -h
機能説明	smsupgrade(1M) は、メインまたはスペアの SMS システムコントローラ (SC) 上の SMS ソフトウェアをアップグレードします。このコマンドで SMS をアップグレードする方法については、『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』を参照してください。  smsupgrade を <b>Product</b> 以外のディレクトリから実行するときには、絶対パスを使用する必要があります。  エラーが発生すると、smsupgrade はエラーメッセージを /var/sadm/system/logs/smsupgrade に書き込みます。
オプション	次のオプションがサポートされています。  -b smsbackup(1M) と smsrestore(1M) のどちらも実行されません。  デフォルトでは、SMS のアップグレード前に smsbackup が実行され、/var/tmp ディレクトリにファイルがバックアップされます。  -h ヘルプ。使用方法を表示します。
注	注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
	-p 追加パッケージのインストールのみを実行します。smsbackup や smsrestore は実行されません。Web Start インストールの後に使用します。  -r アップグレード後に smsrestore(1M) を実行しません。  デフォルトでは、SMS のアップグレード後に smsrestore が実行され、/var/tmp ディレクトリ内のバックアップが復元されます。
オペランド	次のオペランドがサポートされています。

*directory\_name* SMS パッケージを含むディレクトリのパス。

Web からインストールしている場合、*directory\_name* には Product ディレクトリのパスとして `/download_directory/System_Management_Services_1_3/Product` を指定します (*download\_directory* は Web からダウンロードしたファイルの保存先ディレクトリ)。

CD-ROM からインストールしている場合には、*directory\_name* に指定する Product ディレクトリのパスは `/cdrom/cdrom0/System_Management_Services_1_3/Product` になります。

## 拡張機能説明

このコマンドを実行するには、スーパーユーザー特権が必要です。

## 必要なグループ特権

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプション管理特権」を参照してください。

## 使用例

### 使用例 1 – CD-ROM または Web からの SMS のアップグレード

```
sc0:sms-user:> smsupgrade directory_name

Attempting to stop daemon picld
/etc/init.d/picld stop

Verifying that all SMS packages are installed
.....OK

Backing up SMS to /var/tmp/sms_backup.1.3.cpio before
upgrade. Please wait. . .
smsbackup /var/tmp
smsbackup: Backup configuration file created: /var/tmp/
sms_backup.1.3.cpio
SMS backup complete.

Installing SMS packages. Please wait. . .
pkgadd -n -d "/cdrom/cdrom0/
System_Management_Services_1.3/Product" -a
/tmp/smsinstall.admin.26021 SUNWSMSr SUNWSMSop SUNWSMSdf
SUNWSMSjh SUNWSMSlp
SUNWSMSmn SUNWSMSob SUNWSMSod SUNWSMSpd SUNWSMSpo
SUNWSMpp SUNWSMSsu
SUNWscdvr.u SUNWufrx.u SUNWufu

Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights
reserved.
Use is subject to license terms.
205 blocks

Installation of <SUNWSMSr> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights
reserved.
Use is subject to license terms.
61279 blocks
```

Installation of <SUNWSMSop> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
Use is subject to license terms.  
32 blocks

Installation of <SUNWSMSdf> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
Use is subject to license terms.  
2704 blocks

Installation of <SUNWSMSjh> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
Use is subject to license terms.  
5097 blocks

Installation of <SUNWSMSlp> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
Use is subject to license terms.  
1696 blocks

Installation of <SUNWSMSmn> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
576 blocks

Installation of <SUNWSMSob> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
Use is subject to license terms.  
1025 blocks

Installation of <SUNWSMSod> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
Use is subject to license terms.  
1025 blocks

Installation of <SUNWSMSpd> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
Use is subject to license terms.  
14763 blocks

Installation of <SUNWSMSpo> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
Use is subject to license terms.

Installation of <SUNWSMSpp> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
Use is subject to license terms.  
5 blocks

Installation of <SUNWSMSsu> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
479 blocks

Installation of <SUNWscdvr> was successful.  
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
33 blocks  
Reboot client to install driver.  
type=ddi\_pseudo;name=flashprom uflash\N0

```
Installation of <SUNWufrx> was successful.
Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
13 blocks
```

```
Installation of <SUNWufu> was successful.
```

```
Verifying that all SMS packages are installed
.....OK
Checking that all installed SMS packages are correct
pkgchk -n SUNWSMSr SUNWSMSop SUNWSMSdf SUNWSMSjh SUNWSMSlp
SUNWSMSmn SUNWSMSob
SUNWSMSod SUNWSMSpd SUNWSMSpo SUNWSMSpp SUNWSMSsu
SUNWscdvr SUNWufrx SUNWufu
OK
Setting up /etc/init.d/sms run control script for SMS 1.3
New SMS version 1.3 is active
Restoring SMS from /var/tmp/sms_backup.1.3.cpio after
upgrade. Please wait. . .
smsrestore /var/tmp/sms_backup.1.3.cpio

Attempting to start daemon picld
/etc/init.d/picld start

smsupgrade complete. Log file is /var/sadm/system/logs/
smsupgrade.
#
```

## 使用例 2 - Web Start 後の SMS のインストール

```
sc0:sms-user:> smsupgrade -p directory_name
Verifying that all SMS packages are installed
.....OK
Checking that all installed SMS packages are correct
pkgchk -n SUNWSMSr SUNWSMSop SUNWSMSdf SUNWSMSjh SUNWSMSlp SUNWSMSmn
SUNWSMSob
SUNWSMSod SUNWSMSpd SUNWSMSpo SUNWSMSpp SUNWSMSsu SUNWscdvr SUNWufrx
SUNWufu
OK
Setting up /etc/init.d/sms run control script for SMS 1.3
New SMS version 1.3 is active
Attempting to restart daemon picld
/etc/init.d/picld stop
/etc/init.d/picld start
smsinstall complete. Log file is /var/sadm/system/logs/smsinstall.
```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。



## ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

/var/sadm/system/logs/smsupgrade

smsupgrade ログファイル

/var/temp/sms\_backup.1.3.cpio

SMS バックアップファイル

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Aailability	SUNWSMSop

## 関連項目

smsbackup(1M)、smsconfig(1M)、smsinstall(1M)、smsrestore(1M)

『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』

名前	smsversion - アクティブな SMS ソフトウェアのバージョンを他のインストール済みバージョンに変更
形式	smsversion <i>new_version</i>  smsversion -t  smsversion -h
機能説明	smsversion(1M) を使用すれば、インストール済みの連続する 2 つのバージョンの SMS を切り替えることができます。

---

注 - SMS 1.1 と SMS 1.3 は連続するリリースではないため、`smsversion` で互いに切り替えることはできません。新規インストールが必要になります。詳細は、『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』を参照してください。

---

`smsversion` を使用すれば、同じオペレーティング環境に共存している 2 つのバージョンの SMS を相互に切り替えることができます。ただし、切り替えを行うには、次の条件を満たす必要があります。

条件	説明
新機能	古いバージョンの SMS は、新しいバージョンの SMS がサポートしている機能をサポートしていない場合があります。SMS を古いバージョンに切り替えると、これら新機能が失われる場合があります。また、新機能の設定が失われる場合もあります。
フラッシュ PROM の違い	SMS のバージョンを切り替える場合、CPU フラッシュ PROM を、正しいファイルを使用して再フラッシュする必要があります。これらファイルは、 <code>/opt/SUNWSMS/&lt;SMS_version&gt;/firmware</code> ディレクトリに格納されています。バージョンを切り替えた後、 <code>flashupdate(1M)</code> を使用して PROM を再フラッシュします。フラッシュ PROM の更新方法の詳細については、 <code>flashupdate</code> マニュアルページ、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 11 章、および『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』を参照してください。

コマンド行引数をすべて省略した場合、`smsversion` は対象のシステムコントローラに正しくインストールされている各バージョンの SMS のリストを表示します。このリストから任意のバージョンを選択すると、`smsversion` は現在の構成環境のコピーを保存し、選択されたバージョンの有効化に必要なすべてのソフトウェアリンクの切り替えを実行します。有効化するバージョンは、`smsversion` のコマンド行で指定することも可能です。

`smsversion` による切り替え処理が完了すると、選択したバージョンの SMS がアクティブになります。`smsversion` によって自動保存された構成を復元するには、`smsrestore(1M)` を使用します。切り替え前のバージョンを、`smsversion` による切り替えで自動的に復元することはできません。

以前の構成を復元するには、次の操作を行います。

- フェイルオーバーを無効化して SMS を停止します。その後、`smsrestore` を実行します。

---

注 - 復元したバックアップの作成後に、`smsconfig -m` でネットワーク構成が変更されている場合は、ここで `smsconfig -m` を実行して再起動してください。

---

- SMS を開始してフェイルオーバーを有効化します。SMS を手動で開始および停止する方法については、『System Management Services (SMS) 1.3 インストールマニュアル』を参照してください。

`smsversion` の実行中にエラーが発生すると、エラーメッセージが `/var/sadm/system/logs/smsversion` に出力されます。

### オプション

次のオプションがサポートされています。

`-h` ヘルプ。使用方法を表示します。

---

注 - 単一で使用します。`-h` に追加して指定されたオプションは無視されます。

---

`-t` 現在アクティブな SMS のバージョンを表示して終了します。

### オペランド

次のオペランドがサポートされています。

`version_number` 新たに有効化する SMS のバージョン (リリース番号)

### 拡張機能説明

#### 必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、スーパーユーザー特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.3 管理者マニュアル』の第 2 章「SMS のセキュリティーオプションと管理特権」を参照してください。

### 使用例

**使用例 1** - 1 つのバージョンの SMS がインストールされている場合のバージョンの表示

SMS の 1 つのバージョンのみがインストールされているときにアクティブバージョンを表示して終了します。

```
sc# smsversion -t
1.2
```

## 使用例 2 – アクティブな SMS のバージョンを切り替える

対象のシステムコントローラにインストールされている SMS の各バージョンが表示されます。アクティブでない任意のバージョンを選択し、切り替えを実行します。

バージョンを切り替える前に、必ず SMS を停止してください。

```
sc# smsversion
smsversion: Active SMS version 1.2
smsversion: SMS version 1.2 installed
smsversion: SMS version 1.3 installed
Please select from one of the following installed SMS versions.
1) 1.2
2) 1.3
3) Exit
Select version: 2
You have selected SMS Version 1.3

Is this correct? [y,n] y

smsversion: Upgrading SMS from 1.2> to 1.3>.
To move to a different version of SMS an archive of
critical files will be created. What is the name of
the directory or tape device where the archive will be
stored? [/var/tmp] [return]

smsversion: Backup configuration file created: /var/tmp/
sms_backup.1.2.cpio
smsversion: Switching to target version 1.3>.
smsversion: New Version 1.3> Active
smsversion: Active SMS version 1.3 >
To use the previous SMS configuration settings type:
smsrestore /var/tmp/sms_backup.1.2.cpio

NOTE: When switching to another SMS version,
the user must choose (via use of smsrestore) to restore the
configuration settings from the previously active version.
```

## 使用例 3 – 使用中の SMS より古いバージョンに切り替える

```

sc# smsversion 1.2
smsversion: Active SMS version 1.3 >
You have requested SMS Version 1.2

Is this correct? [y,n] y
smsversion: Downgrading SMS from 1.3> to 1.2>.
smsversion: SMS version 1.2 installed
To move to a different version of SMS an archive of
critical files will be created. What is the name of
the directory or tape device where the archive will be
stored? [/var/tmp] [return]

smsversion: Backup configuration file created: /var/tmp/
sms_backup.1.3.cpio
smsversion: Switching to target version 1.2>.
smsversion: New Version 1.2> Active
smsversion: Active SMS version 1.2 >
To restore previous the SMS configuration setting type:
smsrestore /var/tmp/sms_backup.1.3.cpio

```

## 終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

## ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

/var/sadm/system/logs/smsversion

smsversion ログファイル

## 属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Aailability	SUNWSMSop

## 関連項目

smsbackup(1M)、smsrestore(1M)

名前	ssd – SMS 起動デーモン				
形式	ssd [-f <i>startup_file</i> ] ssd [-i <i>message</i> ]				
機能説明	<p>ssd(1M) は、SMS のすべての主要デーモンおよびサーバーを起動、停止、および監視します。オプションを指定しないで実行すると、ssd は、ssd が開始および監視するデーモンおよびサーバーをリストする <code>ssd_start</code> ファイルから読み取ります。</p> <p>このプログラムを手動で起動しないでください。ssd(1M) は、Solaris ソフトウェア実行コントロールスクリプトで自動的に起動され、再起動のために定期的に監視されます。</p>				
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><code>-f <i>startup_file</i></code> デフォルトの <code>ssd_start</code> ファイルの代わりにこのファイルを使用します。</p> <p><code>-i <i>message</i></code> プラットフォームログファイルに通知メッセージを書き込みます。sms 起動スクリプトによって指定および使用されます。</p>				
ファイル	<p>次のファイルがサポートされています。</p> <p><code>/etc/opt/SUNWSMS/startup/ssd_start</code> ssd 用のデフォルト起動ファイル</p> <p><code>/etc/opt/SUNWSMS/startup/sms</code> SMS 用のデフォルト起動ファイル</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、<code>attributes(5)</code> を参照してください。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				

名前 | tmd – タスク管理デーモン

形式 | tmd [-t *number*]

機能説明 | tmd(1M) は、SMS のスケジュールなどのタスク管理サービスを提供します。このサービスの目的は、ハードウェアテストおよび構成ソフトウェアの同時起動中に発生する衝突の数を削減することです。

このデーモンは `ssd(1M)` によって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。

オプション | 次のオプションがサポートされています。

-t *number*      このオプションを使用すると、指定した数の同時起動を抑制できます。値は整数で 1 以上でなければなりません。

---

注 –      デフォルト値を変更すると、システムの機能に不正な影響を与えることがあります。サンのサービス担当者から指示された場合以外は、このパラメタを修正しないでください。

---

終了ステータス | 次の終了値が返されます。

0          正常に終了しました。

0 以外      エラーが発生しました。

属性 | 次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目 | `ssd(1M)`



名前	wcapp - wPCI アプリケーションデーモン				
形式	wcapp				
機能説明	<p>wcapp(1M) は、Sun Fire Link クラスタ機能を実装するためのデーモンであり、ドメイン側のドライバからの要求を処理し、外部の Sun Fire Link ファブリックマネージャサーバーからの情報要求に応答します。wcapp は、Solaris 8 2/02 オペレーティング環境 (またはそれ以降のリリース) に含まれている Java 仮想マシン (JVM) 上で動作します。</p> <p>wcapp は、Sun Fire 15K/12K システム内のすべてのドメインを対象として、Sun Fire Link クラスタを管理する役割を担当します。wcapp は Java 側で一連の Java Remote Method Invocation (RMI) インタフェースをエクスポートし、Sun Fire Link ファブリックマネージャサーバーが、このインタフェースを使ってクラスタを設定および監視します。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) によって自動的に起動されます。このデーモンをコマンド行から明示的に起動しないでください。</p>				
終了ステータス	<p>次の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了しました。</p> <p>0 以外 エラーが発生しました。</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	ssd(1M)				